

も兄弟に申譯が無からうと思つた……』

芳子は頭を垂れて黙つて居た。

『それは危険でした。それでも別にお怪我もなくつて結構でした。』

『え、まア。』

父親と時雄は暫くその機關破裂のことに就いて語り合つた。不圖、芳子は、

『お父様、家では皆な變ることは御座いません？』

『うむ、皆な達者ぢや。』

『母さんも……』

『うむ、今度も私が忙しいけえナ、母に來て貰ふやうに言うてぢやつたが、矢張、私の方が好いちやらうと思つて……』

『兄さんも御達者？』

『うむ、あれも此の頃は少し落附いて居る。』

彼は是する中に、午飯の膳が出た。芳子は自分の室に戻つた。食事を終つて、茶を飲みながら、時雄は前からの其の問題を語り續けた。

『で、あなたは何うして不賛成？』

『賛成しようにもしままいにも、また問題になり居りませんけえ。今、假に許して、二人一緒にするに致しても、男が二十二で、同志社の三年生では……』

『それは、左様ですが、人物を御覽の上、將來の約束でも……』

『いや、約束など、そんなことは致しますまい。私は人物を見たわけでありませんけえ、よく知りませんけどナ、女學生の上京の途次を要して途中に泊らせたり、年來の恩ある神戸教會の恩人を一朝にして捨て去つたりするやうな男ですけえ、とても話にはならぬと思ひますぢや。此の間、芳から母へよこした手紙に、其の男が苦しんで居るぢやで、何うか御察し下すつて、私の學費を少くしても好いから、早稻田に通ふ位の金を出して呉れと書いてありましたけな、何かさういふ計畫で、芳がだまされて居るんではないですか。』

『そんなことは無いでせうと思ふですが……』

『何うも怪しいことがあるです。芳子と約束が出来て、すぐ宗教が厭になつて文學が好きになつたと言ふのも可笑しし、其の後をすぐ追つて出て來て、貴方などの御説諭も聞かずに、衣食に苦しんでまでも此の東京に居るなども意味があり相ですわい。』

『それは戀の惑溺であるかも知れませんが善意に解釋することも出来ませんが、』

『それにしても許可するのせぬのとは問題になりませんけえ、結婚の約束は大きなことでして……そ

れには其者の身分も調べて、此方の身分との釣合も考へなければなりませんし、血統を調べなければなりません。それに人物が第一です。貴方の御覽になる所では、秀才だとか仰しやつてですが……』

『いや、左様言ふわけでも無かつたです。』

『一體、人物は何ういふ……』

『それは却つて母さんなどが御存じだと言ふことですが。』

『何アに、須磨の日曜學校で一二度會つたことがある位、妻もよく知らん相ですけえ。何でも神戸では多少秀才とか何とか言はれた男で、芳は女學院に居る頃から知つて居るのでせうがナ。説教や祈禱などを遣らせると、大人も及ばぬやうな巧いことを遣り居つた相ですけえ。』

『それで話が演説調になるのだ、形式的になるのだ、あの厭な上目を使ふのは、祈禱をする時の表情だ、』と時雄は心の中に合點した。あの厭な表情で若い女を迷はせるのだなと續いて思つて厭な氣がした。

『それにしても、結局は何うしませう？ 芳子さんを伴れてお歸りになりますか。』

『されば……成たけは連れて歸り度くないと思ひますがナ。村に娘を伴れて突然歸ると、何うも際立つて面白くありません。私も妻も種々村の慈善事業や名譽職などを遣つて居りますけえ、今度のことなどがばつとしますと、非常に困る場合もあるです……で、私は、あなたの仰しやる通り、出來得べくば、男を元の京都に歸して、此處一二年、娘は猶お世話になり度いと存じて居りますぢやが……、』

『それが好いですな。』

と時雄は言つた。

二人の間柄に就いての談話も一二あつた。時雄は京都嵯峨の事情、其の以後の經過を話し、二人の間には神聖の靈の戀のみ成立つて居て、汚い關係は無いであらうと言つた。父親はそれを聽いて點頭きはしたが、『でもまア、其方の關係もあるものとして見なければなりませんまい、』と言つた。

父親の胸には今更娘に就いての悔恨の情が多かつた。田舎ものの虚榮心の爲めに神戸女學院のやうな、ハイカラな學校に入れて、其の寄宿舎生活を行はせたことや、其の切なる希望を容れて小説を學ぶべく東京に出したことや、多病の爲めに言ふがまゝにして餘り檢束を加へなかつたことや、いろ／＼なことが簇々と胸に浮んだ。

一時間後にはわざわざ迎ひに遣つた田中が此の室に来て居た。芳子も其の傍に庇髪を俛れて談話を聞いて居た。父親の眼に映じた田中は元より氣に入つた人物ではなかつた。其の白縞の袴を着け、紺がすりの羽織を着た書生姿は、輕蔑の念と憎惡の念とを其の胸に漲らしめた。其の所有物を奪つた憎むべき男といふ感じは、曾て時雄が其の下宿で此の男を見た時の感じと甚だよく似て居た。

田中は袴の髪を正して、しやんと坐つた儘、多く二尺先位の疊をのみ見て居た。服従といふ態度より反抗といふ態度が歴々として居た。何うも少し固くなり過ぎて、芳子を自分の自由にする或る權利を持

つて居るといふ風に見えて居た。

談話は眞面目に且つ烈しかった。父親は其の破廉恥を敢て正面から責めはしないが、をり／＼にがい皮肉を其の言葉の中へ交へた。初めは時雄が口を切つたが、中頃から重に父親と田中とが語つた。父親は縣會議員をした人だけあつて、言葉の抑揚頓挫が中々巧みであつた。演説に慣れた田中も時々沈黙させられた。二人の戀の許可不許可も問題に上つたが、それは今研究すべき題目でないとして却けられ、當面の京都歸還問題が論ぜられた。

戀する二人——殊に男に取つては、此の分離は甚だつらいらしかつた。男は宗教的資格を全く失つたといふこと、歸るべく家を國をも持たぬといふこと、一三月來飄零の結果漸く東京に前途の光明を認め始めたのに、それを捨て、去るに忍びぬといふことなどを楯として、頻りに歸國の不可能を主張した。父親は懇々として説いた。

『今東京都に歸れないといふ、それは歸れないに違ひない。けれど今の場合である。愛する女子なら其の女子の爲めに犠牲になれぬといふことはあるまいぢや。京都に歸れないから田舎に歸る。歸れば自分の目的が達せられぬといふが、其處を言ふのぢや。其處を犠牲になつても好からうと言ふのぢや。』

田中は黙して下を向いた。容易に諾しさうにも無い。

先程から黙つて聞いて居た時雄は、男が餘りに頑固なのに、急に聲を勵して「君、僕は先程から聞いて居たが、あれほどに言ふお父さんの言葉が解らんですか。お父さんは、君の事を思はず、破廉恥を問はず、將來もし縁があつたら、此の戀愛を承諾せぬではない。君もまだ年が若い、芳子さんも今修業最中である。だから二人は今暫く此の戀愛問題を未解決の中に其の儘にして置いて、そして其の行末を見ようと言ふのが解らんですか。今の場合、二人は何うしても一緒には置かれぬ。何方か此の東京を去らなくつてはならん。此の東京を去るといふことに就いては、君が先づ去るのが至當だ。何故かと謂へば、君は芳子の後を追うて來たのだから。』

『よう解つて居ります、』と田中は答へた。『私が悪いのでございますから、私が一番に去らなければなりません。先生は今、此の戀愛を承諾して下されぬではないと仰しやつたが、お父様の先程の御言葉では、まだ満足致されぬやうなわけでした……』

『何ういふ意味です。』
と時雄は反問した。

『本當に約束せぬといふのが不満だと言ふのですぢやらう、』と、父親は言葉を入れて、『けれど、これは先程もよく話した筈ぢやけえ。今の場合、許可、不許可といふことは出來ぬぢや。獨立することも出來ぬ修業中の身で、二人一緒に此の世の中に立つて行かうと言やるは、何うも不信用ぢや。だから私は今三四年はお互に勉強するが好いぢやと思ふ。眞面目ならば、かうまで言つた話は解らんけりやならん。』

私が一時を瞞着して、芳を他に嫁けるとか言ふのやなら、それは不満足ぢやらう。けれど私は神に誓つて言ふ、先生を前に置いて言ふ、三年は芳を私から進んで嫁に遣るやうなことはせんぢや。人の世はエホバの思召次第、罪の多い人間は其の力ある審判を待つより他に爲方が無いけえ、私は芳は君に進ずるとまで言ふことは出来ん。今の心が許さんけえ、今度のことは、神の思召に適つて居ないと思ふけえ。三年経つて、神の思召に適ふか何うか、それは今から豫言は出来んが、君の心が、眞實眞面目で誠實であつたなら、必ず神の思召に適ふこと、思ふぢや。』

『あれほどお父さんが解つて居らつしやる、』と時雄は父親の言葉を受けて、『三年、君が爲めに待つ。君を信用するに足りる三年の時日を君に與へると言はれたのは、實に此の上ない恩恵でせう。人の娘を誘惑するやうな奴には眞面目に話をする必要がないと言つて、此の儘芳子をつれて歸られても、君は一言も恨むせきはないのですのに、三年待たう、君の眞心に見えるまでは、芳子を他に嫁けるやうなことはすまいと言ふ。實に恩恵ある言葉だ。許可すると言つたより一層恩義が深い。君はこれが解らんですか。』

田中は低頭して顔をしかめると思つたら、涙がはら／＼と其の頬を傳つた。

一座は水を打つたやうに静かになつた。

田中は溢れ出づる涙を手の拳で拭つた。時雄は今ぞ時と、

『何うです、返事を爲給へ。』

『私などは何うなつても好うおます。田舎に埋れても構はんです。』

また涙を拭つた。

『それはいかん。さう反抗的に言つたつて爲方がない。腹の底を打明けて、互に不満足のないやうにしようとする爲めのこの會合です。君がたつて、田舎に歸るのが厭だとならば、芳子を國に歸すばかりです。』

『二人一緒に東京に居ることは出来んですか？』

『それは出来ん。監督上出来ん。二人の將來の爲めにも出来ん。』

『それでは田舎に埋れてもようおます！』

『いゝえ、私が歸ります。』と芳子も涙に聲を震はして、『私は女……女です……あなたさへ成功して下されば、私は田舎に埋れても構やしません、私が歸ります。』

一座はまた沈黙に落ちた。

暫くしてから、時雄は調子を改めて、

『それにしても、君は何うして京都に歸れんです。神戸の恩人に一伍一什を話して、今迄の不心得を謝して、同志社に戻つたら好いぢやありませんか。芳子さんが文學志願だから、君も文學家にならんければならんといふやうなことはない。宗教家として、神學者として、牧師として大に立つたなら好い

でせう。』

『宗教家にはもうとてもようありません。人に對つて教を説くやうな豪い人間ではないでおますで……それに、残念ですのは、三月の間苦勞しまして、實は漸くある親友の世話で、衣食の道が開けましたで……田舎に埋れるには忍びませんで。』

三人は猶語つた。話は遂に一小段落を告げた。田中は今夜親友に相談して、明日か明後日までに確乎たる返事を齎らさうと言つて、一先づ歸つた。時計はもう午後四時、冬の日は暮近く、今迄室の一隅に照つて居た日影もいつか消えて了つた

一室は父親と時雄と二人になつた。

『何うも煮え切らない男ですわい、』と父親はそれとなく言つた。

『何うも形式的で、甚だ要領を得んです。もう少し打明けて、ざつくばらんに話して呉れると好いですけれど……』

『何うも中國の人間はさうは行かんですけえ、人物が小さくつて、小細工で、すぐ人の股を潜らうとするですわい。關東から東北の人は丸で違ふですがナア。悪いのは悪い、好いのは好いと、眞情を吐露して了ふけえ、好いですけどもナ。何うもいかん。小細工で、小理窟で、めそ〜泣き居つた……』

『見て居さつしやい、明日屹度快諾しやせんけえ、何の彼のと理窟をつけて、歸るまいとするけえ。』時雄の胸に、ふと二人の關係に就いての疑惑が起つた。男の烈しい主張と芳子を己が所有とする權利があるやうな態度とは、時雄に此の疑惑を起さしむるの動機となつたのである。

『で、二人の間の關係を何う御觀察なすつたです。』

時雄は父親に問うた。

『さうですな。關係があると思はんけりやなりますまい。』

『今の際、確めて置く必要があると思ふですが、芳子さんに、嵯峨行の辯解をさせませうか。今度の戀は嵯峨行の後に始めて感じたことだと言つてましたから、其證據になる手紙があるでせうから。』

『まア、其處までせんでも……』

父親は關係を信じつゝもその事實となるのを恐れるらしい。

運悪く其處に芳子は茶を運んで來た。

時雄は呼留めて、其の證據になる手紙があるだらう、其の身の潔白を證する爲めに、其の前後の手紙を見せ給へと迫つた。

これを聞いた芳子の顔は俄かに赧くなつた。さも困つたといふ風が歴々として顔と態度とに顯はれた。

『あの頃の手紙は此の間皆な焼いて了りましたから。』其の聲に低かつた。

『焼いた？』

『え、。』

芳子は顔を俛れた。

『焼いた？ そんなことは無いでせう。』

芳子の顔は愈々赧くなつた。時雄は激さざる得なかつた。事實は恐しい力でかれの胸を刺した。

時雄は立つて厠に行つた。胸は苛々して、頭脳は眩惑するやうに感じた。欺かれたといふ念が烈しく心頭を衝いて起つた。厠を出ると、其處に——障子の外に、芳子はおどおどした様子で立つて居る。

『先生——本當に、私は焼いて了つたのですから。』

『うそをお言ひなさい、』と、時雄は叱るやうに言つて、障子を烈しく閉めて室内に入つた。

九

父親は夕飯の馳走になつて旅宿に歸つた。時雄の其の夜の煩悶は非常であつた。欺かれたと思ふと、業が煮えて爲方が無い。否、芳子の靈と肉——其の全部を一書生に奪はれながら、兎に角其の戀に就いて眞面目に盡したかと思ふと腹が立つ。其の位なら——あの男に身を任せて居た位なら、何も其の處女

の節操を奪ふには當らなかつた。自分も大膽に手を出して、性慾の満足を買へば好かつた。かゝる思ふと、今迄上天の境に置いた美しい芳子は、賣女か何ぞのやうに思はれて、其の體は愚か、美しい態度も表情も卑しむ氣になつた。で、其の夜は悶え悶えて殆ど眠られなかつた。様々の感情が黒雲のやうに胸を通つた。其の胸に手を當て、時雄は考へた。いつそかうして呉れようかと思つた。何うせ、男に身を任せて汚れて居るのだ。此の儘かうして、男を京都に歸して、其の弱點を利用して、自分の自由にしようかと思つた。と、種々なことが頭腦に浮ぶ。芳子が其の二階に泊つて寢て居た時、もし自分がこつそり其の二階に登つて行つて、遣瀨なき戀を語つたら何うであらう。危坐して自分を諫るかも知れぬ。聲を立て、人を呼ぶかも知れぬ。それとも又せつない自分の情を汲んで犠牲になつて呉れるかも知れぬ。さて犠牲になつたとして、翌朝は何うであらう、明かな日光を見ては、流石に顔を合せるにも忍びぬに相違ない。日長けるまで、朝飯をも食はずに寢て居るに相違ない。其の時、モウバッサンの『父』といふ短篇を思ひ出した。ことに少女が男に身を任せて後烈しく泣いたことの書いてあるのを痛切に感じたが、それを又今思ひ出した。かと思ふと、此の暗い想像に抵抗する力が他の一方から出て、盛にそれと争つた。で、煩悶又煩悶、懊惱また懊惱、寢返を幾度となく打つて二時、三時の時計の音をも聞いた。芳子も煩悶したに相違なかつた。朝起きた時は蒼い顔を爲て居た。朝飯をも一椀で止した。成たけ時雄の顔に逢ふのを避けて居る様子であつた。芳子の煩悶は其の秘密を知られたといふよりも、それを隠し

て置いた非を悟つた煩悶であつたらしい。午後ちよつと出て来たいと言つたが、社へも行かずに家に居た時雄はそれを許さなかつた。一日はかくて過ぎた。田中から何等の返事もなかつた。

芳子は午飯も夕飯も食べたくないとて食はない。陰鬱な氣が一家に充ちた。細君は夫の機嫌の悪いのと、芳子の煩悶して居るのに胸を痛めて、何うしたかと思つた。昨日の話の模様では、萬事圓滿に收まりさうであつたのに……細君は一椀なりと召上らなくては、お腹が空いて爲方があるまいと、それを侑めに二階へ行つた。時雄はわびしい薄暮を苦い顔をして酒を飲んで居た。やがて細君が下りて来た。何うして居たと時雄は聞くと、薄暗い室に洋燈も點けず、書き懸けた手紙を机に置いて打伏して居たとの話。手紙？ 誰に遣る手紙？ 時雄は激した。そんな手紙を書いたつて駄目だと宣告しようと思つて、足音高く二階に上つた。

『先生、後生ですから。』

と祈るやうな聲が聞えた。机の上に打伏したまゝである。『先生、後生ですから、もう、少し待つて下さい。手紙に書いて、さし上げますから。』

時雄は二階を下りた。暫くして下女は細君に命ぜられて、二階に洋燈を點けに行つたが、下りて来る時、一通の手紙を持つて来て、時雄に渡した。

時雄は渴した心を以て讀んだ。

先生

私は墮落女學生です。私は先生の御厚意を利用して、先生を欺きました。其の罪はいくらお詫びしても許されませぬほど大きいと思ひます。先生、何うか弱いものと思つてお憐れみ下さい。先生に教へて頂いた新しい明治の女子としての務め、それを私は行つて居りませんでした。矢張、私は舊派の女、新しい思想を行ふ勇氣を持つて居りませんでした。私は田中に相談しまして、何んなことがあつても此の事ばかりは人に打明けまい。過ぎたことは爲方が無いが、これからは清淨な戀を續けようと約束したのです。けれど、先生、先生の御煩悶が皆な私の至らない爲めであると思ひますと、ちつとしては居られません。今日は終日其のことで胸を痛めました。何うか先生、此の憐れなる女をお憐み下さい。先生にお縋り申すより他、私には道が無いので御座います。

芳子

先生 おもと

時雄は今更に地の底に此身を沈めらるゝかと思つた。手紙を持つて立上つた。其の激した心には、芳子が此の懺悔を敢てした理由——總てを打明けて縋らうとした態度を解釋する餘裕が無かつた。二階の階梯をけた、ましく踏鳴らして上つて、芳子の打伏して居る机の傍に嚴然として坐つた。

『かうなつては、もう爲方がない。私はもう何うすることも出来ぬ。此の手紙は貴嬢に返す、此の事

に就いては、誓つて何人にも沈黙を守る。兎に角、あなたが師として私を信頼した態度は新しい日本の女として恥しくない。けれどかうなつては、あなたが國に歸るのが至當だ。今夜——これから直ぐ父様の處に行きませう、そして一伍一什を話して、早速、國に歸るやうにした方が好い。』

で、飯を食ひ了るとすぐ、支度をして家を出た。芳子の胸にさまざまの不服、不平、悲哀が溢れたであらうが、しかも時雄の嚴なる命令に背くわけには行かなかつた。市ヶ谷から電車に乗つた。二人相並んで座を取つたが、しかも一語をも言葉を変へなかつた。山下門で下りて、京橋の旅館に行くと、父親は都合よく在宅して居た。一伍一什——父親は特に怒りもしなかつた。唯同行して歸國するのを成べく避けたいらしかつたが、しかもそれより他に路は無かつた。芳子は泣きも笑ひもせず、唯、運命の奇しきに呆るゝといふ風であつた。時雄は捨てた積りで芳子を自分に任せることは出来ぬかと言つたが、父親は當人が親を捨てゝもといふならばいざ知らず、普通の状態に於いては無論許さうとは爲なかつた。芳子も亦親を捨てゝまでも、歸國を拒むほどの決心が附いて居らなかつた。で、時雄は芳子を父親に預けて歸宅した。

十

田中は翌朝時雄を訪うた。かれは大勢の既に定まつたのを知らずに、己の事情の歸國に適せぬことを幾々として説かうとした。靈肉共に許した戀人の例として、いかやうにしても離れまいとするのである。時雄の顔には得意の色が上つた。

『いや、もう其の問題は決着したです。芳子が一伍一什をすつかり話した。君等は僕を欺いて居たといふことが解つた。大變な神聖な戀でしたナ。』

田中の顔は俄かに變つた。羞恥の念と激昂の情と絶望の悶えとが其の胸を衝いた。かれは言ふ所を知らなかつた。

『もう、止むを得んです、』と時雄は言葉を續いで、『僕はこの戀に關係することが出来ません。いや、もう厭です。芳子を父親の監督に移したです。』

男は黙つて坐つて居た。蒼い其の顔には肉の戦慄が歴々と見えた。不圖、急に、辭儀をして、かうしては居られぬといふ態度で、此處を出て行つた。

午前十時頃、父親は芳子を伴うて來た。愈々今夜六時の神戸急行で歸國するので、大體の荷物は後から送つて貰ふとして、手廻の物だけ纏めて行かうといふのであつた。芳子は自分の二階に上つて、其の儘荷物の整理に取懸つた。

時雄の胸は激して居つたが、以前よりは輕快であつた。二百餘里の山川を隔てゝ、もう其の美しい表情をも見ることが出来なくなると思ふと、言ふに言はれぬ侘しさを感じるが、其の戀せる女を競争者の手

から父親の手に移したことは尠くとも愉快であつた。で、時雄は父親と寧ろ快活に種々なる物語に耽つた。父親は田舎の紳士によく見るやうな書畫道楽、雪舟、應舉、容齋の繪畫、山陽、竹山、海屋、茶山の書を愛し、其の名幅を無數に藏して居た。話は自づからそれに移つた。平凡なる書畫物語はこの一室に一時榮えた。

田中が来て、時雄に逢ひたいと言つた。八疊と六疊との中じきりを閉めて、八疊で逢つた。父親は六疊に居た。芳子は二階の一室に居た。

『御歸國になるんでせうか。』

『え、何うせ、歸るんでせう。』

『芳さん一緒に。』

『それは左様でせう。』

『何時ですか、お話し下されますまいか。』

『何うも今の場合、お話しすることは出来ませんな。』

『それでは一寸でも……芳さんに逢はせて頂く譯には参りますまいか。』

『それは駄目でせう。』

『では、お父様は何方へお泊りですか、一寸番地をうかがひ度いですが。』

『それも僕には教へて好いか悪いか解らんですから。』

取附く島がない。田中は黙つて暫し坐つて居たが、其の儘辭儀をして去つた。

晝飯の膳がやがて八疊に並んだ。これがお別れだと謂ふので、細君は殊に注意して酒肴を揃へた。時雄も別れのしるしに、三人相並んで會食しようとしたのである。けれど芳子に何うしても食べ度くないといふ。細君が説勸めても來ない。時雄は自身二階に上つた。

東の窓を一枚明けたばかり、暗い一室には本やら、雜誌やら、着物やら、帶やら、襪やら、行李やら、支那鞆やらが足の踏み度も無い程に散らばつて居て、塵埃の香が夥しく鼻を衝く中に、芳子は眼を泣腫して荷物の整理を爲て居た。三年前、青春の希望湧くがごとき心を抱いて東京に出て來た時のさまに比べて、何等の悲惨、何等の暗黒であらう。すぐれた作品一つ得ず、かうして田舎に歸る運命かと思ふと、堪らなく悲しくならずには居られまい。

『折角支度したから、食つたら何うです。もう暫くは一緒に飯も食べられんから。』

『先生——』

と、芳子は泣出した。

時雄も胸を衝いた。師としての温情と責任とを盡したかと烈しく反省した。かれも泣き度いほど佗しくなつた。光線の暗い一室、行李や書籍の散逸せる中に、戀せる女の歸國の涙、これを慰むる言葉も無

かつた。

午後三時、車が三臺來た。玄關に出した行李、支那靴、信玄袋を車夫は運んで車に乗せた。芳子は栗梅の被布を着て、白いリボンを髪に挿して、眼を泣腫して居た。送つて出た細君の手を堅く握つて、

『奥さん、左様なら……私、また屹度來てよ、屹度來てよ、來ないで置きはしないわ。』

『本當にね、又出ていらつしやいよ。一年位したら、屹度ね。』

と、細君も堅く手を握りかへした。その眼には涙が溢れた。女心の弱く、同情の念は其の小さい胸に漲り渡つたのである。

冬の日のや、薄寒き牛込の屋敷町、最先に父親、次に芳子、次に時雄といふ順序で車は走り出した。細君と下婢とは名残を惜んで其の車の後影を見送つて居た。其の後に隣の細君が此の俄かの出立を何事かと思つて見て居た。猶其の後の小路の曲り角に、茶色の帽子を被つた男が立つて居た。芳子は二度、三度まで振返つた。

車が麴町の通りを日比谷へ向ふ時、時雄の胸に、今の女學生といふことが浮んだ。前に行く車上の芳子、高い二百三高地巻、白いリボン、やゝ猫脊勝なる姿、かういふ形をして、かういふ事情の下に、荷物と共に父に伴れられて歸國する女學生はさぞ多いことであらう。芳子、あの意志の強い芳子でさへかうした運命を得た。教育家の喧しく女子問題を言ふのも無理はない。時雄は父親の苦痛と芳子の涙と其の身

の荒涼たる生活とを思つた。路行く人の中にはこの荷物を満載して、父親と中年の男子に保護されて行く花の如き女學生を意味ありけに見送るものもあつた。

京橋の旅館に着いて、荷物を纏め、會計を済ました。此の家は三年前、芳子が始めて父に伴れられて出京した時泊つた旅館で、時雄は此處に二人を訪問したことがあつた。三人は其の時と今とを胸に比較して、感慨多端であつたが、しかも互に避けて面にはさはなかつた。五時には新橋の停車場に行つて、二等待合室に入つた。

混雑また混雑、群集また群集、行く人送る人の心は皆空になつて、天井に響く物音が更に旅客の胸に反響した。悲哀と喜悅と好奇心とが停車場の到る處に巴渦を卷いて居た。一刻毎に集り來る人の群、殊に六時の神戸急行は乗客が多く、二等室も時の間に肩摩轂撃の光景となつた。時雄は二階の壺屋からサンドウィッチを二箱買つて芳子に渡した。切符と入場切符も買つた。手荷物のチツキも貰つた。今は時刻を待つばかりである。

此の群集の中に、もしや田中の姿が見えはせぬかと三人皆思つた。けれど其の姿は見えなかつた。ベルが鳴つた。群集はざろくくと改札口に集つた。一刻も早く乗込まうとする心が燃えて、焦立つて、その混雑は一通りでなかつた。三人は其の間を辛うじて抜けて、廣いプラットフォームに出た。そして最も近い二等室に入つた。

後からも續々と旅客が入つて來た。長い旅を寢て行かうとする商人もあつた。吳あたりに歸るらしい軍人の佐官もあつた。大阪言葉をむき出しに、喋々と雑話に耽ける女連もあつた。父親は白い毛布を長く敷いて、傍に小さい鞆を置いて、芳子と相並んで腰を掛けた。電氣の光が車内に差し渡つて、芳子の白い顔が丸で浮彫のやうに見えた。父親は窓際に来て、幾度も厚意のほどを謝し、後に残ることに就いて、萬事を囑した。時雄は茶色の中折帽、七子の三紋の羽織といふ扮装で、窓際に立盡して居た。

發車の時間は刻々に迫つた。時雄は二人の此の旅を思ひ、芳子の將來のことを思つた。其の身と芳子とは盡きざる縁があるやうに思はれる。妻が無ければ、無論自分は芳子を貰つたに相違ない。芳子も亦喜んで自分の妻になつたであらう。理想の生活、文學的の生活、堪へ難き創作の煩悶をも慰めて呉れるだらう。今の荒涼とした胸をも救つて呉れることが出来るだらう。『何故、もう少し早く生れなかつたでせう、私も奥様時分に生れて居れば面白かつたでせうに、……』と妻に言つた芳子の言葉を思ひ出した。此の芳子を妻にするやうな運命は永久其の身に來ぬであらうか。この父親を自分の舅と呼ぶやうな時は來ぬだらうか。人生は長い、運命は奇しき力を持つて居る。處女でないといふことが——一度節操を破つたといふことが、却つて年多く子供ある自分の妻たることを容易ならしむる條件となるかも知れぬ。運命、人生——會て芳子に教へたツルゲネーフの『プニンとバブリン』が時雄の胸に上つた。露西亞のすぐれた作家の描いた人生の意味が今更のやうに胸を撲つた。

時雄の後に、一群の見送人が居た。其の蔭に、柱の傍に、いつ來たか、一箇の古い中折帽を冠つた男が立つて居た。芳子は此を認めて胸を轟かした。父親は不快な感を抱いた。けれど、空想に耽つて立盡した時雄は、其の後に其の男が居るのを夢にも知らなかつた。

車掌は發車の笛を吹いた。

汽車は動き出した。

十一

さびしい生活、荒涼たる生活は再び時雄の家に音おとづ信れた。子供を持ってあまして喧しく叱る細君の聲が耳について、不愉快な感を時雄に與へた。

生活は三年前の舊の轍にかへつたのである。

五日目に、芳子から手紙が來た。いつもの人懐しい言文一致でなく、禮儀正しい候文で、『昨夕恙なく歸宅致し候儘御安心被下度、此の度はまことに御忙しき折柄種々御心配ばかり相懸け候うて申譯も無之、幾重にも御詫申上候、御前に御高恩をも謝し奉り、お詫も致し度候ひしが、兎角は胸迫りて最後の會合すら辭いみ候心、お察し被下度候、新橋にての別離。硝子戸の前に立ち候毎に、茶色の帽子うつり候やうの心地致し、今猶まざらんと御姿見るのに候、山北邊より雪降り候うて、湛井よりの山道十五里、悲しきこ

とのみ思ひ出で、かの一茶が「これがまアつひの住家か雪五尺」の名句痛切に身にしみ申候、父よりいづれ御禮の文奉り度存居候へども今日は町の市日にて手引き難く、年失禮私より宜敷御禮申上候、まだまだ御目汚し度きこと澤山に有之候へども激しく胸騒ぎ致し候ま、今日はこれにて筆擱き申候、』と書いてあつた。

時雄は雪の深い十五里の山道と雪に埋れた山中の田舎町とを思ひ遣つた。別れた後其の儘にして置いた二階へ上つた。懐かしさ、戀しさの餘り、微かに残つた其の人の面影を偲ぼうと思つたのである。武藏野の寒い風の盛に吹く日で、裏の古樹には潮の鳴るやうな音が凄じく聞えた。別れた日のやうに東の窓の雨戸を一枚明けると、光線は流るゝやうにさし込んだ。机、本箱、罎、紅血、依然として元の儘で、戀しい人はいつもの様に學校に行つて居るのではないかと思はれる。時雄は机の抽斗を明けて見た。古い油の染みたりボンが其の中に捨て、あつた。時雄はそれを取つて匂ひを嗅いだ。暫くして立上つて襖を明けて見た。大きな柳行李が三箇の細引で送るばかりに絡けてあつて、其向うに、芳子が常に用ひて居た蒲團——萌黄唐草の敷蒲團と、綿の厚く入つた同じ模様の夜着とが重ねられてあつた。時雄はそれを引出した。女のなつかしい油の匂と汗のほびとが言ひも知らず時雄の胸をときめかした。夜着の襟の天鷲絨の際立つて汚れて居るのに顔を押し付けて、心のゆくばかりなつかしい女の匂ひを嗅いだ。性慾と悲哀と絶望とが忽ち時雄の胸を襲つた。時雄は其の蒲團を敷き、夜着をかけ、冷めたい汚れた

天鷲絨の襟に顔を埋めて泣いた。

薄暗い一室、戸外には風が吹き暴れて居た。

一兵卒

渠は歩き出した。

銃が重い、背囊が重い、脚が重い、アルミニウム製の金椀かなわんが腰の剣に當つてカタ／＼と鳴る。其音が興奮した神経を夥しく刺戟するので、幾度かそれを直して見たが、何うしても鳴る。カタ／＼と鳴る。もう厭になつて了つた。

病氣は本當に治つたので無いから、息が非常に切れる。全身には悪熱悪寒が絶えず往來する。頭腦が火のやうに熱して、顛顛が烈しい脈を打つ。何故、病院を出た？ 軍醫が後が大切だと言つてあれほど留めたのに、何故病院を出た？ かう思つたが、渠はそれを悔いはしなかつた。敵の捨て、遁けた汚ない洋館の板敷、八疊位の室に、病兵、負傷兵が十五人、衰頹と不潔と叫喚と重苦しい空氣と、それに凄じい蠅の群集、よく二十日も辛抱して居た。麥飯の粥すしほかりに少許の食鹽、よくあれでも飢餓を凌いだ。かれは病院の背後の便所を思出してゾツとした。急造の穴の掘りやうが浅いので、臭氣が鼻と眼とを烈しく撲つ。蠅がワンと飛ぶ。石灰の灰色に汚れたのが胸をむか／＼させる。

日の光がある、雲がある、山がある、——凄じい聲が急に耳に入つたので、立留つてかれは其方を見た。さつきの汽車がまだ彼處に居る。釜の無い煙筒の無い長い汽車を、支那苦力くわくりが幾百人となく寄つてたかつて、丁度蟻が大きな獲物を運んで行くやうに、えつさらおつさら押しして行く。

夕日が晝のやうに斜にさし渡つた。

さつきの下士が彼處に乗つて居る。あの一段高い米の叵の積荷の上に突立つて居るのが彼奴だ。苦しくつてとても歩けんから、鞍山站まで乗せて行つて呉れと頼んだ。すると彼奴め、兵を乗せる車ではない、歩兵が車に乗るといふ法があるかと呶鳴つた。病氣だ、御覽の通りの病氣で、脚氣をわづらつて居る。鞍山站の先まで行けば隊が居るに相違ない。武士は相見互といふことがある、何うか乗せて呉れつて、たつて頼んでも、言ふことを聞いて呉れなかつた。兵、兵と云つて、筋が少いと馬鹿にしやがる。金州でも、得利寺でも兵のお蔭で戦争に勝つたのだ。馬鹿奴、悪魔奴！

蟻だ、蟻だ、本當に蟻だ。まだ彼處に居やがる。汽車もあゝなつてはお了ひだ。ふと汽車——豊橋を發つて來た時の汽車が眼の前を通り過ぎる。停車場は國旗で埋められて居る。萬歳の聲が長く／＼續く。と忽然最愛の妻の顔が眼に浮ぶ。それは門出の時の泣顔ではなく、何うした場合であつたか忘れたが、

心から可愛いと思つた時の美しい笑顔だ。母親がお前もうお起きよ、學校が遅くなるよと揺起す。かれの頭はいつか子供の時代に飛返つて居る。裏の入江の船の船頭が禿頭を夕日にてか〜と光らせながら子供の一群に向つて嘸鳴つて居る。其の子供の群の中にかれも居た。

過去の面影と現在の苦痛不安とが、はつきりと區劃を立て、居りながら、しかもそれがすれすれに摺寄つた。銃が重い、背囊が重い、脚が重い。腰から下は他人のやうで、自分で歩いて居るのか居ないのか、それすらはつきりとは解らぬ。

褐色の道路——砲車の轍や靴の跡や草鞋の跡が深く印したまゝに石のやうに乾いて固くなつた路が前に長く通じて居る。かういふ滿洲の道路にはかれは殆ど愛想をつかして了つた。何處まで行つたら此の路はなくなるのか。何處まで行つたらこんな路は歩かなくつてもよくなるのか。故郷のいさご路、雨上の濕つた海岸の砂路、あの滑かな心地の好い路が懐かしい。廣い大きい道ではあるが、一として滑かな平かな處が無い。これが雨が一日降ると、壁土のやうに柔かくなつて、靴どころか、長い脛も其半を没して了ふのだ。大石橋の戦争の前の晩、暗い闇の泥濘を三里もこね廻した。脊の上から頭の髪まではねが上つた。あの時は砲車の援護が任務だつた。砲車が泥濘の中に陥つて少しも動かぬのを押し押して押し通した。第三聯隊の砲車が先に出て陣地を占領して了はなければ明日の戦は出来なかつたのだ。そして終夜動いて、翌日はあの戦争。敵の砲弾、味方の砲弾がぐん〜と厭な音を立て、頭の上を鳴つて通つた。九十度近い暑い日が腦天からぢり〜と照り附けた。四時過ぎに、敵味方の歩兵は共に接近した。小銃の音が豆を煎るやうに聞える。時々シュツシュツと耳の傍を掠めて行く。列の中であつと言つたものがある。はツと思つて見ると、血がだら〜と暑い夕日に彩られて、其の兵士はガツクリ前に踏つた。胸に弾丸が中つたのだ。其の兵士は善い男だつた。快活で、酒脱で、何事にも氣が置けなかつた。新城町のもので、若い鼻があつた筈だ。上陸當座は一緒によく徴發に行つたつけ。豚を逐ひ廻したつけ。けれどあの男は最早此世の中に居ないのだ。居ないとは何うしても思へん。思へんが居ないのだ。

褐色の道路を、糧餉を満載した車がぞろ〜行く。騾車、驢車、支那人の爺のウオ〜ウイウイが聞える。長い鞭が夕日に光つて、一種の音を空氣に傳へる。路の凸凹が烈しいので、車は波を打つやうにしてガタ〜動いて行く。苦しい、息が苦しい。かう苦しくつては爲方が無い。頼んで乗せて貰はうと思つてかれは驅出した。

金椀がカタ〜鳴る。烈しく鳴る。背囊の中の雜品や彈丸袋の彈丸が氣た、ましく躍り上る。銃の臺が時々脛を打つて飛び上るほど痛い。

『オーい、オーい。』

聲が立たない。

『オーい、オーい。』

全身の力を絞つて呼んだ。聞えたに相違ないが振向いても見ない。何うせ碌なことではないと知つて居るだらう。一時思止まつたが、また驅出した。そして今度は其最後の轎に漸く追着いた。

米の吠が山のやうに積んである。支那人の爺が振向いた。丸顔の厭な顔だ。有無を云はせず其の車に飛乗つた。そして吠と吠との間に身を横へた。支那人は爲方が無いといふ風でウオー〜と馬を進めた。ガタ〜と車は行く。

頭腦がぐらぐらして天地が廻轉するやうだ。胸が苦しい。頭が痛い。脚の腓の處が押附けられるやうで、不愉快で、不愉快で爲方が無い。やゝともすると胸がむかつきさうになる。不安の念が凄じい力で全身を襲つた。と同時に、恐ろしい動搖がまた始まつて、耳からも頭からも、種々の聲が囁いて来る。此前にもかうした不安はあつたが、これほどではなかつた。天にも地にも身の置き處が無いやうな氣がする。

野から村に入つたらしい。鬱蒼とした楊の縁がかれのの上に靡いた。楊樹にさし入つた夕日の光が細な葉を一葉々々明らかに見せて居る。不恰好な低い屋根が地震でもあるかのやうに動搖しながら過ぎて行く。ふと氣がつくと、車は止つて居た。かれは首を舉げて見た。

楊樹の蔭を成して居る處だ。車輛が五臺ほど續いて居るのを見た。突然肩を捉へるものがある。

日本人だ、わが同胞だ、下士だ。

『貴様は何だ?』

かれは苦しい身を起した。

『何うして此の車に乗つた?』

理由を説明するのがつらかつた。いや口を聞くのも厭なのだ。

『此車に乗つちやいかん。さうでなくつてさへ、荷が重過ぎるんだ。お前は十八聯隊だナ。豊橋だナ。』

點頭いて見せる。

『何うかしたのか。』

『病氣で、昨日まで大石橋の病院に居たものですから。』

『病氣がもう治つたのか。』

無意味に點頭いた。

『病氣でつらいだらうが、下りて呉れ。急いで行かんけりやならんのだから。遼陽が始まつたでナ。』

『遼陽!』

此一語はかれの神経を十分に刺戟した。

『もう始つたですか。』

『聞えんかあの砲が……。』

さつきから、天末に一種のどろきが始つたさうなとは思つたが、まだ遼陽では無いと思つて居た。

『鞍山站は落ちたですか。』

『一昨日落ちた。敵は遼陽の手前で一防禦遣るらしい。今日の六時から始つたといふ噂だ！』

一種の遠い微かなる轟、仔細に聞けば成程砲聲だ。例の厭な音が頭上を飛ぶのだ。歩兵隊が其間を縫つて進撃するのだ。血汐が流れるのだ。かう思つた渠は一種の恐怖と憧憬とを覺えた。戦友は戦つて居る。日本帝國の爲めに血汐を流して居る。

修羅の蒼が想像される。炸彈の壯觀も眼前に浮ぶ。けれど七八里を隔てた此の滿洲の野は、さびしい秋風が夕日を吹いて居るばかり、大軍の潮の如く過ぎ去つた村の平和はいつもに異らぬ。

『今度の戦争は大きいだらう。』

『左様さ。』

『一日では勝敗がつくまい。』

『無論だ。』

今の下士は夥伴の兵士と砲聲を耳にしつゝ、頻りに語合つて居る。糧餉を満載した車五輛、支那苦力の

爺連も圈を爲して何事かを饒舌り立て、居る。驢馬の長い耳に日がさして、をりをりけた、ましい暗聲が耳を劈く。楊樹の彼方に白い壁の支那民家が五六軒續いて、庭の中に槐の樹が高く見える。井戸がある。納屋がある。足の小さい年老いた女が覺束なく歩いて行く。楊樹を透して向うに、廣い荒漠たる野が見える。褐色した丘陵の連續が指される。其の向うには紫色がかつた高い山が蜿蜒として居る。砲聲は其處から來る。

五輛の車は行つて了つた。

渠はまた一人取残された。海城から東煙臺、甘泉堡、この次の兵站部所在地は新臺子と言つて、まだ一里位ある。其處迄行かなければ宿るべき家も無い。

行くことにして歩き出した。

疲れ切つて居るから難儀だが、車よりは却つて好い。胸は依然として苦しいが、何うも致し方が無い。また同じ褐色の路、同じ高粱の畑、同じ夕日の光、レールには例の汽車が又通つた。今度は下り坂で、速力が非常に早い。釜の附いた汽車よりも早い位に目まぐるしく谷を越えて駛つた。最後の車輛に翻つた國旗が高梁畑の絶間々々に見えたり隠れたりして、遂にそれが見えなくなつても、其の車輛の轟は聞える。其の轟と交つて、砲聲が間斷なしに響く。

街道には久しく村落が無いが、西方には楊樹のやゝ暗い繁茂が到る處にかたまつて、其の間からちらちら白色褐色の民家が見える。人の影はあたりを見廻してもないが、青い細い炊煙は糸のやうに淋しく立聽る。

夕日は物の影を總て長く曳くやうになつた。高粱の高い影は二間幅の廣い路を蔽つて、更に向う側の高粱の上に蔽ひ重つた。路傍の小さな草の影も夥しく長く、東方の丘陵は浮出すやうにはつきりと見える。さびしい悲しい夕暮は譬へ難い一種の影の力を以て迫つて來た。

高粱の絶えた處に來た。忽然、かれは其の前に驚くべき長大なる自分の影を見た。肩の銃の影は遠い野の草の上にあつた。かれは急に深い悲哀に打たれた。

草叢には蟲の聲がする。故郷の野で聞く蟲の聲とは似もつかぬ。この似つかぬことと廣い野原とが何となく其の胸を痛めた。一時途絶えた追懐の情が流るゝやうに漲つて來た。

母の顔、若い妻の顔、弟の顔、女の顔が走馬燈のごとく巡回する。樺の樹で圍まれた村の舊家、團樂せる平和な家庭、續いて其身が東京に修業に行つた折の若々しさが憶ひ出される。神樂坂の夜の賑ひが眼に見える。美しい草花、雜誌店、新刊の書、角を曲ると賑やかな寄席、待合、三味線の音、仇めいた女の聲、あの頃は楽しかつた。戀した女が仲町に居て、よく遊びに行つた。丸顔の可愛い娘で、今でも戀しい。此の身は田舎の豪家の若旦那で、金には不自由を感じなかつたから、随分面白いことを爲た。

それにあの頃の友人は皆世に出て居る。此の間も蓋平で第六師團の大尉になつて威張つて居る奴に邂逅した。

軍隊生活の束縛ほど残酷な者はないと突然思つた。と、今日は不思議にも平生の様に反抗とか犠牲とかいふ念は起らずに、恐怖の念が盛に燃えた。出發の時、此の身は國に捧げ君に捧げて遺憾が無いと誓つた。再びは歸つて來る氣は無いと、村の學校で雄々しい演説を爲た。當時は元氣旺盛、身體壯健であつた。で、さう言つても勿論死ぬ氣はなかつた。心の底には花々しい凱旋を夢みて居た。であるのに今忽然起つたのは死に對する不安である。自分はとても生きて還ることは覺束ないといふ氣が烈しく胸を衝いた。此の病、此の脚氣、假令此の病は治つたにしても戰場は大なる牢獄である。いかに藻掻いても焦つてもこの大なる牢獄から脱することは出來ぬ。得利寺で戦死した兵士が其の以前かれに向つて、

『何うせ遁れられぬ穴だ。思ひ切りよく死ぬサ。』と言つたことを思出した。

かれは疲勞と病氣と恐怖とに襲はれて、如何にしてこの恐ろしい災厄を遁るべきかを考へた。脱走？それも好い、けれど捕へられた曉には、此の上も無い汚名を被つた上に同じく死！さればとて前進すれば必ず戦争の巷の人とならなければならぬ。戦争の巷に入れば死を覺悟しなければならぬ。かれは今始めて、病院を退院したことの愚をひしと胸に思當つた。病院から後送されるやうにすればよかつた……と思つた。

もう駄目だ、萬事休す、遁れるに路が無い。消極的の悲觀が恐ろしい力で其胸を襲つた。と、歩く勇氣も何も無くなつて了つた。止度なく涙が流れた。神が此の世にゐますなら、何うか救けて下さい、何うか遁路を教へて下さい。これからは何んな難儀もする！ どんな善事もする！ どんなことにも背かぬ。渠はおい／＼聲を擧げて泣出した。

胸が間斷なしに込み上げて来る。涙は小兒でもあるやうに頬を流れる。自分の體が此の世の中になく、なるといふことが痛切に悲しいのだ。かれの胸には此迄幾度も祖國を思ふの念が燃えた。海上の甲板で、軍歌を歌つた時には悲壯の念が全身に充ち渡つた。敵の軍艦が突然出て来て、一砲彈の爲めに沈められて、海底の藻屑となつても遺憾がないと思つた。金州の戦場では機關銃の死の叫びの唯中を地に伏しつ、勇ましく進んだ。戦友の血に塗れた姿に胸を撲つたこともないではないが、これも國の爲めだ、名譽だと思つた。けれど人の血の流れたのは自分の血の流れたのではない。死と相面しては、いかなる勇者も戦慄する。

脚が重い、氣怠るい、胸がむかつく。大石橋から十里、二日の路、夜露、惡寒、確かに持病の脚氣が昂進したのだ。流行腸胃熱は治つたが、急性の脚氣が襲つて來たのだ。脚氣衝心の恐しいことを自覺してかれは戦慄した。何うしても免れることが出來ぬのかと思つた。と、居ても立つても居られなくなつて、體がしびれて脚がすくんだ。——おい／＼泣きながら歩く。

野は平和である。赤い大きい日は地平線上に落ちんとして、空は半ば金色半ば暗碧色になつて居る。金色の鳥の翼のやうな雲が一片動いて行く。高粱の影は影と蔽ひ重つて、荒涼とした秋風が渡つた。遼陽方面の砲聲も今まで盛に聞えて居たが、いつか全く途絶えて了つた。

二人連の上等兵が追ひ越した。

すれ違つて、五六間先に出たが、ひとりが戻つて來た。

『おい、君、何うした？』

かれは氣が附いた。聲を擧げて泣いて歩いて居たのが氣恥かしかつた。

『おい、君？』

再び聲は懸つた。

『脚氣なもんですから。』

『脚氣？』

『はア。』

『それは困るだらう。餘程悪いのか。』

『苦しいです。』

『それア困つたナ、脚氣では衝心でもすると大變だ。何處まで行くんだ。』

「隊が鞍山站の向うに居るだらうと思ふんです。」

「だつて、今日其處まで行けはせん。」

「はア。」

「まア、新臺子まで行くさ。其處に兵站部があるから行つて醫師に見て貰ふさ。」

「まだ遠いですか？」

「もうすぐ其處だ。それ向うに丘が見えるだらう。丘の手前に鐵道線路があるだらう。其處に國旗が立つて居る、あれが新臺子の兵站部だ。」

「其處に醫師が居るでせうか。」

「軍醫が一人居る。」

蘇生したやうな氣がする。

で、二人に跟いて歩いた。二人は氣の毒がつて、銃と背囊とを持つて呉れた。

二人は前に立つて話しながら行く。遼陽の今日の戦争の話である。

「様子は解らんかな。」

「まだ遣つてるんだらう。煙臺で聞いたが、敵は遼陽の一里手前で一支へして居るさうだ。何でも首山堡とか言つた。」

「後備が澤山行くナ。」

「兵が足りんのだ。敵の防禦陣地はすばらしいものださうだ。」

「大きな戦争になりさうだナ。」

「一日砲聲がしたからナ。」

「勝てるかしらん。」

「負けちや大變だ。」

「第一軍も出たんだらうナ。」

「勿論さ。」

「一つ旨く背後を斷つて遣り度い。」

「今度は屹度旨く遣るよ。」

と言つて耳を傾けた。砲聲がまた盛んに聞え出した。

新臺子の兵站部は今雑沓を極めて居た。後備旅團の一箇聯隊が着いたので、レイルの上、家屋の蔭、糧餉の傍などに軍帽と銃剣とがみちみちて居た。レイルを挟んで敵の鐵道援護の營舎が五棟ほど立つて居るが、國旗の翻つた兵站本部は、雑沓を重ねて、兵士が黒山のやうに集つて、長い劍を下けた士官が

幾人となく出たり入つたりして居る。兵站部の三個の大釜には火が盛に燃えて、烟が薄暮の空に濃く靡いて居た。一箇の釜は飯が既に炊けたので、炊事軍曹が大きな聲を擧げて、部下を叱咤して、集る兵士に頻りに飯の分配を遣つて居る。けれど此の三箇の釜は到底この多數の兵士に夕飯を分配することが出来ぬので、其大部分は白米を飯盒はんがふに貰つて、各自に飯を作るべく野に散つた。やがて野の處々に高粱の火が幾つとなく燃もやされた。

家屋の彼方では、徹夜して戦場に送るべき彈藥彈丸の箱を汽車の貨車に積込んで居る。兵士、輪卒の群が一生懸命に奔走して居るさまが薄暮の微かな光に絶えなく見える。一人の下士が貨車の荷物の上に高く立つて、頻りにその指揮をして居た。

日が暮れても戦争は止まぬ。鞍山站の馬鞍のやうな山が暗くなつて、其の向うから砲聲が斷續する。

渠は此處に来て軍醫をもとめた。けれど軍醫どころの騒ぎではなかつた。一兵卒が死なうが生きようがそんなことを問ふ場合ではなかつた。渠は二人の兵士の盡力の下に、纔かに一盒の飯を得たばかりであつた。爲方がない、少し待て。この聯隊の兵が前進して了つたら、軍醫をさがして、伴れて行つて遣るから、先づ落着いて居れ。此處から真直に三四町行くと一棟の洋館がある。其の洋館の入口には、酒保が今朝から店を開いて居るからすぐ解る。其の奥に入つて、寢て居れとのことだ。

渠はもう歩く勇氣は無かつた。銃と背囊とを一人から受取つたが、それを脊負ふと危なく倒れさうに

なつた。眼がぐらぐらする。胸がむかつく。脚が氣怠い。頭腦は烈しく旋回する。

けれど此處に倒れるわけには行かない。死ぬにも隠家を求めなければならぬ。さうだ、隠家……。何んな處でも好い。静かな處に入つて寝たい、休息したい。

闇の路が長く續く。ところどころに兵士が群を成して居る。不圖豊橋の兵營を憶ひ出した。酒保に行つて隠れてよく酒を飲んだ。酒を飲んで、軍曹をなぐつて、重營倉に處せられたことがあつた。路がいかに遠い。行つても行つても洋館らしいものが見えぬ。三四町と言つた。三四町どころか、もう十町も來た。間違つたのかと思つて振返る——兵站部は燈火の光、篝火の光、闇の中を行違ふ兵士の黒い群、彈藥箱を運ぶ懸聲が夜の空氣を劈いて響く。

此處等はもう静かだ。あたりに人の影も見えない。俄かに苦しく胸が迫つて來た。隠れ家がなければ、此處で死ぬのだと思つて、がつくり倒れた。けれども不思議にも前のやうに悲しくもない、思ひ出もない。空の星の閃めきが眼に入つた。首を擧げてそれとなくあたりを眺みまはした。

今まで見えなかつた一棟の洋館がすぐ其の前にあるのに驚いた。家の中には燈火が見える。丸い赤い提燈が見える。人の聲が耳に入る。

銃を力に辛うじて立上つた。

成程、其の家屋の入口に酒保らしい者がある。暗いからわからぬが、何か釜らしいものが戸外の一隅

にあつて、薪の餘燼ぼんきしが赤く見えた。薄い煙が提燈を掠めて淡く靡いて居る。提燈に、しるこ一杯五錢と書いてあるのが、胸が苦しくつて苦しくつて爲方がないにも拘らずはつきりと眼に映じた。

『しるこはもうお終ひか。』

と言つたのは、其前に立つて居る一人の兵士であつた。

『もうお終ひです。』

といふ聲が戸内から聞える。

内を覗くと、明かな光、西洋蠟燭が二本裸で點ともつて居て、饅頭や小間物などの山のやうに積まれてある中央の一段高い處に、肥つた、口髭の濃い、莞爾した三十男が坐つて居た。店では一人の兵士がタオルを展げて見て居た。

傍を見ると、暗いながら、低い石階が眼に入つた。此處だとかかは思つた。兎に角休息することが出来ると思ふと、言ふに言はれぬ満足を先づ心に感じた。靜かにぬき足して其の石階を登つた。中は暗い。よく判らぬが廊下になつて居るらしい。最初の戸と覺しき處を押して見たが開かない。二歩三歩進んで次の戸を押したが矢張開かない。左の戸を押しても駄目だ。

猶奥へ進む。

廊下は突當つて了つた。右にも左にも道が無い。困つて右を押すと、突然、闇が破れて扉が明いた。

室内が見えるといふ程ではないが、そこそなく星明りがして、前に硝子窓があるのが解る。

銃を置き、背囊を下し、いきなりかれは横に倒れた。そして重苦しい息をついた。まアこれで安息所を得たと思つた。

満足と共に新しい不安が頭を擡げて來た。倦怠、疲勞、絶望に近い感情が鉛のごとく重苦しく全身を壓した。思ひ出が皆な片々で、電光のやうに早いかと思ふと牛の喘歩あえぎのやうに遅い。間斷なしに胸が騒ぐ。重い、氣怠けだらい脚が一種の壓迫を受けて疼痛を感じて來たのは、かれ自からにも好く解つた。膝ひざのところところがすきくくと痛む。普通の疼痛ではなく、丁度こむらが反つた時のやうである。

自然と身體を藻搔かすには居られなくなつた。綿のやうに疲れ果てた身でも、この壓迫には敵はない。無意識に輾轉反側した。

故郷のことを思はぬではない、母や妻のことを悲まぬではない。此の身がかうして死ななければならぬかと嘆かぬではない。けれど悲嘆や、追憶や、空想や、そんなものは何うでも好い。疼痛、疼痛、その絶大な力と戦はねばならぬ。

潮のやうに押寄せる。暴風のやうに荒れわたる。脚を固い板の上に立て、倒して、體を右に左に跳もいだ。『苦しい……』と思はず叫んだ。

けれど實際はまたさう苦しいとは感じて居なかつた。苦しいには違ひないが、更に大きな苦痛に耐へ

なければならぬと思ふ努力が少くとも其の苦痛を軽くした。一種の力は波のやうに全身に漲つた。

死ぬのは悲しいといふ念よりもこの苦痛に打克たうといふ念の方が強烈であつた。一方には極めて消極的な涙脆い意氣地ない絶望が漲ると共に、一方には人間の生存に對する權利といふやうな積極的の力が強く横はつた。

疼痛は波のやうに押寄せては引き、引いては押寄せる。押寄せる度に唇を噛み、齒をくひしばり、脚を両手でつかんだ。

五官の他にある別種の官能の力が加はつたかと思つた。暗かつた室がそれとはつきり見える。暗色の壁に添うて高い卓が置いてある。上に白いのは確かに紙だ。硝子窓の半分が破れて居て、星がきらきらと大空をきらめいて居るのが認められた。右の一隅には、何かごとく置かれてあつた。

時間の経つて行くのなどはもうかれには解らなくなつた。軍醫が來て呉れ、ば好いと思つたが、それを續けて考へる暇はなかつた。新しい苦痛が増した。

床近く蟋蟀が鳴いて居た。苦痛に悶えながら、『あ、蟋蟀が鳴いて居る……』とかれは思つた。其の哀切な蟲の調が何だか全身に沁み入るやうに覺えた。

疼痛、疼痛、かれは更に輾轉反側した。

『苦しい！ 苦しい！ 苦しい！』

續けざまにけたましく叫んだ。

『苦しい、誰か……誰か居らんか。』

と暫くしてまた叫んだ。

強烈なる生存の力ももう餘程衰へて了つた。意識的に救助を求めると言ふよりは、今は殆ど夢中である。自然力に襲はれた木の葉のそよぎ、浪の叫び、人間の悲鳴！

『苦しい！ 苦しい！』

其の聲がしんとした室に凄じく漂ひ渡る。此室には一月前まで露國の鐵道援護の士官が起臥して居た。日本兵が始めて入つた時、壁には黒く煤けた基督の像が懸けてあつた。昨年冬は、滿洲の野に降頻る風雪をこの硝子窓から眺めて、其の士官はウォッカを飲んだ。毛皮の防寒服を着て、戸外に兵士が立つて居た。日本兵の爲すに足らざるを言つて、虹のごとき氣焔を吐いた。其の室に、今、垂死の兵士の叫喚が響き渡る。

『苦しい、苦しい、苦しい！』

寂として居る。蟋蟀は同じやさしいさびしい調子で鳴いて居る。滿洲の廣漠たる野には、遅い月が昇つたと見えて、あたりが明るくなつて、硝子窓の外は既に其の光を受けて居た。

叫喚、悲鳴、絶望、渠は室の中をのたうち廻つた。軍服の釦鈕ボタネは外れ、胸の邊は搔むしられ、軍帽は領紐カネをかけたまゝ、押潰され、顔から頬に懸けては、嘔吐した汚物が一面に附着した。

突然明らかな光線が室に射したと思ふと、扉の處に、西洋蠟燭を持つた一人の男の姿が浮彫のやうに顯はれた。其の顔だ。肥つた口髭のある酒保の顔だ。けれども其の顔には莞爾したさつきの愛嬌は無く、眞面目な蒼い暗い色が上つて居た。黙つて室の中に入つて來たが、其處に唸つて轉がつて居る病兵を蠟燭で照らした。病兵の顔は蒼褪めて、死人のやうに見えた。嘔吐した汚物が其處に散らばつて居た。

『何うした？ 病氣か？』

『あゝ、苦しい、苦しい……』

と烈しく叫んで輾轉した。

酒保の男は手を附け兼ねてしばし立つて見て居たが、其の儘、蠟燭の蠟を垂らして、卓テーブルの上にそれを立て、そゝくさと扉の外へ出て行つた。蠟燭の光で室は晝のやうに明るくなつた。隅に置いた自分の背囊と銃とがかれの眼に入つた。

蠟燭の火がちり／＼する。蠟が涙のやうにだら／＼流れる。

暫くして先の酒保の男は一人の兵士を伴つて入つて來た。この向うの家屋に寢て居た行軍中の兵士を起して來たのだ。兵士は病兵の顔と四方のさまとを見廻したが、今度は肩章を仔細に檢した。

二人の對話が明かに病兵の耳に入る。

『十八聯隊の兵だナ。』

『左様ですか。』

『いつから此處に來てるんだ？』

『少しも知らんかつたです。いつから來たんですか。私は十時頃ぐつすり寢込んだんですが、ふと目を覺ますと、唸聲がする。苦しい苦しいといふ聲がする。何うしたんだらう、奥には誰も居ぬ筈だと思つて、不審にして暫く聞いて居たです。すると、其の叫聲は愈々高くなりますし、誰か來て呉れ！と言ふ聲が聞えますから、來て見たんです。脚氣ですナ。脚氣衝心ですナ。』

『衝心？』

『とても助からんですナ。』

『それア、氣の毒だ。兵站部に軍醫が居るだらう？』

『居ますがナ……こんな遅く、來て呉れやしませんよ。』

『何時だ。』

自から時計を出して見て、『道理だ』といふ顔をして、そのまゝポケットに收めた。

『何時です？』

『二時十五分。』

二人は黙つて立つて居る。

苦痛が又押寄せて來た。唸聲、叫聲が堪へ難い悲鳴に續く。

『氣の毒だナ。』

『本當に可哀相です。何處の者でせう。』

兵士がかれの隠袋ポケットを探つた。軍隊手帖を引出すのが解る。かれの眼には其の兵士の黒く逞しい顔と軍隊手帖を読む爲に卓上の蠟燭に近く歩み寄つたさまが映つた。三河國渥美郡福江村加藤平作……と讀む聲が續いて聞えた。故郷のさまが今一度其の眼前に浮ぶ。母の顔、妻の顔、櫛で圍んだ大きな家屋、裏から續いた滑かな磯、碧い海、馴染の漁夫の顔……。

二人は黙つて立つて居る。其の顔は蒼く暗い。をり／＼其の身に對する同情の言葉が交される。彼は既に死を明かに自覺して居た。けれどそれが別段苦しくも悲しくも感じない。二人の問題にして居るのはかれ自身のことではなくて、他に物體があるやうに思はれる。唯、此の苦痛、堪へ難い此の苦痛から脱れ度いと思つた。

蠟燭がちら／＼する。蟋蟀が同じくさびしく鳴いて居る。

黎明に兵站部の軍醫が來た。けれど其の一時間前に、渠は既に死んで居た。一番の汽車が開路々々の懸聲と共に、鞍山站に向つて發車した頃は、その残月が薄く白けて淋しく空に懸つて居た。

暫くして砲聲が盛に聞え出した。九月一日の遼陽攻撃は始まつた。

土手の家

茅葺、瓦葺、トタン屋根の不揃な疎らな田舎町の家並の角に、際立つて大きな二階屋が一軒あつたが、これは此町に遊廓があつた頃、屈指な貸座敷であつたといふことであつた。今は土地での唯一の旅店兼業の料理店で、夜は裏座敷に三味線の音が絶えたことがなく、酌婦のだらしなく騒ぐ聲は、いつも暗く淋しい街道をひとところ賑かにした。

行田から館林に通ずる街道、利根川の長い舟橋をとろに渡ると、橋畔の渡小屋、カンテラの煤けた光、爺の禿頭、暗い土手の上から見ると、坂東太郎の溶々たる流は處々黒く光つて、半里ほど下流の渡場の燈火がほつちり一箇見えるばかり、晝間往來した船の氣勢も無く、街道には日が暮れてから客を一人乗せた馬車が一臺通つて、機廻りの荷車が二臺通つて、あとはさびしい闇。其土手の闇を破つて明るく見えるのが此料理店の勝手である。晝ならば、中庭に松樹の緑、檜の垣、疎らな柴垣の外に車井戸があつて、婢が野菜を洗ひながら、ねんねこて子を^{おぶ}負つた子守女と話をして居るのを見得るであらう。いや、土地の馴染客が自轉車などで通らうものなら、其庭越し垣越しに、けたましい呼び聲を女から懸けら

るゝに相違ない。

酌婦共はその中庭の前の六疊に集つて居るのだ。今居るのは三人、一人は髪かみの毬たまごれた、耳の遠い色の生白いお花といふ女、一人は肥つた脊の低い胸の出たお鐵といふ女、一人は一番年の若い此家での呼物のお貞といふ女、それに内藝妓が一人此間から殖えて、用事さへないと、三味線の復習おぼろひ、鼓の復習、それも難かしい高尙なのではなく、俗に入り易いサノサ節、喇叭節、倦きると、だらしない色男の話、着物の話、食物の話。

此室から店に行く處は、欄干のついた、折曲つた廊下で、其奥に^{便所}がある。廊下の前には、昔泉水でもあつたらしい跡が残つて居て、その^{くぼみ}凹所には、木綿糸や、鼻紙や、毛の丸めたのがだらしなく捨てられてあつて、いかにも汚い。貸座敷であつた頃の一種の厭な臭が何處となく人に迫る。奥の座敷の間の切り方を見ても、其頃のさまがすぐ思はれる。此土地が榮えて居た頃には、此家など特に立派であつたさうだが、今日のやうに衰へて了つては——古びて了つては、一層其腐くさつた臭ひが強くなつて、何となく胸の悪いやうな感がする。家も、室も、其處に住む人々も何だか腐つた氣の中にあるやうにしか思へなかつた。

實際一種の臭が此家に充ちて居た。

旅客は暗い闇の道から、その家の大和障子を明けると、そこに、帳場に、五分心の洋燈を釣つた下に顔の長い、色の白い、脊のすらりとした三十五六の女が長い煙管を立て、居るのを見るであらう。これは此家の女主人で、男あるじは居ない。でも、子供が三人、總領が九歳の男の兒、次が七歳の女の兒、其次が三歳の女の兒、それに今六月といふ腹をして居る。總領は前の亭主の胤で、その亭主と謂ふのは一年ほど居て出て行つて了つた。町では誰も知らぬ者はない。此女主人は此貸座敷の本家の娘で、此母親の情夫に十六の時から通じて居た。で、亭主を早く失つた母親と此娘との衝突は甚しかった。親子芋刺は田舎でも餘り多くはない。で、娘の十九の時貰つた婿は五日居て吃驚して逃げて了ひ、二十四の時、其事を承知で養子に來た男も、懷妊すると間もなく出て行つて了つた。其時出來た兒も其亭主の子であるか、情夫の子であるか、よく解らなかつた。で、いつそ情夫を家に入れたらといふ説も度々起つたが、いつも母親が泣いたり叫んだりするので破れた。母親にもその情夫に出來た女の子が二人あつて、今歳十八と十六になる。

母親は少なからぬ財産を持つて居るので、その二人の娘と此町に住んで居た。五十五で今も達者で居る。今でも其情夫は母親と此の女主人と同じやうな關係をつけて居るのだ。

情夫と謂ふのは、今年四十五六で此の近郷の者であつた。此町に遊廓が榮えた頃よく遊びに來たので、深間に陥つた女郎も少くなかつたといふ。色の白い、丈の高い、男らしい男で、土地でもこの不始末を除いては多少の信用も持つて居るし、勢力にもなつて居る。種々の事業にも手を出して、相當な財産をも作つた。今では、東京に出て、支那學生の大規模の寄宿舎を引受けて、立派に暮らして居る。東京の宅にも妻ともつかず妾ともつかぬものがあるさうだ。そして一月に一度は必ず此町に來て、母親の本家とこの女主人の料理店とに一晩づゝ泊つて行く。

一三年前までは、泊つて居ることが知れると、母親が夜中でも遣つて來て、唵鳴つたり叫喚いたり泣いたりして、果ては娘の髪を切るの何のと大騒ぎを遣つたものだが、此頃はあきらめてか、そんなことも無いとの話。

それに、母親がその情夫に生ませた娘も、かういふ家庭に育つてかういふ空氣を吸つて居るので、二人とももう情夫が出來て、姉のは村の収入役、妹のは村役場の書記、此家の抱藝妓がこの正月にある料理店に聘ばれて行くと、その姉妹がその男達と平氣で戯れて居たといふので、商賣人も跣足ですなと言つて呆れて居た。

『けふはお上さん、これね。』

と言つて、酌婦の一人が髪を結ふ眞似をした。

『やうきさ、當り前サ。旦那が來るんですもの。』

『誰に見しよとて、紅かねつけて——といふことがあるぢやないかね……。ちつとも可笑しくありやしない。』

ともう一人の女がわざと眞面目で上つ調子に言つた。

『あれでも嬉しいんだね、屹度。旦那の来る日は機嫌が違ふもの。』

『そりやアさうさ、お前さんだつて左様でせう。これの（と親指を出して見せて）来る時は、顔色つたらありやしない。』

『本當よ。お貞さん、お奢んなさいよ。今日は屹度来てよ。』

とお鐵が傍から口を挿んだ。

『駄目よ。』

『何うして？』

お貞は黙つて居た。

『けれどもね、お鐵さん、』とお花は言葉を續いで、『あの年になつても同じかね、ふだんはあんなに無精にして置く癖に、來るとなると、べにをさして、白粉をあんなにつけてさ……。よく氣恥かしくないね。』

『矢張、嫌はれると大變だと思ふんでせう……。大切の人だから。』

『それは左様ね、母さんとさへそれ程競争したつて言ふんだから。』

『可笑しくなるよ。』

とお鐵は笑つたが、傍に三歳の兒の泣くのを負つて、ぼんやり立つて居る子守のお源といふのに向つて、

『源ちゃん、よく泣く子ね。』

『本當にこの餓鬼ツたら、困つちまふ。おつかあく／＼つてすぐ泣出すんだもの。』

『今夜も土手の家に留守番に行くのかえ。』

『何アに行かねえでも好いだがね——。』

『淋しいだらう、彼處は？』

『あゝ。』

『源ちゃんも情夫でも拵へれば好いんだ。』

『厭なこつた。』と少し顔を赧くして、舌をべろりと出して、『男なんか厭なこつた。此間も來やがつたから擲つて遣つた。』

『何日？』

『三日ばかり前さ。そら、一階に泊つた奴、壯士見たやうな、本を澤山持つて賣りに歩いて居る——。』

『あゝ、あれ、あれが何うしたの？』

『あの晩、この子をお上さんに渡して、寝たのは十時頃さ。まだ奥に貞ちゃんのお客が居たアね。ぐつすり寝て、ふと目があくと、もう皆な寝ちやつた様子だから、寢反りを打つて、又寢ようとする誰か梯子をトン／＼と下りて来た。手水場に行くんだんべいと思つてると、ぼつたり足音が止る。己ア前にもさういふ眼に逢つて知つてゐるで、来たナと思つたのよ。と、その通り、こつそり遣つて来るぢやねえかね。小面憎くなつたから、黙つて、寝た振をして、傍へ来た處を、木枕でうんといふほど擲つてやつた。』

『まア……。』

と女共は皆笑つた。

『と……ね……可笑しいぢやねえか、頭をかゝへて、すこし其處にぐづくして居やがつたつけが、すさすごと這つて歸つて行きやがつた。次の朝、發つ時に家の前でちつと見詰めて遣つたら變な顔をしてやがつた。馬鹿な野郎さ。』

『源ちゃん、本當に氣が強いね……。それよりも情人の一人も拵へる方が好いぢやないかね。』

『厭なこつた。』と投げるやうに言つて向うへ行つた。

この子守は女主人の従妹の子で、秩父の大宮で生れたのだが、家が貧乏なので、十四の時から此家に

來て世話になつて居た。肥つて色は白いが、全くの田舎娘で、朝、子供を叱ふと、終日其音を離さぬ。鎮守の社、土手の上の日あたり、理髮床の店などがその遊場で、二年前までは汚れた手拭を額に幅廣に巻いて、團栗を拾つたりお手玉を取つたり土手の枯草に火をつけたりして遊んで居たが、昨年あたりから少し態度が變つて、簪も挿し紅も點け髪も結ふやうになつた。此頃では理髮床の店に行つて居ることが多い。

お源は酌婦共の集つて居る室から、庭を抜けて戶外へ出た。冬の午前の霜解で路が悪い。軒には雀がぺちやく／＼と百囀を遣つて居る。いつもの理髮床に行かうと思つたが、ふとあることを思ひ出して土手に登つた。土手の上は淺間おろしが寒く吹いて、秩父連山の雪が美しく日に光る。川はところ／＼に洲をあらはして、其洲は濃い鼠色に、水は鑄鐵納戸の色に流れて居る。長い長い舟橋の上を車の通る音かとゞろに響き渡つた。

『厭なこつた。』と言つたことを思出して、べろりとひとりて舌を出した。舌を出すのは此女の癖である。

『まだ知らねえて居やがる、ざまを見やがれ！』

ふと月經のとまつて居ることを思出した。懷妊であるかないか經驗がないからそれは解らぬが、兎に角月經は先月から無い。構ふもんか止つたらとまつたて何うにもなれ！ と續いて思つた。今の場合それ

よりもその男に逢ひたいといふのがその願ひである。お源は土手際の暖い枯草に身を埋めて、日に光る川を見ながら、茫然と下流を望んだ。其船の繫つて居た川端の楊樹、其樹の下には漣が寒く寄せて居て、枯薄の叢がざわ／＼と河風に靡く。氣候こそ違へ、其時のさまと總て同じである。生洲船、河楊、舟に仕懸けた水車、運送店の瓦屋根、少しも違はぬ。其時は土手の上で二語三語冗談を言ひ合つた。兼ねて泊りに来てよく知つて居た。關宿の舟宿の息子で、年二十三、上流の赤岩に肥料を積んで來るので、一月に二度位は缺さず見る顔であつた。黒いしやくれた顔で、別に好いたらしいとも思はなかつた。その日は六月の蒸暑い晩、お上さんに叱られて、むしやくしやくして、いつそのこと遁げて秩父に歸らうかと思つて居た。旦那が今夜お上さんの處に泊るので、酌婦の情夫が表座敷に飲んで騒いで居るのを裏座敷の二階に移した。旦那は表座敷で絹布の蒲團を重ねて寝るのだ。お源は今、その時のことを明かに頭に浮べた。その若い船頭が冗談半分にお源の袂を引張つて岸に繫つた舟の中に連れて行かうとする。お源は其時は不思議にも「此野郎」とも、「いけ好かぬ奴」とも思はなかつた。引張られ、押され、きやつ／＼と騒ぎながら、落ちるやうにして、船の中に無理に伴れられて入つた。爺も陸で飲んで居ると見えて、船の中には誰も居ない。暗い六疊位の間、低い神棚に舟玉神が祭つてあつて、傍に木綿布の巻いたのが夕闇に薄白く見えて居た。春の子が喧しく泣くのを、船頭が菓子遣つてなだめて賺した……。

お源は此處まで思つて、獨りて厭な薄笑をした。變な氣になつて枯草から身を起した。そして菜の青い

畑道を静かにたどつて、其河の岸の楊樹の傍に行つた。此の楊樹の向うに、一軒の二階屋が、雨戸を開めたまゝ、空屋になつて、暖かい冬の日に照されて居る。此二階屋は、此町のもので横濱の貿易商をして居る人の別荘だが、一階は一間、下は二間のちよつと凝つた家作である。建てた二三年は、夏になると必ず其家族が避暑に來るのが例であつたが、いくら故郷でもこんな田舎では萬事につけて不便なので、三年目に平塚に別荘を買つてからは、主人も細君も更に遣つて來ない。家財道具蒲團夜具まで一切整つて藏つてあるのだが、これを遠い親類つゞきの土手下の料理店に監督を頼んだまゝ、幾年か過ぎた。秋、水の出る度に、床の上まで浸るのを始末するのが厄介だと女主人は絶えずこぼして居るが、しかもお客の望みで、一月二月と貸して遣つたり、春先時候の好い時に、鮎子狩の大連の宴會を此樓上に開いたことなどもあつた。平生は家の男の子かお源が行つて留守番をして遣ることになつて居る。お源は今寒い河風を避けて、その二階屋の南向きの庭のところに来た。庭には萩や山吹の枯枝が寒さうに立つて居て、厠の傍に糸檜と珊瑚樹とが青く繁つて居る。一隅には水仙が暖い日を受けて、早くも黄ろい花の芽を出して居た。

お源は戸を一枚繰つて、縁側に腰を懸けた。子供が眼を覺して泣出したので、一しきり子守唄を唄つたが、もう眼を大きく明いて了つた。子供を賺しながらも、お源の胸には種々のことが往來した。其時からの二人の關係、この二階屋の下の六疊を傭曳の室としての快樂、二分心の暗い洋燈、汚い汗と油と

に塗れた蒲團のほひ——ほかくと暖かい冬の日に催されて、お源は今男戀しい情に燃えた。しばし経つた。

ふと見ると、前の楊樹がそよいで、岸の蘆荻のうら枯の間から、船の舳先が一尺ほどあらはれて、水馴竿の先から水球が日に光るのがちらと見えた。お源は歡喜の聲を擧げた。船には戀しい若い船頭！

その夜、土手下の料理店は殊に賑かであつた。三味線の音が彼方此方に起つて、宵の内から喧しいドンチャン騒ぎ、臺所の忙しさは非常なもので、鉤に吊した仙臺箱も大方皆無になつて了つた。銅壺の徳利は羽翼が生えて飛ぶやうで、座敷では三味線と鼓とが自棄に鳴つた。でお源も遅くまでいろ／＼と手傳つた。お貞の情夫が一組、お鐵の情夫が一組、それに足利の機場の旦那で、抱藝妓に思召があるといふのが金びらを切つての大酒宴、これが十時になつても中々止みさうにもない。女主人の旦那は九時頃から帳場に来て、酒を飲みながら、にや／＼といやに艶めかしい話をして居た。女主人は衣服を着更へて髪を美しく結つて、夜目にもそれと解るほど白粉をつけて、何うしても卅五とは思へぬ若さ！ 十時が鳴ると、奥の騒ぎに頓着なく、跡始末を料理番の女中に頼んで、一階の表座敷にトン／＼と登つて行つて了つた。

十一時になると、流石にあたりがしんとした。酔へるものは酔ひ、欲するものはその欲するものを得て

満足した。料理場では猶一時間ほど混雑して居たが、これもやがて静かになつた。此時表口の戸をそつと明けて、そつと閉めてそのまゝ街道に出た黒い姿があつたが、一三步家を離れると、すぐ駈け出して道も無い土手を一目散に上つた。闇を透して見ると、それは子守のお源で、その姿は土手からすぐ向うに下りて、河端の二階の空屋に入つて了つた。誰もこれを知るものはなかつた。田舎の街道を風がたゞ吹暴れた。

ネギ一束

お作が故郷を出て此地に来てから、もう一年になる。故郷には親が居るではない、家があるではない、力になる親類とでもない、村はづれの土手下の一軒家、壁は落ち、屋根は漏り、畳は半腐れかけて、茶の間の一間は藁が敷詰めてある。この一軒家の主が、お作の爲めには、天にも地にも唯一人の親身の叔父で、お作は此處で娘になつた。

ぼろ／＼の襤褸を着て、青い鼻涙を垂らして、結ふ油も無い額髪を手拭で廣く巻いて、叔父の子を背負ひながら、村の鎮守で終日田舎唄を唄ふ頃は無邪氣であつた。筋の多いふかし芋、麥飯の結塊、腹の減いた時には、富家の子を騙して、錢を盗み出させて、二十錢の銅貨に駄菓子や山ほど買つて食つた。根性が悪いと謂つては、村の家々に憎まれ、若い衆に打たれ、菓物を盗んだと謂つては、追懸けて捉へられて、路傍の門に細引でく、り付けられ、或は長い物干竿で、走る背を撲れて、路上に倒れて膝頭を石に二寸ほど切つて泣いたことなどもあつた。白壁の土藏、檜の刈込んだ垣、冠木門、物心がついてから心から憎いと思つたのは、村の物持で、何うして此身ばかりかう賤く、かう憎まれ、かう侮られ、か

う打たれるのかと思つた。それに、叔父にも好く打たれた。言ふことを聞かぬとか、物をよく食ふとか、假寝をするとか、何ぞと言つては、どやしつけられるのがつらさに、ある時などは、村の路に通懸つた旅商人らしい男に縋つて、何處へでも好い、どんな難儀をしても好いから一所に連れて行つて呉れと頼んだ。村から西に一里ほど、水の少い石川があつて、其向うに楊樹の繁茂、路のほとりに一箇の石地藏、それをお作はいつでも思ひ出した。追蒐けて頼んでも縋つても、旅客は知らぬ顔をしてずん／＼と先に行く。初夏の日影は美しく光つて、麥の縁が静かな午後の微風に揺いて居る。その石川の楊樹の處に來て旅商人はふと立留つた。瘦せた、顔の青い、髪の延びた男であつた。脊には風呂敷包、紺の脚絆も長旅の塵埃に塗れて、いかにも疲れ果てたといふ風であつたが——立留つて、後を追懸けて來た田舎娘を待つた。伴れて行つて遣るから、何でも言ふことを聞かぬといふ。お作は喜んだ。

其の楊樹の繁みをお作はいつも思出す。まだ何事をも知らぬ小娘、長旅の疲勞に伴つて起つた男の烈しい欲望、彩色を施した横綴の繪——二十分の後、旅客の大跨で走つて遁げて行くのをお作は泣きながら追つた。けれど女の足で何うしてこれに追付くことが出来よう。欺かれたと知つて、忿怒が忽ち心頭を衝いて起つた。お作は小石を拾つて後から投げた。一つが旅商人の背中に當つた。と、振返つたその顔、それが今でも歴然と眼に見える。

其時が十四歳、それから十九歳の昨年まで、お作はその呪ふべき故郷を去ることが出来なかつたのだ。叔父夫婦の虐待、終日の勞働、夏のじりくくと眼も眩む日に雇はれて、十二時間の田草取、麥の收穫の忙しい時には殆ど晝飯を食ふ暇も無い。それに養蠶の手傳、雨の日の桑つみ、荷車の跡押、勞働といふ勞働は爲ぬものとはなかつた。またある時は、機の工場に雇はれて、一日に一反半の高機織、鼻唄を唄ふ元氣さへなくなつた。梭をしめる腕は、自分のか他人のかわからぬ位につかれ果てることもあつた。若いといふのは人間の幸福、いくら烈しく働いても、夜は楽しい機織室の戸を、ことごとくと叩く音がして、闇に白い頬かぶりの男の立姿、お作の朋輩にはかういふ羨ましい群が澤山あつたけれど、お作は此の若いといふ幸福をも充分には受け得られぬ不幸の身であつた。かの女は額の大きい、鼻の丸い、ちぢれ毛の、鐵色した醜い女であつた。

しかし十九歳で故郷を去つたお作には相手があつた。この界限でも有名な祭文讀、博奕が好きで、女が好きで、ことに聲が好いので評判であつた。生れは西のものださうだが、一年ほど前から此地に来て、或は鎮守の祭、村の若者の集合する處などに呼ばれて、錆びた太い調子づいた聲に、多くの無智の男女をあくがれしめたが、突然お作はこれと出来合つて、こんなところはつまらぬ、人の出盛る温泉場に行けばもつと面白いことがあると、誘ふも誘はるゝも、行水の思ひのまゝなる二人連、こんな故郷は何うでも好いと、お作は闇に任馴れた地を離れた。

西に百里の温泉場に来て二人は暮した。樂しかつたのは、ほんの束の間、いや、旅に出るより早く二人は既に——争ひを始めた。野に生れて、野に生立つて、そして野に食物をあさる群の必ず定つて得る運命——その悲しいつらい運命にお作も邂逅した。

捨てられてお作は泣いた。續いて、十四の時、知らぬ旅客の脊中に石を投付けたと同じやうな忿怒を烈しく心頭に起した。けれど泣いたり、怒つたりしたゞけては其終を告げることはもう出来なかつた。お作は其時懷妊して七月目であつた。

七月より臨月までの苦痛、勞働の出来る間は種類を選らばず勞働して、刻々に迫り来る飢餓と戦つた。新道の道普請に、砂利車の後押をして、熱い／＼日の下に働いて居たが、ふと烈しい眩惑を感じて地に倒れ、援けられて自分の小屋に送り込まれてからは、いかな丈夫な身體も何うすることも出来ず、憐みの眼と情の手に、乞食に均しい月日を送つた。

蟾蛤のやうな大きい腹を抱へて、顔は青く心は暗く、初産の恐怖は絶えず胸を痛めて、何がなし一刻も早く身二つになれかしと祈つた。腹の中の子の動くのを覺ゆる時には、これさへ産れたなら……と常に思つた。さうしたならまた勞働して自分だけのことを爲よう。そして無情の男を捜し出して恨を晴して遣らうと思つた。時にはまた其男のことを考へて、何うかしてもう一度一緒に暮し度い。可愛い子が生れて、それを見せて遣つたなら、男も屹度折れて、やさしくなるに違ひないと思つた。お作はまだ男

を戀うて居た。

子は産れた。

産れぬ前と生れた後との事情が丸で變つた。身二つになりさへすれば好いと思つたが、それは誤りであつたことがすぐ解つた。幼いながらも人間の絶えざる要求、乳を求めて日夜に泣く赤兒の聲、抑ゆることの出来ぬ強い烈しい母親の愛情、お作は離るべからざる強い羈絆の更に身にまつはるを新たに覺えた。

過勞と營養不良とで、乳が十日目頃からはつたり留つた。赤兒は火の附いたやうに間斷なしに泣く。それを聞くと、母親といふものは總身の血が戰へるほどに苦しく思つた。で、お作も其身の食物を求め、るよりも先づ赤兒の乳を尋ね廻つた。乳酪を買ふ錢が無いので、隙をつぶして、彼方此方と情深い人の惠を求め歩いた。で、晝は先づ何うやら斯うやら過して行くが、夜が實につらい。出ぬ乳を宛がつて、疊の足に引懸る一間の中を彼方此方と動物園の虎のやうにして揺つて歩くが、何うしても泣きやまぬ時などは、いつそ放り出して了はうかと思ふ程だ。

産褥を早く離れた結果と、營養の不足と、精神の過勞とで、今までつひぞ病んだことのないお作も、烈しい頭痛と眩惑とを感じて、路を歩いてもをり／＼倒れさうになることがある。ある日などは、止むなく終日を一室に倒れて居たことなどもあつた。だから、勞働して食を得ようなど、は思ひも寄らぬ。

飢餓と病と心勞と——お作は愈々苦境に陥つた。

一月ほど経つたある日の午後であつた。

お作は起上つた——室は暗く汚い。一隅に小さい葛籠、其傍に近所の人の情で拵へた蒲團に赤兒が繼はぎの着物を着て寝て居て、其向うに一箇の圍爐裏、黒い竹の自在鍵に黒猫のやうになつた土瓶が懸つて居て、傍に粥を炊く土鍋が置かれてあるが、幾日にもそれを炊いた跡が見えない。木の燃えさしがだらしなく轉つて居て、疊の黒く焦げたのが際立つて眼に着く。これは祭文讀とお作と喧嘩した時、過まつて取落して燃えたのであつた。戶外は秋の灰色に曇つた日、山の温泉場はやゝ閑で、此の小屋の前から見ると、低くなつた凹地に二階三階の家屋が連つて、大湯から絶えず立颯る湯の烟は靜かに白く靡いて居た。

溪流の瀬の鳴る音が遠くて聞える。

お作は立ちあがつた。二日以来飯を碌々食はぬので、足が妙にふらつく。かう腹が減つては爲方が無い。何でも好いから食へるものを少し捜して來ようと思つたのである。と、同時に赤兒が聲を擧げて泣き出した。で、お作はふらつく脚を踏占めながら、先づ抱き上げて、出ぬ乳を吸はせたが、容易に泣き止まうともせぬので、今度は黒砂糖を水に溶して、吸口を宛がつて見た。で、何うやら彼うやら泣き止んだので、それを古い帯で背にくゝりつけて、其儘戶外に出た。

灰色の雲は低く垂れて、何となく頭を壓へられるやうな空模様であつた。お作の小屋は温泉場の裏の斜坂の中央に當つて居るので、下には先づ疎に茅葺屋根、大根の青い畑が連つて、其下に温泉場、二階三階、大湯から出る湯の畑、上を仰ぐと、同じ畠の斜坂の爪先上りになつて居る間に一條の路がうねうねと通つて、其向うは畑るやうな檜林の灰色が連続した。

高い山には炭焼の畑が見える。

お作は家を出てその畠道を歩いた。つらいその身の境遇や、悲しい追懐よりも、ひもじいといふ念が第一にその胸に押寄せて来て、何か畠に食ふものはないかとあたりを見廻した。牛蒡畑、大根畑が一面に連り渡つて居たが、不圖、五六間先の葱の白い根を上げた畑が眼に入つた。

われを忘れて、畑の中に入つて、殆ど人の物を盗むなど、いふ念も起らぬ中に、忽ち一束の葱を取つて、それを揃へて、もとの畠の道に出た。其時、同じ畠道を、一人の男——兼ねて見知つて居る温泉宿の年寄の番頭が此方に歩いて来た。

葱を一束抱へてお作の立つて居るのを、ふと眼につけて、

『葱かね！』

と言つて笑つて通り過ぎた。

お作はぎよつとして我に返つた。自己の罪跡を見附けられたと思つて、身が地にすくむやうな氣が爲

た。烈しい飢餓をも忘れて、茫然として立つて居た。見ると、其年寄の番頭は一步々々其の細い爪先上の道を靜かに靜かに歩いて行く。黒い縞のどてらが、青い畑と灰色の森との間をてくくと動く。ふと林に入らうとする畠から、鋤を荷つた一人の百姓が出て来て、段々と此方へ下りて来たが、前の番頭に出逢ふと、二人は立留つて何事かを語つた。いや、番頭の白い顔がちらと此方を振返つたのが見えたと。てつきりその身の罪を告げて居る！とお作は思つた。お作は顔を蒼青にしてぶるくと戦へた。

一時間後に一事件が起つた。裏の山の林で、嬰兒殺しがあつたといふ噂が温泉場に知れ渡つた。見て来た男に聞けば、林でおいゝ泣聲が聞えるから行つて見ると、それは小屋の祭文讀の唄で、自分で緊め殺した赤兒を抱いて聲を擧げて泣いて居たさうな。それから自分も死ぬつもりでもあつたのか、傍の樹には細帯が長く吊してあつたとの語であつた。で、駐在所の巡査が二人まで劍をちやつかせながら驅けて行く。村の世話役の男が呼吸を切つて飛んで行く。そのあとから村の若者、子供、女、赤い蹴出しやら、大綱の絆纏やら、時計の鎖を絡ませた縮緬のへこ帯やら、赤鼻緒の黒塗下駄やら、ぞろぞろとその細い畠道には、人が續いて、其向うの林の中に巡査の制服が見え、をりくけたましく泣く女の聲がきこえた。灰色の佗しい空が低く垂れた。

兄

死んだ兄のことを考へた。

青山の共葬墓地、三坪の狭い要垣の中に、祖父母も居る。母も居る。兄の子も居る。楓の樹も大きくなつた。椿の樹も繁茂した。

兄の柩を此處まで送つて來た親戚朋友は、要垣の外に羽織袴で並んで黙して立つて居る。人夫は細引で棺を穴の中に下した。棺の土に觸れる音が微かに聞える。

棺の中には、櫛の古葉を入れた無数の紙袋が死屍を埋めて、其處にあの蒼い瘦せこけた顔、いなごのやうに細くなつた腕、穩かに閉ぢた眼があるのだ。これが僕の兄の最後だ。もう此世の中に僕の兄は無いのだ。あの海綿のやうな柔しい弱い心は消えて了つた。

人夫は平氣で土を埋めた。棺の上に土塊の落ちる音がけたましく聞える。と共に僕は土塊の大きなのを拾つて投げ入れた。見る見る穴は埋められて、白い布を卷いた墓標が其處に立てられる。生花一對、菊の花が頭上の紅葉と共に夕日に照つた。

新しい花立、櫛、線香の烟、喪主を始めとして、人々が順次に榊の水を手向け終つた。もうこれでお終ひだ。ザツツオウルだ。

ザツツオウル！ 何と好い言葉だらう。何んな悲哀でも、何んな煩悶でも、何んな苦痛でも、何んな苦しい生活でもザツツオウル！

病院の三等室、暗い陰氣な六疊の一間、熱の容易に去らぬのに苛々して、兄は寢床の上に輾轉反側した。傍に、看護に勞れたる細君、看護婦、親戚の娘、三時間毎に胸部に當てる爲に氷塊を錐で細かく砕く。其音が神経を昂進させて、何うせ熱が取れぬから、そんなものは附けなくつても好い、もう止めだ、薬も入らぬ、お粥も入らぬと言つて焦れた。驗温器などは見るのも厭だと謂つて疊に投げ出すやうにして右の手を出す。看護するものは殆ど始末に困つた。

電話が懸つて來たので、急いで僕が行くと、いきなり僕の手を握つて、おい／＼と泣く。瘦せ果てた顔が灰色に曇つて、眼からほろ／＼涙が落ちる。僕の手を更に更に堅く握り占めて、

『これが最後の握手ぢやないぞ……。』

と言つて泣く。最後の握手ぢやないといふ此の言葉の蔭には、悲しい恐ろしい最後の握手が隠れて居たのだ。

死の恐怖、一刻毎に迫つて來る死の恐怖——それも終を告げて棺になつた、墓になつた。

墓——

病人は熱にうかされて、よく『新しい家』といふことを言つた。大森の海岸近く、見晴しの好い處に新しい家屋を建て、置いた。何うも今迄の借屋住居では、不自由で勝手なことが出来んから、苦勞して金を貯めて、漸く新しい家屋を建てたといふ。

『もう大抵出来上つた筈だ。お前、鳥渡行つて見て來い。人にばかり任せて置くと、何んなことをするか解らんから。』

と、看護して居る細君に云ふ。

細君は例の熱の爲めの幻影と知つて居るので、唯點頭うなづいて居ると、

『こら、何故行かんのか。お前は己を信用せんのか。……お前の信用せんのは無理はない。お前には苦勞ばかりさせて居るからな。一度だつて物見遊山に件くだれて行つて遣つたことは無いから。』と、厭に笑つて、細君の顔を見て、『けれどもナ、今度は本當だ、大森にちゃんと立派な新しい家が出來てる。間数は七間、座敷から海は見えるし、植木も松と木犀と高野槇とを澤山に植ゑたよ。病氣が治つたら、あの借屋に歸らずに、すぐに新宅に行かう。心地が好いだらうナ。』と言つてうとくと眠る。

『あ、今、其新宅に行つた夢を見た。好い心地だつた。お前も行つて來い。己ももうかう溜つては、退院するのも直きだらうから……支度を爲て置かなくては……。』

死ぬ病人は何處かへ行くやうなことを屹度言ふものだ相だ。で、嫂はこれを非常に氣にして氣味悪るがつて居た。棺を家から送り出す時、嫂は、

『何故、私も其の新しい宅に連れて行つて下さらぬか。』と泣いて居た。僕は兄が平生借家生活の貧しい境遇にあつたことを思ひ出した。

墓——墓は實際『新しい家』だ。

病院の長い廊下に足音が響く。室毎に電氣は點いて居るが何となく陰氣で物凄。白い服を着た看護婦がをりくくけた、まじい音をして通る。重い肺病患者の咳嗽せきがいかにも苦しうに聞えた。晝間の賑かさと比べると丸で別の家のやうだ。看護婦共も重病患者附添の他は多くは衣服を着換へて、ハイカラ姿に早變りをして、五十の縁日や、寄席などに出懸けて行つて了ふのだ。兄の病室の前に行くと、嫂が立つて居た。

戸を明けようとする時、

『鳥渡待つて——』

兄

僕は手を留めた。

『今ね……。』と嫂は小聲で、『今、お貞さんが来て居ますの。』

お貞！ これは兄の先妻だ。まだ母親が生きて居る頃、家庭が揉めたので、飽きも飽かれもせぬのに離縁して了つたのだ。其時僕は一面兄の味方、一面母の味方であつたので、板挾になつて辛い境遇に居た。其中此先妻に男の子が出来た。これは好運！ これで家庭の紛紜も稍解釋することが出来ると思つた。此嫂は其時二十だつた。田舎から出た無邪氣な女で、物事に鈍い質であつた。突然悲運が来た。四月のある日の朝、一家は若い嫂のけた、ましい泣聲に暖い春の眠を驚かされた。若い嫂は乳房で其生兒を壓死せしめたのである。この原因は再び家庭を暗黒に陥らしめた。母親はそんな女は嫁にしては置けぬから一刻も早く出せと迫る。兄は愛情が覺めぬので斷乎たる處置に出ることが出来ぬ。ぐづくして居る中に、又すぐあとが出来たら大變だ！ と母親は氣を揉む。僕は其中に挾つて、一晚兄夫妻と母親とのことを考へた。そして兄に自分の意見を語つた。若い嫂が眼を泣腫して家を去つたのは其結果であつた。兄は嫂と相對して、其縁の薄かつたのを一夜泣いて語り明かしたさうだ。それから十年。兄は妹としてその先妻の世話をして遣つた。女は又女で某病院の看護婦となつて獨立して今日まで夫を持たぬのである。

其先妻が見舞に来て居て、室では低く語る聲が聞える。

廣い廊下を僕と嫂とは並んで歩いた。

『今日は何うです？』

『今日も餘り好い方ではありませんでした。何うしてあゝ熱が取れないのですかねえ……本當に困つて仕舞ひますの。』

『食物は？』

『矢張無理にお粥は食べますけれど。』

『間違つたことを言ひますか。』

『えゝえゝ、大森の家のことを始終言つて言るんですよ。あんなに言ふから、本當かと思ふ位ですの。』

『困つたね。』

黙つて歩いた。

『何時から來てるの。』

『お貞さん？ もう少し先程……。貴郎にはお話しませんでしたけれど、此間の夜も來ましてね、これで三度ですの。私はね、折角話をしようと思つて來たのだと粹をきかして、いつも立つて、傍には居ないやうにするのですけれどね、……何だか考へると馬鹿々々しくなつて、こんなに骨折つて、夜も碌々

兄

寝ないで看病して居たつてつまらない、うちでは、心底では矢張お貞さんを思つて居るんですからね。』

『そんなことは……。』

と、僕は笑つた。

『だつて、さうですもの、子供のあつたものは、情愛が違ふつて言ひますからね。』

今の嫂には子供は無かつた。

『そんなことは無い。』

『いゝえ、此間来た時も、後で、貴方お貞さんが来て呉れて好かつたでせうと言つたら、お貞などは本當に感心なもんだ。今ぢや病院でも指折りの看護婦になつたつて言ふぢやありませんか。私はぐつと思ひましたよ。私などよりお貞さんの方が氣が利いて居ますからねと餘程言つて遣らうと思ひましたのよ。』

『馬鹿な——。』

『今もね、こつそり見て居ると、二人で顔を押付るばかりにして夢中で話してるぢやありませんか。餘り話をする、後が疲れるからつて、餘程言つて遣らうかと思つて居たのですの。』

『馬鹿な——。嫂さんも氣が若いね。』

『だつて左様ぢやありませんか。……本當に寝る目も寝ずに看病して……。一寸言淀んで、一體、情の

厚い、優しい人ですからね。まだ、兄上様つてね、いやらしい手紙を寄越す女が二三人あるんですよ。』

僕は其女を皆な知つて居た。琴の師匠の娘で、今から十三四年前にラヴした女、友人の妹で殆ど妻にしようとした女、藝者で向うから非常に熱くなつて來た女——其他にもまだ一人や二人は居た。

兄は少くとも優しい弱い性質であつた。生活の路に横つて來る種々の困難も羈絆も、すべて所謂『美しい感情』で圓滿に切り抜けて來た。いかなる場合にも敵をつくるやうなことは無かつた。

つまり運命に従つた人だ。僕などの考では運命などといふそんな盲目的なものに屈從して仕方があるものかと思ふ。生死、要するにこれは自然力で、背景は總て空虚だ。同情も犠牲もあつたものぢやない。進めるだけ進む、活動されるだけ活動する、己を盡してそれでいけなければ一死あるのみだ。犬のやうに死にたい。動物の様に死にたいとは僕の意見だ。で、僕は兄の消極的なのを幾度となく諫めた。止むを得ずんば母にも抵抗せよ。極端なる個人主義たれ……と言つた。けれど兄にはそれは出來なかつた。美しい感情、弱い服従、憐れなる醜い生活——

死を宣告されて病院を出たのは、十月の下旬、病名は肺空洞、肺に大きな穴が明いて、膿に似た痰が絶えず出る。熱は依然として高い。駿河臺から牛込の山手まで、四人夫附の釣臺、後に老いた伯父と義兄と一人の門生と僕が附いた。稍曇つた日で、灰色の雲が薄く空を蔽つて居た。電車、馬車、荷馬車、

人力車の縦横に往來する街路を縫うやうにして靜に迎つた。咳嗽と痰と烈しく出るのを、處々で吊臺を止めて、紙で拭ひ取つた。そして咳嗽を止める爲めの氷塊を幾片となく含ませた。

初冬の日影は薄ら寒い。早稻田近い屋敷町の古い家に着いて、庭から座敷に辛うじて病人を移した。此家、此座敷、此處には兄の半生が細かに織込まれてゐる。古い箆笥、古い鏡臺、丈の低い六枚屏風には、古文書の銅版摺が貼られてあつて、床の間には陶製の獅子が置かれてある。机、硯、硯箱、座敷の到る處に古い本箱が數限りなく並べられてあるが、中には、漢學、國學の書が一杯に詰つて居る。歴史考證の書も多い。座敷の中央——蒼い瘦せた顔を仰向に、二枚重ねた蒲團の上に病人を寝かした。薄ら寒いので障子を閉めたが、處々破れて居るので、空が見える、樹が見える。垣根の向うには近所の子供が毬投を遣つて居る聲が喧しく聞える。

庭には樹が多い。杉、檜、梅、躑躅、椿、桃、桶を埋めた水には子子が浮いて居た。萩も枯れたまま、盆栽を載せる臺も半ば崩れ懸けて居た。

僕等は此家に十五年住んだ。兄が洋服姿で元氣よく役所から歸つた頃のことを眼に見えるやうだ。母が縁側の日向に出て、後向になつて裁縫をして居たのも昨日のやうに思はれる。絶ゆることなき家庭の衝突、互に面白からぬ顔を突合せて、黙つて夕飯の箸を運ばせた。母は晩酌の二合の酒、酔つて來るとそろ／＼不平を始めるので、いとどさびしい薄暮を一層不愉快にして、洋燈のつく頃はこの世も盡くる

かとはかり情なく悲しかつた。僕は佻しい此家の四疊半で、神経性の不健全の男となつた。母は酒と不平と荒涼たる生活と我儘な性質とでわれとわが身體を傷つけて、癌腫を病つて死んでしまつた。兄は小さい感情と小さい希望と小さい煩悶とを抱いて、世の中の烈しい波に漂つた。新しい嫂も出來た。門の梅も咲いた。けれど此の暗い家には遂に明るい一道の光線だに射さなかつた。

庭の樹は皆繁つた。門内の檜樹は屋を蔽ふばかりになつた。躑躅は枝が網のやうになつた。椿は檐につくやうになつた。鬱蒼とした木犀は兄が曾て神樂坂の縁日で鉢で買つて來て移したものだ。僕は想ひ出す、十五六年前、好い家屋は無いかと思つて、其頃はまだ田舎であつた此近邊を捜し廻つて、此田圃の中の一軒家を見出した時のことを。新築の家屋ではあつたが、請負普請で、建附が曲つて居た。こんな家は仕方が無いと兄が言ふのを、眺望が好いのと、周圍が廣々として居るのと、間敷の割合に家賃が低廉いので、それでは住んで見ようといふことになつて、四谷から移轉した。家屋の周圍は茶畑で、冬は寒かつた。雨の日、風の日には殆ど裏の雨戸が明けられなかつた。其頃は嫂のお貞さんが居た。手を駈だらけにして、田圃道に向いた井戸で、頻りに洗物を爲た。丸髻に赤い手絡を懸けて、メリンスの腰巻をまくつて、一生懸命に家事に齷齪して居た。原で子供が凧を揚げるので其のうなりの音が喧しく四邊に聞えた。嫁菜、根芹、野蒜などが其田圃に多く出て、僕は母親と一緒によくそれを摘んだものだ。そして毎日五時頃には、淡竹の大藪の向うから、細い道を夕日に向つて、屹度洋服姿の兄がてくて

くと役所から歸つて来る。若い嫂は何時も其頃は井戸に出て米を磨いて居た。

家庭の衝突の小歴史の中に、茶畑は屋敷町になつた。淡竹の大藪は切開かれて了つた。前の丘を崩して、其土を運んで田圃を埋め盡した。暗い家に對する十五年の僕の追憶、それを恣にするには四邊が餘りに變り過ぎた。

淡竹の大藪の向うに、僕等の懸りつけの醫師があつた。ペンキ塗の新しい西洋風の家屋は茅葺藁葺の家屋の中に、著しい光彩を放つて居た。今ではそのペンキ塗も灰色によごれて仕舞ひ、醫師が僕の母の死亡届を書いて呉れたが、今度は死を宣告された兄の病床を見舞ふこととなつた。

兄は其暗い家で、頭を樹の繁つた庭に向けて、古文書の銅版を貼りつけた屏風に圍まれて死んだ。時刻こそ違へ、母親の死んだのと同じやうにして。

生と死といふことを僕を考へた。

生と死以外、生から死に行く途中に、生でもなく死でもない境があると僕は思ふ。生の希望のあるうちは、病者は血の通ふ同類として、充分なる取扱を受けるが、一度生の希望が絶えたと、もう同類としての扱ひを人間から受けることが出来なくなる。死を宣告された人間は嚴密なる意味でもう人間の伍伴には入れられて居らないのだ。人間として無能力者たるの取扱ひを受けねばならぬのである。この生に
あらず死にあらざる境を、誰も一度は經なければならぬと思ふと、著るしい人生の空虚を僕は感ずる。

『何うせ死ぬものなら、早く御参りさせたい。』といふ言葉がある。

『生きる者ならば生かしてやる。死ぬる者なら早く殺して遣る。』といふ神の御利益を有難がつて、裸足参りをする人間がある。

夫が呼吸を引取つたので、もうこれで子供を産ませられる重荷がなくなつたとほつと呼吸をつく妻がある。

僕は兄の垂死の床に侍した。僕は隠す處なく言はう。悲哀はあつた、追懐はあつた、涙はこぼれた。けれどもまだ其肉體が生にあらざる境にある間は、充分に胸を開いて泣くことが出来なかつた。終極——問題の解決を待つやうな希望が絶えず胸の中に蟠つて居た。そして自己の存在、自己の快樂の爲めに自由に心を他に移し得る餘裕を持つて居た。『人の血の流れるのは自分の血の流れるのではない。』といふ皮肉な言葉を思ひ出して、自から切齒して或力に反抗した。

反抗したが、甲斐が無かつた。

翻つて生から死に赴かうとする病者を見る。矢張同じである。病者が苛々して、枕元の藥瓶を投つけたといふ話はよくある。死に近き病者ほど烈しい力の壓迫を感じて、生の意味を失つて了ふ。……僕は

此時自然力の憎むべきを痛切に思つた。

刻々に迫つて、込上げて来る呼吸の刻みが間近から間遠になる。

『あゝ、もう引取つた！』

『もう呼吸が無い。』

『もう行つた。』

續いて、南無阿彌陀佛の稱名がけたましく起る。聲を擧げて泣く。到る處に歎歎の聲がする。死者に對する同情が湧くやうに人々の胸に上る。一瞬間の死がすべて人間の不淨を清潔ならしめたやうに、全心を捧げて同情する。緩い清い美しい悲哀や同情が來た時には、憎むべき自然力は既に其犠牲を拉し得て去つて了つた後だ。何の甲斐がある。愚なる人間！

二七日の法事の席で、嫂は僕に兄の先妻からの手紙を見せた。

拙き筆して申上參らせ候、初七日の日は御内の皆様方御參に御出懸け候こと、存じ、態と遠慮仕り、其翌日青山の墓地に參り候、薄き縁と思ひ候へば、墓の前を立去り兼候、まして喜久治（生兒の名）のことを思ひ候ひて、今時分はお父様と呼びて、だつこされて居ることと思ひ候へば、私一人此世の中に残され候心地致し、穴の中に入りたくと存候、拙き筆にて思ふ萬分一も申上兼候へども、たよりなきものに有之候間、此後とも妹と思召し、力にもなり頂き度、文して申上參らせ候。

姉上様

貞

僕はこれを読んで、種々のことを考へた。青山墓地の左の隅にある小さい墓——其兄の子の墓を先づ思ひ出した。家庭の悲劇の主人公なる母と、近く死んだ兄の一生とを思ひ遣つた。淋しく生残つた前の嫂をも胸に描いた。生兒を壓殺した朝のけたましい泣聲、續いて起つた淺ましい光景、それも今更のやうに分明と眼に見えた。

時は過去つた。そして總てを解釋した。

嫂は、

『本當に氣の毒ですよ。私はこれを読んで泣いて了ひました。……亡くなつた子のことを考へたのでせうね。』

『本當に一人になつたんだからナ。』

『可哀相——。』

嫂は亡くなつた兄を思出してか聲が曇つた。

『大に力になつて遣るサ。』

『えゝゝそれはねえ、もうお互ですものねえ。本當に佛は優しい人で、妾のやうなものにもあんな

兄

に深切にして呉れたんですから、お貞さんだつて、誰だつて思ひ切れないのは當然ですよ。此間もね、お清さん、そら琴の師匠の娘さんさね、あの方が来てね、お線香を上げて下すつて、一緒に泣きましたよ。優しい好い人は皆な早く死んで行つて了つて……。』

僕は黙つて種々のことを考へた。

苦しい悲しい辛い追懐のある其の暗い家は、一月後貸家札が貼られたが、間もなく新しく住む人があつて、庭樹を透して明るい燈光がかゝやいて居た。新しき幸福あれと思つて僕は通り過ぎた。

少女病

—

山手線の朝の七時二十分の上り汽車が、代々木の電車停留場の崖下を地響させて通る頃、千駄谷の田畝をてく／＼と歩いて行く男がある。此男の通らぬことはいかな日にもないので、雨の日には泥濘の深い田畝道に古い長靴を引ずつて行くし、風の吹く朝には帽子を阿彌陀に被つて塵埃を避けるやうにして通るし、沿道の家々の人は、遠くから其姿を見知つて、もうあの人を通つたから、あなたお役所が遅くなりますなどと春眠いぎたなき主人を揺り起す軍人の細君もある位だ。

此男の姿の此田畝道にあらはれ出したのは、今から二月ほど前、近郊の地が開けて、新しい家作が彼方の森の角、此方の丘の上に出來上つて、某少將の邸宅、某會社重役の邸宅などの大きな構が、武蔵野の名残の櫟の大並木の間からちら／＼と晝のやうに見える頃であつたが、其櫟の並木の彼方に、貸家建の家屋が五六軒並んであるといふから、何でも其處等に移轉して來た人だらうとの専らの評判であつた。

何も人間が通るのに、評判を立てる程のこともないのだが、淋しい田舎で人珍らしいのと、それに此男の姿がいかにも特色があつて、そして驚の歩くやうな變てこな形をするので、何とも謂へぬ不調和——その不調和が路傍の人々の閑な眼を惹くもとなつた。

年の頃三十七八、猫脊で、獅子鼻で、反齒で、色が淺黒くツツて、頬髯が煩さうに顔の半面を蔽つて、鳥渡見ると恐ろしい容貌、若い女などは晝間出逢つても氣味悪く思ふ程だが、それにも似合はず、眼には柔和なやさしいところがあつて、絶えず何物を見ても憧れて居るかのやうに見えた。足のコンパスは思切つて廣く、トットと小さきみに歩くその早さ！ 演習に朝出る兵隊さんもこれにはいつも三舎を避けた。

大抵洋服で、それもスコッチの毛の摩れてなくなつた鳶色の古脊廣、上にあほつたインパネスも羊羹色に黄んで、右の手には犬の頭のすぐ取れる安ステッキをつき、柄にない海老茶色の風呂敷包をかゝへながら、左の手はポケットに入れて居る。

四ツ目垣の外を通り懸ると、

『今お出懸けだ！』

と、田舎の角の植木屋の主婦が口の中で言つた。

其植木屋も新建の一軒家で、賣物のひよろ松やら檜やら黄楊やら八ツ手やらが其周圍にだらしなく

植付られてあるが、其向うには千駄谷の街道を持つてゐる新開の屋敷町が參差として連つて、二階の硝子窓には朝日の光が閃々と輝き渡つた。左は角筈の工場の幾棟、細い烟筒からはもう労働に取懸つた朝の烟がくろく低く靡いて居る。晴れた空には林を越して電信柱が頭だけ見える。

男はてく／＼と歩いて行く。

田畝を越すと、二間幅の石ころ道、柴垣、檜垣、要垣、其絶間々々に硝子障子、冠木門、瓦斯燈と順序よく並んで居て、庭の松に霜よけの繩のまだ取られずに附いて居るのも見える。一二丁行くと千駄谷通りで、毎朝、演習の兵隊が駆足で通つて行くのに邂逅する。西洋人の大きな洋館、新築の醫者の構への大きな門、駄菓子を賣る古い茅葺の家、此處まで來ると、もう代々木の停留場の高い線路が見えて、新宿あたりで、ポーと電笛の鳴る音でも耳に入ると、男は其の大きな體を先へのめらせて、見得も何も構はずに、一散に走るのが例だ。

今日も其處に來て耳を欬てたが、電車の來たやうな氣勢も無いので、同じ步調ですた／＼と歩いて行つたが、高い線路に突當つて曲る角で、ふと栗梅の縮緬の羽織をぞろりと着た恰好の好い鹿髪かづらの女の後姿を見た。鶯色のリボン、繻珍の鼻緒、おろし立ての白足袋、それを見ると、もう其胸は何となく時めいて、其癖何うの彼うのと言ふのでもないが、唯嬉しく、そはそはして、其先へ追越すのが何だか惜しいやうな氣がする様子である。男は此女を既に見知つて居るので、少くとも五六度は其女と同じ電車に

乗つたことがある。それどころか、冬の寒い夕暮、わざ／＼廻り路をして其女の家を突留めたことがある。千駄ヶ谷の田畝の西の隅で、櫛の木で取圍んだ奥の大きな家、其の總領娘であることをよく知つて居る。眉の美しい、色の白い頬の豊かな、笑ふ時言ふに言はれぬ表情を其眉と眼との間にあらはす娘だ。

『もう何うしても二十三、學校に通つて居るのではなし……それは毎朝逢はぬのでもわかるが、それにしても何處へ行くのだらう、』と思つたが、其思つたのが既に愉快なので、眼の前にちらつく美しい着物の色彩が言ひ知らず胸をそゝる。『もう嫁に行くんだらう？』と續いて思つたが、今度はそれが何だか佗しいやうな惜しいやうな氣がして、『己も今少し若ければ……』と二の矢を繼いでだか、『何だ馬鹿々々しい、己は幾歳だ、女房もあれば子供もある、と思ひ返した。思ひ返したが、何となく悲しい、何となく嬉しい。

代々木の停留場に上る階段の處で、それでも追ひ越して、衣ずれの音、白粉の香ひに胸を躍したが、今度は振り返りもせず、大足に、しかも駆けるやうにして、階段を上つた。

停留場の驛長が赤い回数切符を切つて返した。此驛長も其他の驛夫も皆な此大男に熟して居る。性急で、慌て者で、早口であるといふことをも知つて居る。

板圍ひの待合所に入らうとして、男はまた其前に兼ねて見知越の女學生の立つて居るのを眼敏くも見た。

肉附きの好い、頬の桃色の、輪廓の丸い、それは可愛い娘だ。派手な縞物に、海老茶の袴を穿いて、右手に女持の細い蝙蝠傘、左の手に、紫の風呂敷包を抱へて居るが、今日はリボンがいつものと違つて白いと男はすぐ思つた。

此娘は自分を忘れはすまい、無論知つてる！ と續いて思つた。そして娘の方を見たが、娘は知らぬ顔をして、彼方に向いて居る。あの位のうちは恥しいんだらう、と思ふと堪らなく可愛くなつたらしい。見ぬやうな振をして幾度となく見る、頻りに見る。——そしてまた眼を外して、今度は階段の處で追越した女の後姿に見入つた。

電車の來るのも知らぬといふやうに——。

二

此娘は自分を忘れはすまいと此男が思つたのは、理由のあることで、それには面白い一小挿話があるのだ。此娘とは何時でも同時刻に代々木から電車に乗つて、牛込まで行くので、以前からよく其姿を見知つて居たが、それと謂つて敢て口を利いたといふのではない。唯相對して乗つて居る、よく肥つた娘だなアと思ふ。あの頬の肉の豊かなこと、乳の大きなこと、立派な娘だなど、續いて思ふ。それが度重なると、笑顔の美しいことも、耳の下に小さい黒子のあることも、込合つた電車の吊皮にすらりとのべ

た腕の白いことも、信濃町から同じ学校の女學生とをりく、邂逅して蓮葉はすつばに會話を交ゆることも、何も彼もよく知るやうになつて、何處の娘かしらん？ など、其家、其家庭が知り度くなる。

でも後をつけるほど氣にも入らなかつたと見えて、敢てそれを知らうとも爲なかつたが、ある日のこと、男は例の帽子、例のインバネス、例の脊廣、例の靴で、例の道为例のごとく千駄谷の田畝に懸つて來ると、不圖前から其肥つた娘が、羽織の上に白い前懸をだらしなくしめて、半ば解き懸けた髪を右の手で押へながら、友達らしい娘と何事かを語り合ひながら歩いて來た。何時も逢ふ顔に違つた處で逢ふと、何だか他人でないやうな氣がするものだが、男もさう思つたと見えて、もう少して會釋を爲るやうな態度をして、急いだ歩調をはたと留めた。娘もちらと此方を見て、これも『あゝあの人だナ、いつも電車に乗る人だナ、』と思たらしかつたが、會釋をするわけもないので、黙だまつてすれ違つて了つた。男はすれ違ひざまに、『今日は學校に行かぬのかしらん？ さうか、試験休みか春休みか、』と我知らず口に出して言つて、五六間無意識にてくく歩いて行くと、不圖黒い柔かい美しい春の土に、丁度金屏風に銀で畫いた松の葉のやうにそつと落ちて居るアルミニウムびの留針。

娘のだ！

突如いきなり、振り返つて、大きな聲で、

『もし、もし、もし、』

と連呼した。

娘はまだ十間ほど行つたばかりだから、無論此聲は耳に入つたのであるが、今すれ違つた大男に聲を懸けられるとは思はぬので、振り返りもせず、友達ともの娘と肩を並べて靜かに語りながら歩いて行く。朝日が美しく野の農夫の鋤の刃に光る。

『もし、もし、もし、』

と男は韻うんを押んだやうに再び叫んだ。

で、娘も振り返る。見るとその男は兩手を高く舉げて、此方こなたを向いて面白い恰好かこうをして居る。ふと、氣が附いて、頭に手を遣ると、留針ピンが無い。はつと思つて、『あら、私、嫌よ、留針を落してよ、』と友達に言ふでもなく言つて、其儘、ばたばたと駈け出した。

男は手を舉げたまゝ、其のアルミニウムの留針を持つて待つて居る。娘はいきせき驅けて來る。やがて傍に近寄つた。

『何うも有難う……』

と、娘は恥しさうに顔を赧かくして、禮を言つた。四角の輪廓をした大きな顔は、さも嬉しさうに莞爾えんじと笑つて、娘の白い美しい手に其の留針を渡した。

『何うも有難う御座いました。』

と、再び丁寧には娘は禮を述べて、そして踵を旋した。

男は嬉しくて爲方が無い。愉快でたまらない。これであの娘、己の顔を見覺えたナ……と思ふ。これから電車で邂逅しても、あの人が私の留針を拾つて呉れた人だと思ふに相違ない。もし己が年が若くつて、娘が今少し別嬪で、それでかういふ幕を演ずると、面白い小説が出来ると、取留もないことを種々に考へる。聯想は聯想を生んで、其身の徒らに青年時代を浪費して了つたことや、戀人で娶つた細君の老いて了つたことや、子供の多いことや、自分の生活の荒涼としてゐることや、時勢に後れて將來に發達の見込のないことや、いろ／＼なことが亂れた絲のやうに纏れ合つて、こんがらがつて、殆ど限がない。ふと、其の勤めて居る某雜誌社のむづかしい編輯長の顔が空想の中に歴々と浮んだ。と、急に空想を捨て、路を急ぎ出した。

三

此男は何處から來るかと言ふと、千駄谷の田畝を越して、櫛の並木の向うを通つて、新建の立派な邸宅の門をつらねて居る間を抜けて、牛の鳴聲の聞える牧場、檜の大樹の連つて居る小徑——その向うをだら／＼と下つた丘陵の蔭の一軒家、毎朝かれは其處から出て來るので、丈の低い要垣を周圍に取廻して、三間位と思はれる家の構造、床の低いのと屋根の低いのを見ても、貸家建ての粗雑な普請であるこ

とが解る。小さな門の中に入りなくとも、路から庭や座敷がすつかり見えて、篠竹の五六本生えて居る下に、沈丁花の小さいのが二三株咲いて居るが、其傍には鉢植の花ものが五つ六つだらしなく並べられてある。細君らしい二十五六の女が甲斐々々しく襷掛になつて働いて居ると、四歳位の男の兒と六歳位の女の兒とが、座敷の次の縁側の日當りの好い處に出て、頻りを何事をか言つて遊んで居る。

家の南側に、釣瓶を伏せた井戸があるが、十時頃になると、天氣さへ好ければ、細君は其處に盥を持ち出して、頻りに洗濯を遣る。着物を洗ふ水の音がざ／＼と長閑に聞えて、隣の白蓮の美しく春の日に光るのが、何とも言へぬ平和な趣をあたりに展げる。細君は成程もう色は衰へて居るが、娘盛りにはこれでも十人並以上であらうと思はれる。や、舊派の束髪に結つて、ふつくりとした前髪を取つてあるが、着物は木綿の縞物を着て、海老茶色の帯の末端が地について、帯揚のところ、洗濯の手を動かす度に微かに揺く。少時すると、末の男の兒が、かアちゃん／＼と遠くから呼んで來て、傍に來ると、いきなり懐の乳を探つた。まアお待ちよと言つたが、中々言ふことを聞きさうにもないので、洗濯の手を前垂てそ／＼と拭いて、前の縁側に腰をかけて、子供を抱いて遣つた。其處へ總領の女の兒も來て立つて居る。

客間兼帶の書齋は六疊で、硝子の嵌つた小さい西洋書箱が西の壁につけて置かれてあつて、栗の木の机がそれと反對の側に据ゑられてある。床の間には春蘭の鉢が置かれて、幅物は偽物の文晁の山水だ。

春の日が室の中までさし込むので、實に暖い、氣持が好い。机の上には二三の雑誌、硯箱は能代塗の黄い木地の木目が出てゐるもの、そして其處に社の原稿紙らしい紙が春風に吹かれて居る。

此主人公は名を杉田古城と謂つて言ふまでもなく文學者。若い頃には、相應に名も出て、二三の作品は随分喝采されたこともある。いや、三十七歳の今日、かうしてつまらぬ雑誌社の社員になつて、毎日毎日通つて行つて、つまらぬ雑誌の校正までして、平凡に文壇の地平線以下に沈没して了はうとは思はなかつたであらうし、人も思はなかつた。けれどかうなつたのは原因がある。此男は昔から左様だが、何うも若い女に憧れるといふ悪い癖がある。若い美しい女を見ると、平生は割合に鋭い觀察眼もすつかり權威を失つて了ふ。若い時分、盛に所謂少女小説を書いて、一時は随分青年を魅せしめたものだが、觀察も思想もないあくがれ小説がさういつまで人に飽きられずに居ることが出来よう。遂には此男と少女と謂ふことが文壇の笑草の種となつて、書く小説も文章も皆な笑ひ聲の中に没却されて了つた。それに、其容貌が前にも言つた通り、此上もなく蠻カラなので、いよくそれが好い反映コントラストをなして、あの顔で、何うしてあゝだらう、打見た所は、いかな猛獸とても闘ふといふやうな風采と體格とを持つて居るのに……。これも造化の戯れの一つであらうといふ評判であつた。

ある時、友人間で其噂があつた時、一人は言つた。

『何うも不思議だ。一種の病氣かも知れんよ。先生のは唯、あくがれるといふばかりなのだからね。』

美しいと思ふ、唯それだけなのだ。我々なら、さういふ時には、すぐ本能の力が首を出して来て、唯、あくがれる位では何うしても満足が出来んがね。』

『さうとも、生理的に、何處か陷落ロストして居るんぢやないかしらん。』

と言つたものがある。

『生理的と言ふよりも性質ぢやないかしらん。』

『いや、僕は左様は思はん。先生、若い時分、餘に恣ソシなことをしたんぢやないかと思ふね。』

『恣とは？』

『言はずとも解るぢやないか……。獨りて餘り身を傷つけたのさ。その習慣が長く續くと、生理的に、ある方面がロストして了つて、肉と靈とがしつくり合はんさうだ。』

『馬鹿な……。』

と笑つたものがある。

『だつて、子供が出来るぢやないか。』

と誰か言つた。

『それは子供は出来るさ……。』と前の男は受けて、『僕は醫者に聞いたんだが、其結果は色々ある相だ。烈しいのは、生殖の途が絶たれて了ふさうだが、中には先生のやうになるのもあるといふことだ。』

よく例があるつて……僕にいろいろ教へて呉れたよ。僕は屹度さうだと思ふ。僕の鑑定は誤らんさ。』

『僕は性質だと思ふがね。』

『いや、病氣ですよ、少し海岸にでも行つて好い空氣でも吸つて、節慾しなければいかんと思ふ。』

『だつて、餘りをかしい、それも十八九とか二十二三とかなら、さういふこともあるかも知れんが、細君があつて、子供が二人まであつて、そして年は三十八にもならうと言んぢやないか。君の言ふことは生理學萬能で、何うも斷定過ぎるよ。』

『いや、それは説明が出来る。十八九でなければさういふことはあるまいと言ふけれど、それはいくらかもある。先生、屹度今でも遣つて居るに相違ない。若い時、あゝいふ風で、無闇に戀愛神聖論者を氣取つて、口では綺麗なことを言つて居ても、本能が承知しないから、つい自から傷けて快を取るといふやうなことになる。そしてそれが習慣になると、病的になつて、本能の充分の働を爲ることが出来なくなる。先生のは屹度それだ。つまり、前にも言つたが、肉と靈とがしつくり調和することが出来んのだよ。それにしても面白いぢやないか、健全を以て自からも任じ、人も許して居たものが、今では不健全も不健全、デカダンの標本になつたのは、これといふのも本能を蔑ないがしろにしたからだ。君達は僕が本能萬能説を抱いて居るのをいつも攻撃するけれど、實際、人間は本能が大切だよ。本能に従はん奴は生存して居られんさ。』と滔々として辯じた。

四

電車は代々木を出た。

春の朝は心地が好い。日がうらくと照り渡つて、空氣はめづらしくつきりと透徹すきほつて居る。富士の美しく霞んだ下に大きい櫟林が黒く並んで、千駄谷の凹地に新築の家屋の參差さんしとして連つて居るのが走馬燈のやうに早く行過ぎる。けれど此無言の自然よりも美しい少女の姿の方が好いので、男は前に相對した二人の娘の顔と姿とに殆ど魂を打込んで居た。けれど無言の自然を見るよりも活きた人間を眺めるのは困難なもので、餘りしげく見て、悟られてはといふ氣があるので、傍を見て居るやうな顔をして、そして電光のやうに早く鋭くながし眼を遣つかふ。誰だか言つた、電車で女を見るのは正面では餘り眩まはゆくつていけない、さうかと言つて、餘り離れても際立つて人に怪まれる恐れがある、七分位に斜に對して座を占めるのが一番便利だと。男は少女にあくがれるのが病であるほどであるから、無論、此位の秘訣は人に教はるまでもなく、自然に其の呼吸を自覺して居て、いつでも其の便利な機會を攫つかむことを過まらぬ。

年上の方の娘の眼の表情がいかにも美しい。星——天上の星もこれに比べたなら其の光を失ふであらうと思はれた。縮緬のすらりとした膝のあたりから、華奢な藤色の裾、白足袋をつまだてた三枚襲せうの雪

駄、ことに色の白い襟首から、あのむつちりと胸が高くなつて居るあたりが美しい乳房だと思ふと、總身が搔きむしられるやうな氣がする。一人の肥つた方の娘は懐からノウトブックを出して、頻りにそれを讀み始めた。

すぐ千駄ヶ谷驛に來た。

かれの知り居る限りに於ては、此處から、少くとも三人の少女が乗るのが例だ。けれど今日は、何うしたのか、時刻が後れたのか早いのか、見知つて居る三人の一人だも乗らぬ。その代りに、それは不器量な、二目とは見られぬやうな若い女が乗つた。この男は若い女なら、大抵な醜い顔にも、眼が好いか、鼻が好いとか、色が白いとか、襟首が美しいとか、膝の肥り具合が好いとか、何かしらの美を發見して、それを見て楽しむのであるが、今乗つた女は、さがしても、發見されるやうな美は一ヶ所も持つて居らなかつた。反齒、ちぢれ毛、色黒、見た丈でも不愉快なのが、いきなりかれの隣に來て座を取つた。

信濃町の停留場は、割合に乗る少女の少いところで、曾て一度すばらしく美しい、華族の令嬢かと思はれるやうな少女と膝を並べて牛込まで乗つた記憶があるばかり、其後、今一度何うかして逢ひたいもの、見たいものと願つて居るけれど、今日までつひぞかれの望は遂げられなかつた。電車は紳士やら軍人やら商人やら學生やらを多く載せて、そして飛龍のごとく駛り出した。

隧道を出て、電車の速力が稍々緩くなつた頃から、かれは頻りに首を停車場の待合所の方に注いで居たが、ふと見馴れたリボンの色を見得たと見えて、其顔は晴々しく輝いて胸は躍つた。四ツ谷からお茶の水の高等女學校に通ふ十八歳位の少女、身装も綺麗に、ことにあてやかな容色、美しいと言つてこれほど美しい娘は東京にも澤山はあるまいと思はれる。丈はすらりとして居るし、眼は鈴を張つたやうにぱつちりとして居るし、口は緊つて肉は瘦せず肥らず、晴々した顔には常に紅が漲つて居る。今日は生憎乗客が多いので、其儘扉の傍に立つたが、『込合ひますから前の方へ詰めて下さい』と車掌の言葉に餘儀なくされて、男のすぐ前のところ來て、下げ皮に白い腕を延べた。男は立つて代つて遣りたいとは思はぬではないが、さうするとその白い腕が見られぬばかりではなく、上から見下ろすのは、いかにも不便なので、其儘席を立たうとしなかつた。

込合つた電車の中の美しい娘、これほどかれに興味深くうれしく感ぜられるものはないので、今迄にも既に幾度となく其の嬉しさを經驗した。柔かい着物が觸る。得られぬ香水のかほりがする。温かい肉の觸感が言ふに言はれぬ思ひをそゝる。ことに、女の髪の匂ひと謂ふものは、一種の烈しい望を男に起させるもので、それが何とも名状せられぬ愉快をかれに與へるのであつた。

市谷、牛込、飯田町と早く過ぎた。代々木から乗つた娘は二人とも牛込で下りた。電車は新陳代謝して、益々混雑を極める。それにも拘らず、かれは魂を失つた人のやうに、前の美しい顔にのみあくがれ

渡つて居る。

やがてお茶の水に着く。

五

此男の勤めて居る雑誌社は、神田の錦町で、青年社といふ、正則英語学校のすぐ次の通りで、街道に面した硝子戸の前には、新刊の書籍の看板が五つ六つも並べられてあつて、戸を開けて中に入ると、雑誌書籍の埒もなく取散された室の帳場には社主の難かしい顔が控へて居る。編輯室は奥の二階で、十疊の一室、西と南とが塞^{ふさ}つて居るので、陰氣なこと夥しい。編輯員の机が五脚ほど並べられてあるが、かれの机は其の最も壁に近い暗いところで、雨の降る日などは、洋燈が欲しい位である。それに、電話がすぐ側にあるので、間斷^{しつかり}なしに鳴つて来る電鈴が實に煩^{うるさ}い。先生、お茶の水から外濠線に乗換へて錦町三丁目の角まで来て下りると、楽しかつた空想はすつかり覺めて了つたやうな佻しい氣がして、編輯長と其の陰氣な机とがすぐ眼に浮ぶ。今日も一日苦しまなければならぬかナアと思ふ。生活と謂ふものはつらいものだとすぐ後を續ける。と、此世も何もないやうな厭氣になつて、街道の塵埃が黄く眼の前に舞ふ。校正の穴埋めの厭なこと、雑誌の編輯の無意味なることが歴々^{りり}と頭に浮んで来る。殆ど留度が無い。そればかりならまだ好いが、半ば覺めてまだ覺め切らない電車の美しい影が、其佻しい黄い

塵埃の間に覺束なく見えて、それが何だかかう自分の唯一の樂みを破壊して了ふやうに思はれるので、いよ／＼つらい。

編輯長がまた皮肉な男で、人を冷かすことを何とも思はぬ。骨折つて美文でも書くと、杉田君、またおのろけが出ましたねと突込む。何ぞと謂ふと、少女を持出して笑はれる。で、をり／＼はむつとして、己は子供ぢやない、卅七だ、人を馬鹿にするにも程があると憤慨する。けれどそれはすぐ消えて了ふので、懲^こりることもなく、艶っぽい歌を詠み、新體詩を作る。

即ちかれの快樂と言ふのは電車の中の美しい姿と、美文新體詩を作ることと、社に居る間は、用事さへ無いと、原稿紙を延^のべて、一生懸命に美しい文を書いて居る。少女に關する感想の多いのは無論のことだ。

其日は校正が多いので、先生一人それに忙殺されたが、午後二時頃、少し片附いたので一息吐いて居ると、

『杉田君。』

と編輯長が呼んだ。

『え？』

と其方を向くと、

『君の近作を読みましたよ。』と言つて、笑つて居る。

『さうですか。』

『不相變、美しいねえ、何うしてあゝ綺麗に書けるだらう。實際、君を好男子と思ふのは無理は無いよ。何とか謂ふ記者は、君の大きな體格を見て、其の豫想外なのに驚いたと言ふからね。』

『さうですかナ。』

と、杉田は詮方なしに笑ふ。

『少女萬歳ですな！』

と編輯員の一人が相槌を打つて冷かした。

杉田はむつとしたが、下らん奴を相手にしてもと思つて、他方を向いて了つた。實に癩に觸る、卅七の己を冷かす氣が知れぬと思つた。

薄暗い陰氣な室は何う考へて見ても佗しさに耐へかねて巻煙草を吸ふと、青い紫の烟がすうと長く靡く。見詰めて居ると、代々木の娘、女學生、四谷の美しい姿などが、ごつちやになつて、纏れ合つて、それが一人の姿のやうに思はれる。馬鹿々々しいと思はぬではないが、しかし愉快でないこともない様子だ。

午後三時過、退出時刻が近くなると、家のことを思ふ。妻のことを思ふ。つまらんな、年を老つて了

つたとつくづく慨嘆する。若い青年時代を下らなく過して、今になつて後悔したとて何の役に立つ、本當につまらんなアと繰返す。若い時に、何故烈しい戀を爲なかつた？ 何故充分に肉のかほりをも嗅がなかつた？ 今時分思つたとて、何の反響がある？ もう卅七だ。かう思ふと、氣が苛々して、髪の毛をむしり度くなる。

社の硝子戸を開けて戸外に出る。終日の勞働で頭脳はすっかり勞れて、何だか脳天が痛いやうな氣がする。西風に舞ひ上る黄い塵埃、佗しい、佗しい。何故か今日は殊更に佗しくつらい。いくら美しい少女の髮の香に憧れたからつて、もう自分等が戀をする時代ではない。また戀を爲たいとつて、美しい鳥を誘ふ羽翼をもつて居らない。と思ふと、もう生きて居る價值が無い、死んだ方が好い、死んだ方が好い、死んだ方が好い、とかれは大きな體格を運びながら考へた。

顔色が悪い。眼の濁つて居るのは其心の暗いことを示して居る。妻や子供や平和な家庭のことを念頭に置かぬではないが、そんなことはもう非常に縁故が遠いやうに思はれる。死んだ方が好い？ 死んだら、妻や子は何うする？ 此念はもう微かになつて、反響を與へぬほど其心は神經的に陥落して了つた。寂しさ、寂しさ、寂しさ、此寂しさを救つて呉れるものはないか、美しい姿の唯一つで好いから、白い腕に此身を卷いて呉れるものは無いか。さうしたら、屹度復活する。希望、奮闘、勉勵、必ず其處に生命を發見する。この濁つた血が新しくなれると思ふ。けれど此男は實際それに由つて、新しい勇

氣を恢復することが出来るか何うかは勿論疑問だ。

外濠の電車が来たのでかれは乗った。敏捷な眼はすぐ美しい着物の色を求めたが、生憎それにはかれの願ひを満足させるやうなものは乗つて居らなかつた。けれど電車に乗つたといふことだけで心が落付いて、これからが——家に歸るまでが、自分の極樂境のやうに、氣がゆつたりとなる。路側のさまざまの商店やら招牌やらが走馬燈のやうに眼の前を通るが、それがさまざまの美しい記憶を思ひ起させるので好い心地がするのであつた。

お茶の水から甲武線に乗換へると、をりからの博覽會で電車は殆ど満員、それを無理に車掌の居る所に割込んで、兎に角右の扉の外に立つて、確りと眞鍮の丸棒を攫んだ。ふと車中を見たかれははつとして驚いた。其硝子窓を隔て、すぐ其處に、信濃町で同乗した、今一度是非逢ひたい、見たいと願つて居た美しい令嬢が、中折帽や角帽やインバネスに殆ど壓しつけられるやうになつて、丁度鳥の群に取巻かれた鳩といったやうな風になつて乗つてゐる。

美しい眼、美しい手、美しい髪、何うして俗惡な此の世の中に、こんな綺麗な娘が居るかと思つた。誰の細君になるのだらう、誰の腕に卷かれるのであらうと思ふと、堪らなく口惜しく情けなくなつて其結婚の日は何時だか知らぬが、其日は呪ふべき日だと思つた。白い襟首、黒い髪、鶯茶のリボン、白魚のやうな綺麗な指、寶石入の金の指輪——乗客が混合つて居るのと硝子越になつて居るのとを都合の好

いことにして、かれは心ゆくまで其の美しい姿に魂を打込んで了つた。

水道橋、飯田町、乗客は愈多い。牛込に來ると、殆ど車臺の外に押出されさうになつた。かれは眞鍮の棒につかまつて、しかも眼を令嬢の姿から離さず、恍惚として自からわれを忘れるといふ風であつたが、市谷に來た時、また五六の乗客があつたので、押つけて押かへしては居るけれど、稍ともすると、身が車外に突出されさうになる。電線のうなりが遠くから聞えて來て、何となくあたりが騒々しい。パイと發車の笛が鳴つて、車臺が一二間ほど出て、急にまた其速力が早められた時、何うした機會か少くとも横に居た乗客の二三が中心を失つて倒れ懸つて來た爲めでもあらうが、令嬢の美に恍惚として居たかれの手が眞鍮の棒から離れたと同時に、其の大きな體は見事に筋斗がへりを打つて、何の事はない大きな毬のやうに、ころ／＼と線路の上に轉り落ちた。危ないと車掌が絶叫したのも遅し早し、上の電車が運悪く地を撼かして遣つて來たので、忽ち其の黒い大きい一塊物は、あなやと言ふ間に、三四間ずる／＼と引摺られて、紅い血が一線長くレイルを染めた。

非常警笛が空氣を劈いてけた、ましく鳴つた。

弟

今度の千葉の講演には、稻毛の海氣館から僕は通つた。縣廳の役人共は、僕が細君同伴で来て居ると思つて、わざと遠慮して煩さく訪問を爲て呉れなかつたので、お蔭で、至極暢氣に三日を暮した。彼處は鳥渡好いね。

別墅べつすう式の小さい家屋が彼方此方松原の中に獨立して居て、なんだか好い感じがする。場所が場所だから、餘り好ましい處では無いとは始めから思つたが、それでも存外あの家は堅いと見えて、一人の男客には女中が屹度二人づゝついて出るよ。僕は退屈まぎれに其女中共を相手にして、いろ／＼な話を聞いた。

聞き給へ、かういふのがある、これはちよつと話の種になる。

何でも昨年の秋ださうだ。そら、あの松原の中の、有名な西洋畫家の書齋の上にある六疊と八疊の家屋、彼處かそこで起つたことだ。旦那は實業家か、さうでなければ銀行員とでも謂つたやうな風、年齢はもう四十を越して居た。金鎖、金時計の立派な扮装いせちではあつたが、何處かかう野卑な處があつて、金満家な

ら俄分限と言つたやうなお里が見え透いて居た。伴れて来た女は何うも細君らしくない。かと言つて商賣人でもないらしい。年が二十三、底髪に結つて、色の白い、眼のぱちりした、瘦削やせ削な、脊のすらりとした佳い女だつた。櫛くしでも、蝙蝠傘でも中々金目な物で、殊に帶留が立派だつた。小形の鞆たもとの中から、手帳を出す、雑誌を出す、鏡を出す、湯上りのほつと上氣した身の意氣な不斷着に着替へた其姿がまた水際立つて美しかつた。女中共は随分各種の客に接して居るから、大抵それと見當のつかぬことは無いのだが、何うも此女ばかりは解らなかつたさうだ。旦那と話して居る調子が、至極打解けて居て、そして甘えるやうで、時には駄々も捏ねると言つた風、旦那はまたそれに憧れ切つて、専心其機嫌を取つて、一顰一笑にも夥しく氣を遣つて居た。まア、強ひて鑑定すれば、容色さびやう望みて、金を積んで、漸つと手に入れた新妻と云つた様なところがあつた、

旦那は肥つて、顔の輪廓が四角で、色が黒かつた。

で、一夜其處に泊つた。翌日、女は蒼い顔を爲て居る。氣分もはつきりしない様子。昨日の元氣な態度とは丸で變つて、美しい顔にも暗い色が上つた。旦那は忙せはしい身の、朝から出發の心構で居たらしかつたが、女が何うも氣分が進まぬと謂ふので、午後までぐづ／＼して立つたり居たりして居た。三時頃になると、女は氣分が何うも悪いから二三日此處に靜かにして置いて呉れと言ひ出した。男はこれを拒むことを敢てしなかつた。女中を呼んで多分の心附を遣つて、いろ／＼後のことを託して、女一人で淋

しいから、何分宜しく頼む、三四日中に迎へに来るからと言つて、四時の汽車で發つた。

女の美しい姿が、松原から松原を越えて、秋の晴れた海岸の路を靜かに逍遙ふのを多くの人々が見た。西洋畫家の書齋の硝子窓には夕日が美しく眩ゆく光つた。潮の引いた海は遠くまで洲を顯はして、紫色した富士が夕照の上に分明と見える。女中が夕飯の膳を運んだ時には、女は既に海岸から歸つて、頻りに長い手紙を書いて居た。

手紙を書終つて、封筒に入れて、宛名を書いて、それを夕飯の膳の傍に置いた。軽く二椀、鹽焼にも箸をつけずに食事を終つたが、女中に其手紙を渡しながら、

『私は、お願ひがあるんですがね。』

『え？』

と女中は仰ぎ見たが、後から思ふと顔が上氣して居た。

『私ね、……此の手紙を書いたのは、私の弟ですがね、……一人きりの弟で、親に二人とも早くから別れて……さびしくつて可哀相なんですがね、それに平生學校に居て、勉強してゐるんでせう。かういふ處に遊びに来たことなど、本當にないのだから、可哀相だから……呼んで一日二日遊ばして遣らうと思ふんですがね、來たら、宜しくね……。』

と女が言ふので、

『え、え、何うぞ……御一人で御淋しう御座いませうから。』

と女中は挨拶して引退つて、其手紙をポストに入れて遣つた。別段氣にも留めなかつたので、宛名は見ても忘れたが、所は本郷弓町三丁目であつたさうだ。

翌日午後二時頃、果してその弟が來た。二十一か二で、色の白い、鼻の隆い、眼に何とも謂へぬ愛嬌があつた。木綿の緋の書生羽織を着て、袴を穿いて居た。其顔を見ると、まアよく早く來て呉れた！

と姉さん大よろこびで、昨日からの氣分の悪いのは全く忘れて了つた様子、二人の間はいかにも馴々しく、いかにも懐かし氣で、まことの姉弟らしい態度は其言葉の中に現はれて居た。學校に居る間は、かういふ遊山は滅多に出來ぬと言ふので、夕飯には種々の御馳走の註文、一時間ほどの散歩から二人が歸つて來ると、明かな洋燈の下に、會津塗の會席膳、吸物、鹽焼、刺身、口取の栗のきんとん、ビールの饅、コップ二箇。

女中が堅いビールの栓を抜き兼ねて居ると、弟が引取つて、一氣に抜いて、姉さん！ 一つと饅を突出すと、姉がまア私がお酌をして上げるからと言つて、無理に奪ひ取つて、波々と注ぐ。コップの麥酒に洋燈の光が射し透つて、姉弟の顔にも、晴々しい快樂の色が行渡つて、一室が何となく賑かに明かるい。女も男に勧められて、軽くコップに一杯の酒、やがてほんのりと二人は酔つて、睦しい物語——昨夕の膳のさびしかつたのを女中は思出して、姉弟とはかうも好いものかと羨しく思つた。

處が其日は丁度陸軍のさる高貴の方が、習志野から歸りをお立寄で、本館の方はそれは忙がしかつた。お附の武官が劍鞘を鳴して往來する。警察官が萬一を慮かつて其附近を警戒する。其混雜は一通りではない。で、多い女中も手が足らぬ處から、八時頃に夜の物を入れた限り、其松原の中の別荘は、全くこの混雜からかけ離れて、其裏の小窓は、遅くまで明るく闇にかゝやいて居た。

翌朝、其女中が離室に行かうとすると、本館の角に立つて居た巡查が、

『おい〜。』

と呼ぶ。

何かと思ふと、

『あの離座敷の二人の客は何者だ？』

『御姉弟です。』

『姉弟？ 馬鹿な……。』

『だつて……本當に。』

『馬鹿な……あんな姉弟があつて堪るものか、二人とも、一晚中寝やしない。』

『だつて……。』

『本當にあんな姉弟はありはせぬよ。今しがた寝たばかりだ。まだ起きはせんから、行つたつて駄目

だ。』

と巡查は笑ひながら言ふ。

行つて見ると、果してまだ寢て居た。

高貴の方は八時に發つて了はれた。で、家は大風の吹いた後のやうに靜かになる。離室では九時になつても、手を鳴して呼ぶやうな氣勢も無い。朝食が餘り遅くなつてはと思つて、女中が行て見ると、丁度其時其弟が起きて、戸を一枚明けて居る處であつた。で、座敷を掃除する、其隙を女はだらしない艶かしい風をして、本館の前の大きな泉で顔を洗つた。其傍に男は齒を磨きながら、羽織の長い白い紐をだらりと垂らして立つて居たが、女が濟むと、タオルを其手から受取つて、ザブ〜と頭を浸して洗つた。何うも其様子が男女の普通の關係とも違ふやうだ。さうかと言つて姉弟にしては顔が似て居ないし、何處かかう唯ならぬ處が見える。女中は巡查の注意もあるので、朝食の給仕をしながらも、餘程氣を注げて見たが、何うも解らない。戀中のやうでもあるし、姉弟のやうでもある。

で、その夜も男は泊つた。

ところが、其翌日の午前十時頃ださうだ。朝食をすまして、女中が御膳を引いて間もなく、本館の入口に、以前の商人風の旦那が不意に東京から遣つて來て、此處へこれ〜といふ女が世話になつて居る筈だが……と聞く。生憎應接に出た番頭が不馴な男で、解り切つて居るものを、宿帳を捻くり廻はして、

『え、御連様が居らつしやる。』と遣つた。

『連れ？』

と、男は思ひもかけぬと言つたやうであつたが、番頭の捻くり廻して居る宿帳を鳥渡と手に取つて見て、急に顔の色を變へた。

處へ馴染の女中が来て、其の不穩の有様を見て取つて、挨拶も碌々爲ずに、急いで離室へと駆けて行つた。

『旦那様が……。』

と知らせると、をりから女は髪を結び懸けて、玉を延べたやうな白い兩腕をさながらに、庇のふくらみを鏡に寫して、頻りに思ひのまゝにならぬを氣にして居たが、自分の耳を疑ふかのやうに、

『え？』

『あの旦那様が……。』

女の顔は見る／＼蒼青になつて、肉の戰慄が分明と見えた。もう暢氣に庇髪の膨らみ加減などを見て居るどころではない。

『お前、あの弟の來てることを言つて？』

語氣が慌て返つて居た。

女中は番頭の告げたことを知つては居るが、此の場合、さう打明けて言ふに忍びぬので、

『いゝえ、そんなことは……。』

『それなら好いけれど。』

と、些しは安心した様子で、髪を長く亂した儘、下駄を突懸けて、戸外に出た。けれどももう遅かつた。旦那は既に其處に來て居た。

女を見ると、突如顔色を變へて肩の處を烈しく攫んだ。女中が見て居ると、旦那は何か烈しい言葉を懸けながら、女を押すやうにして、路の無い裏の松原の中に入るとも無く入つて行つた。朝の長けた日影が美しく松原に透つて、下草の無い褐色の砂地は、帯で掃いたやうに綺麗になつて居る。

見える、實に分明とよく見える。旦那が女を松の幹に押付けて、髪の毛を握らんばかりにして、烈しく小突き廻して居るさまが手に取るやうに見える。女は後向になつて、帯をだらしなく下げて居るが、旦那に小突かれる度に、縮緬の赤い袖口が、ちら／＼とこぼれるやうに袖から洩れる。

丸で芝居でも見て居るやうだつた相だ。

で、十分も経つたらうか、女が何う巧く旦那を納得させたか、旦那が何う忍耐して一時其忿怒の情を和げたか、それは何方だか解らぬが、兎に角氣が附いて見ると、旦那は手を舉げて、お出で／＼をして此方に立つて居る女中を呼んで居る。

女中は行つて見た。其處はもう松原續きの畑で、甘藷の蔓が一面にはびこつて居た。近寄つて用事を聞くと、これからすぐ發つから、ツケを持つて來い、そして室に散ばつたものをすつかり鞆に入れて一緒に持つて來て呉れとのことだ。女はきまりが悪いかして、後向になつて、亂れた髪をぐるぐると頻りに自暴に巻きつけて居た。

『それで何うした。』

と、此物語を聞いて居た男の一人が訊ねた。

『言ふ通りに、ツケと鞆とを持つて行つて遣ると、其松原つゞきの甘藷の畑の中で、旦那は勘定を済まして、鞆の中の物品を改めて、女を促し立て、道も碌々ついて居ない畑の中を突切つて發つて行つた相だ。女中が歸つて見ると其の好男子の先生は搔卷を冠つて彼方向になつて寢て居た相だ。』

『成程これは芝居式だ。』

と一座は笑つた。

寫 眞

山の兵卒達は退屈がつて、下の曉鷄館によく遊びに來た。海水浴の客の爲めに建てられた室は一列に海に向つて並んで、何の間からも大吠の燈臺の聳えて居るさまや、岩に怒濤の打寄せるさまや、客が藁草履を引懸けてそこそこと歩いて行くさまが手に取るやうに見える。春の末で客はまだ少かつたが、それでも海に面した間は大抵塞がつて、メリンスの帯に赤い襷の若い女中が、前の縁側を忙しさうにして通つた。

孫を連れて來て居る品の好い白鬚のお爺さん、透徹るやうに色の白い肺病の娘、矢張これも病人らしい商家の若旦那、八日市場邊から浴場のひまなを見かけて保養に來た年寄の夫婦、夫が戦地に行つて居る間家を疊んで此處の海水浴彼處の温泉場と暢氣に逗留して暮して居る二十七八の綺麗な元氣な海軍少佐の細君——これ等の人々の室に、兵卒達は暇さへあると常に遣つて來て話をした。

少佐の細君の室にはハアモニカとハンドオルガンとがあつた。それを背の低い肥つた無邪氣な一等卒

が、毎日のやうに遣つて来ては鳴して行つた。

丁度日本海々戦前で、バルチック艦隊がカムラン灣を發つて北上したといふ噂が専ら評判されて居る頃であつた。新聞紙には二號活字で種々のことが報道され、號外賣の聲はこんな邊僻な漁村にまで聞えた。對島を通るか、津輕海峽を抜けるか、それとも宗谷海峽を迂回するかといふ話が誰の口にものほつた。

けれど山の兵卒は暢氣な調子で、

『ナアに、露助なんか、何うすることが出来るものかい。わざわざ御苦勞にもブク／＼を遣りにお出でなすつたやうなもんだ。』

など、言つて居る。

『それでも貴下方は大變ですな、毎日見張つて居て、見知らぬ艦でも通れば、一々報告しなくちやならないんですから。』

客がかう訊くと、

『イヤ——さういふものが通つて呉れると面白いんですけれど、毎日々々海ばかり見て居まさ。』
かう言つて、平氣にハアモニカを吹いたり、犬に調戯つたりして居る。

時には、

『奥さん、何うです、山に遊びに来ませんか。男世帯で、何にもお構ひは出来ませんけれど、お茶位は上げられますぜ。』

こんなことを言つた。

ハンドオルガンの鳴る隣の間には、一三日前から鬚の綺麗に生えた瘦削な卅五六の紳士風の男が來て居た。

矢張病人らしく、烟草盆の灰吹に時々痰を吐いて、苦しきうな咳嗽をした。

兵卒がぞろ／＼前を通つたり、客が互ひに樂しげに話し合つたり、親しげに物品の交換をしたりするのを見ると、何となく羨しさうで、他の人のやうに、自分も打解けたいといふ風に見えた。一人で淋しさうに磯に上つて岩の上に立つて居ることもあれば、一間の中にはつねんとして新聞雑誌を読むでもなく烟草をふかすでもなくちつと坐つて居ることもある。疲れ果てたといふさまが何處となく見える。

普通の人ならば、鳥渡した機會をつかんで、同宿の人々に笑顔を近づけたり、會話を試みたりして、十年の知己のやうに親しくなるのは容易なことだが、此客には何うもそれが出来なかつた。折角心易立に話しかけられた會話にも容易に近づき得なかつた。

毎朝十時頃には新聞が來た。町から古帽子を冠つた書生風の男が、竹行李に數種の新聞を入れて持つ

て来る。新しい戦報に日々待焦れて居る人々は、其鈴の音を聞くと、待兼ねたやうに、座敷から出てそれを買った。やがていろ／＼な噂がはじまる。笑ひ語る聲が一時到る處にした。

少佐の軍服を着た五十前後の老士官は、其頃いつも莞爾した顔をして、海に面した其長い縁側の前を通つて、二三の知り合つた顔に挨拶して劍を鳴らして行く。

『隊長さんのお出かけは遅いですね。』

『一體何處に居るんです、隊長さん。毎日向うから出て来るが……。』

『あの、あそこに居るんですよ。その向うの離れを借りて居るんですよ。』

『一人ですか。』

『それはさうですとも。』

と海軍士官の細君は笑つた。すぐ語をついで、

『あの隊長さん、あれで中々優しいおもしろい人なんですって……。始終中戯談なんぞばかり言つて居るんですって……。え、佐倉の聯隊の人ですかね、後備で、今度召集された人でせう。』

『それでは平生は軍人ぢやないんですね。』

『え、何でも東京で會社か何かに出て居るんですって。』

隣の紳士は縁側の闕の處の障子に倚り懸つて、新聞を読みながら此會話を聞いて居た。かうして一人

海水浴場に来て居る海軍士官の細君と、終日海の展望に倦き果て、居る兵卒の群と、召集に應じてかういふ處に来て居る後備の老士官とを通して、敵の大艦隊の襲つて来る一種の不安の空氣を感じた。

『お便はありますか。』

かう男が訊いた。

『いゝえ、御座いませんの。』鳥渡途切れて、『矢張忙しいんでせう。』

『御無事であれや結構ですけれど……。』

『平生から餘り手紙など書かない性分でしたから……。』

『今、どちらに入らつしやいますか？』

『何處に居りますか、佐世保富士艦で出せば、手紙が届くことになつて居りますけれど、居ります處はよく解りませんです。』

それで話が絶えた。細君は自分の室に入つて行つて了つた。

其時、白と茶の斑の洋犬が紳士のゐるその縁側に首を載せて頻りに鼻を鳴らし始めた。と、紳士は眼を新聞から離して、其處にあつた菓子一つ取つておあげをした。犬はワン、ワン、ワンと最後のを大きく高く吠えた。

紳士は一番先に此の犬と懇意になつた。残つた肉や肴などをそれからよく投げてやつた。後には犬

は食事時分には屹度其縁側に首を載せて居た。紳士が海岸に散歩に出懸けると、屹度四目垣の傍から飛んで来て、其周圍を嬉しさうにじやれ廻つた。

『誰れとも懇意にならぬ先に、犬と友達に相成申候、其犬は黄い可愛い眼を致し居り候。』いろ／＼な状況を書いた後に、かう附け加へて、かれは東京の細君のところに手紙を出した。

けれどそれは二三日の中であつた。同宿の人々にも段々懇意になつた。海軍士官の夫人とも話した。隣に来る兵卒からも、『今度は非山に入らつしやい。それは眺望は好いですから。』と言はれるやうになつた。

裏の松原を越えると、二丁ほどの畠を隔て、愛宕山が連つて居た。其山の上に三角測量臺があつて、其傍に戦時の展望哨が置かれてある。

曉鷄館の左の外れから、松原を抜けて、麥の青々した。菜の花の黄い、細い畠道を通つて、處々に肥料溜のある、埃の白い大通を突切つて、それから段々山へと懸る。勿論山と言つても百二三十米の高さで、登りもさう苦しくはない。兵士は下から水桶を擔つて上つて行く。

松と松との間を一丁も登ると、こんな處にこんな平地があるかと思はれるやうな處があつて、其處に松を切拂つて、哨兵の小さな宿舍が一軒。四面松で圍まれて、下からは其家のあるのが解らない。

急ぎしらへの粗雑な普請、四面は簡單に板で張られてある。中は兩方に分れて、間が二つになつてるが、此の室には卓と椅子とが置いてあつて、電話器が懸つて居る。卓の上には書類も置いてある。

長押には劍だの、カアキイ色の服だの、水筒だの、新しい靴だの、いろ／＼なものが懸けてある。

汚い蒲團も幾組となく積重ねられてあつた。

兵卒共は退屈な生活を此處で送つた。一時間交代に展望哨に立つ他には用事がない。あとは食ふか、寝るか、下に行つてハンドオルガンでも鳴らすか、くだらぬ話でもするか。

一人が餘りの退屈に、板に紙を張つて野を引いて、土製の碁石を町から買つて来て、碁を打つた。けれど、それにもやがては倦きて、此頃では隅の方に押附けられてある。

一日、海水浴のお客がぞろ／＼遣つて來た。海軍士官の細君は山路につかれて、家に入るや否、『冷たいお水はないでせうか。』と呼吸を苦しさうについて言つた。紳士は肩にコダツクの寫眞器をかけて來たので、額の汗を幾度となくハンカチで拭つた。商家の若旦那は肺病の娘の手を引いたり後から押したりしてやつた。

單調な哨兵小舎はいろ／＼な色彩で充された。

肥つたハアモニカは莞爾して居る。曹長は白い毛布を汚い八疊に敷いて客を請じた。丁度碁を打つて居た二人は、中途で止して、これも矢張嬉しさうに迎へた。

水桶から汲んで出した水は温かつたが、しかし海軍士官の細君は二杯までお替をして飲んだ。

『奥さん温くつても、我慢して下さい、これでも下から汲上るんですから。』ハアモニカは二杯目のコップを渡しながら言つた。

『うまい處に住んで居らつしやるんですねえ。』

暫くしてから、士官の細君は四邊を見廻しながら言つた。

『これは面白い、ほんとに世を離れた生活ですな。』

紳士はかう言つて笑つた。

肺病の娘は途々摘んだれんげを束にして、それをハンケチで結いて持つて居た。透徹るやうに色の白い顔と派手な矢絣の袖の袴とが際立つて四邊に鮮かに見えた。

曹長は大きなブリキ罐から、取つて置き煎餅を氣前よくガラ／＼と盆の上に明けた。一人が急須と茶碗とを勝手へ洗ひに行くと、一人は裏の炭俵の中から、炭を鷲づかみにして來て、それを七輪に入れて、鐵瓶をかけてばたく／＼と其下をあふぎ出した。ほんやりした二等卒は紳士のコダツクの寫眞器を物珍らしさうに見て居たが、『これで寫眞が撮れますかなア。』

人々は兵士を相手に一時間ほど遊んだ。展望哨の居る處に上ると、利根川の海に注ぐさまから、銚子町の人家、川口の明神、彼處は黒生、其處は海鰐島、長崎、外川からかけて犬若、屏風ヶ浦、遠く飯岡

の鼻までぐるりとパノラマのやうに見渡された。誰も皆な喜悅の聲を擧げた。

最後に、紳士は紀念の爲めにとて、人々を頂上の小さい石の宮の前に集めて、寫眞を撮つた。兵士は五人残らず其人々の後に立つた。其處に隊長の老士官も遣つて來たので、強ひて群の中に入つて貰ふことにする。ついて來た犬も入れた。

車の音

九月の末はもう寒かった。朝夕には水霜が下りた。高粱は既にガラガラと風に鳴った。

腹の白い小さい渡り鳥は、戦後の不時の獲物を知つてか、群を成して例年より早く遣つて来て、點々と晨の星のやうに立つて居る支那民家の附近に下りて餌を漁つては、また夕日の野に向つて羽音凄まじく飛んで行つた。鳴く聲がいかにも物淋しかった。

楊の葉は黄くなつて散り始めた。村から村へ二里もある廣い野には、泥濘のまゝに乾いて固くなつた一條の緒い路が通じて、をり／＼それを横ぎつて流れる小川の痕があつた。中には水のある幅の廣い川もあるが、それには一月前まで此處に居た露兵が板橋を架けて、前進して來た日本軍の砲車がとゞろき勇しく渡つた。十日前の戦争の其日には、此附近は丁度大きなパノラマをひろげたやうで、すぐ向うに見える楊樹の村は炸裂した砲彈の白い烟で全く包まれて了ひ、其傍の小高い丘の上には、日本軍の高等司令部の將校連が一團になつて、中には身を地上に這はせて望遠鏡を片時も眼から離さずに戦況を見て

居た。野から村落に入らうとする處の混雜はそれは凄じいもので、砲車が泥濘の波を乗切つて前に出ようとする、歩兵が其間を縫つて先に進まうとする、士官は劍を抜いて叱咤する、傳騎が其間を飛ぶが如くに走つて來る……。村と少し離れた高粱の畑には、後れて到着した白砲隊が漸く陣地を完成して今少し前から凄じい音を天地に轟かし始める。高い號令臺に上つた士官のメートルを呼ぶ聲が分明聞える。村を中斷して廣い淺い川があつたが、兵は皆それを涉つて勇ましく進んで行く。其處にも此處にも砲彈が炸裂して白い烟を擧げた。けれどそんなことに頓着して居るものは、一人も無い。川の向うは街道上の驛で、大きい客棧が戸を閉めたまゝ、簷を連ねて、それを外れると、ひろ／＼とした野の正面に、露西亞軍の據つた一帶の丘陵が深紫色に分明と顯はれて、其處にも矢張砲烟が蜂の巢のやうに灰色に簇つて居た。高粱畑の處々に砲兵陣地が露はに見えて、眞直な街道を歩兵隊が駆足で前に出て行くのが鮮かに眼に映つた。——死の叫喚、死の奮闘、小銃の音がバリ／＼聞える……………。砲聲が四日間續いた。

今は靜かだ。以前の街道、以前の村落、以前の野にかへつた。驛の家々からも淺黄の服を着た支那人が暢氣さうな顔を出して、街道の人通りを見て居る。近所に避難した家族が驟車に乗つて歸つて來るのも幾組がある。亭主に負はれて川を涉つて行く鼻もあつた。岸には支那人がもう例の屋臺店を出して、

高粱粉で製した饅頭を並べて置くと、隊に後れた日本の兵士が、カーキ色の軍服の隠囊から錢をつかみ出して、『一箇多少錢。』など、覺束ない清語をつかひながらそれを買った。日に焼けた横顔から銃と劍とに夕日が照つた。

高等司令部が戦を督した丘の下の村落には、楊の葉が赤く色付いた間に、赤十字の小さい旗がヒラヒラと風に靡いて居る。此の四邊の民家は總べて此間の戦争の負傷兵の病院に宛てられてあるので、街道から高粱畑、葱畑、蒜畑などの間を分けて行くと、厚い不細工な土塀で圍まれた民家の中には、槐の樹やら杏の樹やらが見えて、入口の扉には、例の支那人の『立春大吉』とか『擡頭見喜』とかいふ字が書いてあつて、其上に片假名で第何師團第何聯隊傷病兵室と書いて貼つてある。扉を排して中に入ると、土間には竈、平扁い釜に蓋がしてあつて、瓠で造つた桶とも柄杓ともつかぬ器が載せてある。右の室にも左の室にも負傷兵が一杯詰つて居た。

何の室にも一人位は重傷者があつた。戦後日少く、孰れの野戦病院でも、まだ重傷者輕傷者を區別する暇が無かつた。何の隊でも衛生隊が戰場から收容すると、すぐ取敢へず手近い民家に擔ひ込んだ。重傷者の日を経ずに死んで行くのを取片附けるのも容易でなかつた。

室には日が射し込んだ。四邊は明るかつた。炕の上に毛布を被けて、少くとも、三人は寢て居た。土間にも高粱殻を敷いてごろりと轉がつて居るものもあつた。腕と、頭と、脚を卷いた繻帶は血に汚れて

沃土の悪臭い臭氣が一室に充ち渡つた。

病院の本部は楊の樹の深く繁つた大きな家であつた。戦争最中は、此家に司令部が置かれて、腕に白布を卷いた馬卒傭人などが其前を駈足で往來したが、今は綠色の筋の軍服軍帽が出たり入つたりして居る。

夕暮になると、裏の小高い丘から烟がいつも颯つた。風の無い時には、重く低く村を這ふが、大抵は丘の斜坂に緩く靡いて見られた。これは日毎に死者の屍を焼く烟である。其處には穴がひろく平らに掘られてあるが、血で汚れた擔架で運んで來た蒼白くしやちこばつた死骸を軍服の儘其中に入れて、高粱殻を積んで、薪を載せて、石油を懸けて火をつける。其任に當つた兵士は、其火で巻烟草を燻らしながら、平氣で笑つて話をした。

街道に添つた一軒の民家にも、矢張同じやうに五六名の負傷者が收容されてあつたが、其處には曹長が一人、胸部貫通で死にかけて居た。家の前には楊があつて、其疎らな葉が野から一面に照り渡つた夕日を篩して、濃淡の影を家の中に漲らした。

夕暮の野はもう寒かつた。

兵士が一人、其重傷者の世話をした。唸聲が昨日から今日まで續いた。もうとても助からぬのは解り

切つて居る。現に、軍醫もさう言つて歸つた。一緒に居る負傷者には餘り重いのが無いので、氣の毒だ、可哀相だと同情はしたが、さて何うすることも出来なかつた。それに、唸聲は矢張不愉快で、人々の心を暗くした。

其曹長は秋田縣の生れだ。戸山學校に久しく居たが、戦争前に第三師團の聯隊附になつて、戰場に遣つて來たのである。秋田縣の角館町、それがもう餘程山の中であるのに、それからまた三里ほど峠を越して行つた處がその故郷だといふ。其山奥に母と妹とが居た。東京の牛込には内縁の妻が居た。若くつて美しかつた。

山奥の故郷、それは人々の胸に餘りに遠く且つ疎かつたが、若い内縁の妻には、誰も同情を惜まなかつた。其妻はお絹さんと呼ばれた。

かれは早くから死を覺悟して、『君達が國に目出度く歸つた曉には、何うか妻に逢つて下さい。そしてかうして諸君の世話になつて死んだといふことを話して下さい。』と口癖のやうに頼んだ。覺束ない手附で、手帳の紙に其住所の番地姓名を鉛筆で書いて、それを破つて人々に渡した。意識を失つて讒言を言ふやうになつてからは、其名が幾度も唇に上つた。

『お絹！ お絹！』
と歴々と其人を眼の前に見るやうに言つた。眼はうるんで、顔は蒼ざめて、半ば死人のやうに見え

た。

其の夕暮である。

『おい〜。』

と、其重傷者の隣に寢て居た士官が聲を立て、呼んだ。士官は足部に負傷して立つことが出来なかつたのである。

兵士は用事にかまけてぐづくしてると、

『おい、變だぜ、見て遣れ！』

とまた聲高く士官が呼んだ。

行つて見ると、曹長は呼吸を引取つて居た。手を取つて見たが、もう脈搏がなかつた。『今、なんだか唸りやうが變だと思つて、そつと見て居ると、手を持ち上げて、胸のあたりを二三遍拂ふやうな眞似をした。はてな、何うかしたんぢやないかと思つてゐると、顔を動かして、二度ばかりしやくり上げた。あれが痰が詰つて來たんだ。』と士官は寢たまゝ、話をする。

流星に人々は氣の毒に思つた。けれど急いで軍醫を呼んで來る必要は誰も感じなかつた。

窓から打渡した野は靜かだ。死人に被けた白い毛布の半分と毛布から出て居る死人の足とは、依然として夕日の光線に照されて居たが、朝夕は動けなくなつた蠅が二三疋、明るい暖かい小窓にブン〜音

を立て、居た。

兎に角本部に行つて知らせて来ようと思つて、兵士は表へ出た。丁度其時街道に車の音がして、荷物と人とを満載した騾車が、三臺續いて戰場の方から遣つて來た。豚尾の御者がウオウウイウイと言つて、長い鞭を鳴らした。騾車は凸凹の甚しい路を波を打つたやうにして近付いて來る。其上には腕を卷いた赤い布に白ぬきに社名を記した從軍記者が五六人乗つて居た。寫真班の人々も居た。荷物は各自の行李やら寫眞の種板やらであつた。かれ等は今歸國の途に就いて居るのである。

兵士も負傷者も其車の過ぎ行くのを長く見送つた。車は靜かな夕暮の野をがらくと……………。

おし灸

秋の彼岸前、ある田舎寺の庫裡の廣い入口に、縞セルの脊廣を着た色の白い二十六七の男が立つた。

脊の高い肥つた寺の上さんが、奥で搔卷を被けて晝寢をして居た五分刈の和尚さんを揺り起して、

『あなた、あなた！』

和尚さんはむつくりと跳起きた。眠さうな眼を摩りながら、

『何だ、何だ、また葬式か。』

『寢惚けちやいけませんよあなた……………。今ね、洋服を着た若い立派な人が來たんだがね。』と名刺を渡して、『是非お眼に懸つてお願ひしたいことがあるんだつて。』

寢ぼけ眼で、和尚さんは名刺を見たが、知らぬ名であつた。何んな用事かと一應聞いて來いと言つたが、上さんは躊躇して要領を得ぬので、『まア、上げて置け。』

座敷の次の間の八疊で、和尚さんはその男に逢つた。上さんが一目見て好い人と思つたやうに、和尚

さんも初對面の挨拶ですつかり氣に入つて了つた。話振に、態度に、言ふに言はれぬ一種のやさしさとなつかしさがある。笑ふ時に可愛い眼色をする。小さい金齒が奥床しくチラ／＼する。

用事は大したことではなかつた。その男は灸點屋で、毎年春秋の彼岸頃には、此の近所の町々で弘法様の灸點を下ろして歩いて居るものだが、何うか一週間ほど本堂を貸して頂く譯には行くまいかといふことである。聞くと、昨日まで此處から二里ほど隔つた町のなにかし寺で、一週間灸點を下して居たが昨日で其日限が終つたとの話。和尚さんは前にも知らぬ人に本堂を貸して、一度ならず二度までも酷い眼に逢つたことがあるので、紹介の無いものには、總て貸間は斷ることに腹で決めて居たのであるけれど、此男の柔しい眼と弱々しい口附きには、何だか無下に斷るに忍びなかつた。此男なら大丈夫だ、間違などのあるやうな種類の男ではないと何がなしにさう思はれた。で、本堂の六疊だけを貸すことにして、食事も寢道具も一切構はず、一週間二圓五十錢といふことに話を決めて、男は歸つた。

歸る時に、庫裡の入口で、

『それぢや奥さん、明後日上つて、またいろ／＼御世話になりますから。』

『え、／＼、ほんに無人で、行届きませんですけど。』

莞爾と笑つて見せた。

柳行李を細引でからげたのが一箇、餘り汚れて居ない夜具蒲團が一組、男は其日矢張洋服を着て、荷物物の車について來た。

本堂の六疊に和尚さんが行つて見ると、丁度柳行李を明けて、あたりを一杯に散らかして居る處で、シヤツ、ズボン下、靴下、黄縞の寢巻、半紙、孔法大師の懸軸、硯、番號札、灸點に用ゆる竹筒、もぐさの包などの中に、洋服を袖の袷に着替へて、緋の銘仙の羽織を引懸けて居た。

『和尚さん、これを一つ町に配りたいのですが、人足を心配して頂けるでせうか。』

かう言つて、豫て拵へて置いた廣告を見せた。活字で印刷してあつて、『孔法大師の押灸』と始めに大きく書いて、効能が言文一致振假名附で述べてあつて、何町何寺に於て何日執行と其地名と日數だけ入れられるやうに明けてある。

『わけはありません、前の店子に、いくらも遊んで居るものがありますから。』

かう和尚さんは手輕に受合つた。和尚さんは小柄で、瘦せて居て、血色も餘りよくなく、常に肥つた細君に酷められて居さうな體格だが、學問が出來て、縣下の寺々にも名が聞えて居て、稼牆の道に長けて居るといふ近所の評判である。門前に七八軒長屋を持つて居て、屋賃が毎月七八圓づゝあがつた。

廣告三百枚、地名と寺名と日數とを書き入れるのに、そんなに手間は懸らなかつた。やがて門前の日雇取が二人本堂の階段の處に來た。二人とも髪の毛の延びた、肩に穴の明いた着物を纏つた。今、畑か

ら上つて来たといふばかりの四十男で、泥だらけの手に其白い廣告紙を受取つて、一人は下町、一人は上町をのそくと配つて歩いた。

人口一二千の小さな町、上町の入口の豪家の前には吹井が綺麗な水を揚げて居た。鹽物屋、荒物屋、障子にうどんひもかとはと拙い字で書いてあつて、百姓が汚い筒袖を着て暢氣さうに酒を飲んで居る居酒屋、軒の傾いた煙草屋、醫師の門構の大きい隣は菜畑芋畑桑畑、奥の小屋からは青縞を織る機の音がチヤンカラチヤンカラ聞える。でも通りは流石に町らしく、半鐘臺の立つた四角から、此處等の特色の庇の長く出た二階造の町家が兩側に連つて、市の日には其前に種々の物賣が出て、近在の百姓が赤い蹴出の娘などを伴れてぞろぞろ遣つて来る。大きな呉服屋、造酒屋、葉茶屋、旅籠屋、赤い暖簾の出で居る種物屋などが續いて並んだ。

町では、裏の清龍寺に、東京から名人が来て、一週間灸點を下ろすといふ噂が彼方此方で語られた。夜は處々に其引札が白く闇に落ちて居た。何處となく木犀の匂がした。

彼岸の入から寺は賑かであつた。山門から本堂に通じた鋪石道には、爺やら婆やら細君やらがぞろぞろと通つた。中に縮緬の羽織を着た豪家の細君もあつた。若い綺麗な娘もあつた。空は晴れて秋の日がキラ／＼と廣場に照つた。

田舎寺のことであるから、本堂と言つても、都て見るやうな立派なものではなく、それに五十年前に焼けた後の假普請であるので、庫裡に比べて見劣のせられる構、障子の紙は雨風に曝されて、碁碁の目のやうに、或處は白く或處は黒かつた。本堂の階段は木造の粗末なつくりで、あがつた處に小さな古い賽銭箱があつた。本尊の如來様も眞鍮が禿げて光がなく、汚れた唐縮緬の座蒲團の傍に形ばかりの鉦と木魚とが置かれて、少し離れて處々朱塗の剥げた寶頭廬が貧相な顔をして据ゑられてある。今日は平生の寂しさに似ず、広い板敷に人が集つて、女の話聲が絶えず聞えた。灸點屋は洋服の上に白い上衣を着て、番號札を配ることから、挨拶をすることから、消え懸けた火に炭を繼ぐことから、萬事總て一人てしなければならぬので、目が廻るほど忙しく、殆ど食事をして居る暇もなかつた。六疊の間の正面には弘法大師の座像の幅を恭々しげに懸けて、前に据ゑた机の上の香爐からは、香の烟が細く騰つて居た。出雲焼の手焙を傍に控へて、一人一人呼び込んだ客の病所を仔細らしく聞糺して、醫師のするやうに、勿體らしく聴診器を出して、胸などに當て、見る。ちよつと用事があつて、寺の上さんが行つて見ると、丁度今、町で評判の綺麗な機屋の二十七八の細君の帯を解いて、横に寝かして、白い肌を露はに、腹に灸を据ゑて居る處で、當てたもぐさの上から細い烟が絶々に颯つた。

上さんは戸を明けて入り懸けて、『あらまア』と思はず聲を立て、躊躇した。一種不思議な氣がして、われ知らず胸が躍つて顔が赤くなつた。

灸點屋は平氣で、線香を手に、灸を据ゑて居た。

夕暮近くまで客が来て、番號札は三十五まで進んだ。

その夜、和尚さんは、灸點屋を庫裡に招いて晚酌の御馳走をした。

『大ぶお客が取れましたな。』

『え、お蔭様で。』

『毎日來るものもあるんでせう？』

『え、まア大抵一週りは据ゑないと、効能が見えませんか……。明日からはお客が殖えるばかりです。』

『中々忙しいですな。』

『え、もう遣り附けて馴れて居りますから、それ程にも思ひませんが、時には助手が欲しいと思ふことが御座いますよ。』

『助手を使つたら好いでせう。』

『面倒でしてな……。都合の好いこともありますが、また都合の悪いこともありましたな。矢張自分一人で遣つてる方が氣樂で好いですよ。』

『それもさうてせうな。』と、盃を差して、『貴君平生これを遣りませんか。』と左の手で飲む眞似をする。

る。

『い、え、餘り遣らんこともないですけれど……。仕事中は成たけ遣らないやうにして居ります。其代り一仕事遣りますと、祝に一騒ぎ遣りますが……。』

『それでもまア好い商賣を覺えなすつた！』

『イヤ、もう仕方が無くつてこんなことをして居るんです。』

身上話が順序として始まつた、灸點の師匠の家は淺草にある。今も其處に荷物が置いてある。生れは能登の小木港で、家は處での網元であるさうな。東京に來て醫師の稽古をしたが、思ふやうに出來ず、法律を學んだが、矢張それも出來ないで、『たうとうかういふものに成つて了つたです。けれど何うかして少し資本を拵えたら、實業を遣りたいと思つて居りますよ。』

其處に寺の上さんが出て來た。

『奥さん、大變お世話になります。』

『い、え、無人で、ねつから行届かないで……。』と云つて、灸點屋の色の白い顔と和尚さんの黒い顔とを比べて見て、『忙しくつて、貴方、とても自炊なんてお出來にならんやうですから、明日から、こちらで御膳を拵へて上げるやうにさせう。何うせ、何も出來やしませんけれど。』

『さう願へれば本當に難有いんですが……。』

『何アに、譯はありませんから。』

座蒲團を持つて行つて遣る。火鉢を運んで遣る。座敷の跡を掃除してやる。今度は三度の飯までも拵へて遣るといふ深切！和尚さんが呼んでも返事もせず、なんぞと言ふとツンケンと當り散らして、いつも佛頂面をして居る平生の上さんとは何うしても思へなかつた。

『今日、機屋の上さんが来てましてね？』

『機屋はたッて、あの丸鬚？……………。』

と灸點屋は莞爾笑つて見せる。

『あの上さん、あれで中々大變なんですよ。行田のものですがね、あの機屋に来る前にも随分男があつたつて言ふ話ですよ。』

『何うも調子が旨過ぎると思ひました。』

『男殺しツて評判なんだから。』

『用心しないといけませんな。』

と男はまた笑つた。

夜はほつねんと一人寝た。

枕元に三分心の洋燈が細く點いて居た。

正面に弘法大師の像が薄暗くはあるが、歴々と見えた。夜着の上には不斷着がかけてあつた。四邊には行李や硯箱や半紙や廣告や竹筒が順序なく散らばつて居た。

夜着の天鷲絨の肩當の處に髪を分けた頭が半分見えて、微かな鼾が床に就くと間もなく聞えた。かうした生活に馴れて、旅を旅とも思はなくなつたと見える。寺の後は杉山で、下草ががさ／＼と夜風に戦ぐ音がする。鼯が天井を凄じい音して通る。本堂には如來が眼を光らして、寂然として立つて居た。

夜深に月が出て、松やら楓やら檜やら混雜と植ゑた庭を寂しく照した。小さな池には微かな銀の波が立つた。油がなくなつて、洋燈が消えた後も、雨戸も閉めぬ障子に月がさして、晝の様に明るかつた。

翌日は本堂は更に賑かであつた。今度來た東京の灸點屋は、名人で、男振がよくつて、深切で、やさしいといふ評判がそれからそれへとひろがつたのである。一二里隔つた村の娘達の赤い蹴出も見えた。婆さんや細君達とも懇意になつて、段々面白い話をした。

機屋の細君は、昨日とは更にめかしこんで遣つて來た。人知れず白粉をつけて居るのが男に解つた。觸れた女の手は暖かであつた。

『大變によく利きましたるがな、昨日一度据ゑて戴いたんで、せんしやくが大變好くなりましたね、これぢや一週り据ゑて頂けば、治つて了ふと思ひますよ。』

『それは結構でした。』

帯を解かせて、腹と脊に灸を据ゑた。昨日と別に變つたこともなかつた。唯、ひとつ大きいのに邂逅して『オ、熱い!』と言つて、われを忘れて、女はそれを振落して、男の顔を見てにツと笑つた。『熱う御座んしたか。』と言つて、男も笑つて見せたが、その笑ひは唯の笑ひではなかつた。男も女も互ひにある反應を胸に覺えた。

衣紋をつくろひながら、女が

『熱いの何のツて、それや吃驚しましたよ。』

『お氣の毒でした。』

顔を見合せてまた笑つた。

男はかうした經驗は數へ切れぬほど持つて居る。節操の無い女の眼色めつきと笑ひ方とに熟して居る。かういふことは別に大事に思はぬばかりか、男と女とは由來かう出來てゐるものとかは思つて居る。旅に出れば、随分つらい眼にも邂逅する。錢が無くつて野宿の憂目を見ることもある。恐ろしい男に追懸けられることもある。ある時などは、評判娘を騙したといふので、村の若い衆から袋叩きに逢つたこともあつた。旅はつらい、悲しい、淋しい。たまにはかういふ役徳にでも有附かなければ、こんな割の悪い商賣は出來ない位に思つて居る。

その夜は和尚さんは一里ばかり先の村の豪家の法事に行つて留守だつた。

本堂の六疊に、お上さんが膳を運んで來て、酌をしながら、

『あなた、随分だよ。』

言葉が大分ぞんざいになつて居る。

『どうしてです?』

『どうしてつて……熱い灸など据ゑて……』かう言つて笑ひ懸ける。

『見て居たんですか。』

『見て居たともねえ。』

あはくと男は笑つた。

『あなた、迷はしちや罪だよ。』

『なにさういふ譯ぢやありませんよ。つい、大きいのを知らずに居たもんだから。』

『申譯なんかしなくつても好いから、一盃お上がんなさい。』

と、上さんは酒を波々と注ぐ。

上さんはげらげら笑つた。上さんがかうした女だとは和尚さんは夢にも知らない。さういふ處を見せられたことは結婚してから十年になるが唯一度もなかつた。氣難かしい女、腫物に觸るやうな女、黙つ

て居る女、よく腹を立てる女とのみ和尚さんの眼には映つて居た。

『かういふ處に居ては随分淋しいでせうね?』

『え、もうそれや……………。』

『それでも町には面白いことがありますかな?』

『あるものかねえ、それも、町家なら賑かなこともあるだらうけれど、寺に居ちやね。』

『本當にさびしいでせうね。』

男はやさしい顔をして同情した。

夜は矢張静かであつた。洋燈の消えた後の障子を月が遅く明かに照した。

中日には檀家から萩の餅やら團子やらアンピ餅やらが上げられて、寺の戸柵は一杯になつた。和尚さんは白足袋を穿いて、金襴の袈裟を懸けて、朝の中長い讀經をして木魚を叩いた。

墓詣の人が陸續と入つて來た。門前の花屋では線香と櫛が夥しく賣れて、阿伽桶を下げた參詣者が終日井戸端に絶えなかつた。何の墓にも竹筒と櫛と花とが代へられて、線香が煙をあげて居た。矢張風の無い晴れた暖かい好い日であつた。時々街道を通る馬車の喇叭の音がした。

灸に來る人も中々多かつた。階段の上には下駄が乗り切れぬほど置かれた。灸點屋は相變らず洋服の

上に白い上着、もぐさと線香の燻る一室の中で、額に汗をかいて、一生懸命に働いて居た。

上さんがお萩餅を山のやうに盛つて持つて來て呉れて、時々茶を淹れかへて行つたが、それを味つて居る暇もなかつた。『あ、今日は久し振てえらく酷められました。あ、忙しくなると、錢金など欲しくもなくなりますよ。』

とその夜男は和尚さんに話した。

『まア、結構でしたな、忙しくつて。』と和尚さんはにこ〜笑つた。

夜は同じく静かで、月は矢張庭と廊下と障子を照した。

庫裡の玄關の三疊に、實圓といふ今年十九の小僧が寢て居たが、翌朝和尚さんと灸點屋と相對して話して居る處で、『何うも和尚さん變てすよ……………灸點屋さんも用心しなくつてはいけませんよ。何うも此頃、賊が覗つてるやうな様子があるんですよ。』

『賊が?』

と和尚さんは顔色を變へた。

『何うも變てす。二三日前からですがね、廊下に足音がしたり、本堂の障子が明いてあつたりするんですよ。私は毎晩夜中に一度づゝ小便に起きるんですがね、初めの時は氣が附かなかつたんですが……………次の晩に何氣なしに見ると、本堂の障子が一枚明いてるんです。不思議に思つたけれど晝の中に明けた

儘にして、置いたんだらうと思つて、眠かつたから、寢て了ひましたが、庭に足音がしたり……昨夜は確かに廊下まで入つて来たやうですがね……灸點屋さん、何か盗まれやしませんか。』

『それアけしからん。油斷がならんぞ。灸點屋さん、本當に何か盗られやしませんか。』

和尚さんはかう言つた。

『いゝえ、そんな様子も……。』

『なら、好いですけども……。險呑ですよ、それは。あなたが本堂に居て、實入があるのを知つて規つて居る奴があるんですよ。もしものがあつちや、折角稼いだ金を……。それこそ大變ですよ。實圓、今日から雨戸を引くやうにする方が好い……。』

『やうしませう。』

處が其日の午後、灸點屋が和尚さんに、金の入つた財布を渡して、『ぢやこれだけ險呑ですから和尚さんに預つて置いて頂ませう。さうすりや、他に盗られたツて困るやうなものはありませんから……。一々本堂の雨戸を閉てるんぢや、實圓さんにお氣の毒ですから。』と言つた。そして其夕、實圓が雨戸を閉めようとする時、『何アに大丈夫だから、』と、矢張明けさせて置いた。

結願けつぐわんの翌日は秋雨がしとくと降つて居た。珊瑚樹の廣い葉に雨滴が溜つてそれが風にばらくと落

ちた。灸點屋は昨日日限が濟んだので、一先づ東京に歸る支度を爲て居たが、午後に頼んだ俵が二臺舗石道をガラガラと遣つて來た。和尚さんも今日は降りだから、一日滞在して骨休めをして行つたら好いだらうと言ふし、上さんは袖を引かぬばかりにして引留めたけれど、何うしても歸る決心を動かさなかつた。二圓五十錢の席料、二圓の食費、他に一圓御布施料として包んで出した。

一週間の稼ぎ高は三十圓に餘つた。

上さんは泣かぬばかりにして別離を惜んだ。恨めしいやうな音ならぬ眼色をして見せた。一臺の俵に夜具蒲團と行李を載せて、他の一臺にはかれ自から乗つた。和尚さんは本堂の階段の處に顔を出して見送つた。上さんはわざと下駄を穿いて、山門の外まで出て、幌の中を覗くやうにして、男の手を握つて別れた。

山門から町に出る林の角に來ると、其處に蛇の目傘が一つ雨の降り頻る中に立つて居た。俵が近づくといきなり傍に寄つて來て、車夫の怪しむのにも頓着せず、幌の中を覗き込んだ。で、俵と蛇の目傘とは久しく雨の中に纏れ合つて居たが、やがて梶棒は下されて、今度は洋服に足駄を穿いた男の後姿が二臺の俵を遠く前に遣り過して、蛇の目傘と並んで、ゆるく歩いて行つた。草の生えた溝に沿つた長い長い路に雨が横しぶきに降りかゝつた。

不安

—

頭腦が少し變だと氣が附く。何もこんな不安に思ふ理由が無い。日は照つてる、人は往來して居る、電車は駛つて居る、兩側の家屋は並んで居る。いつもに變つたことは無い。

己が何も人殺をして、お尋ね者になつて居るわけでも無い。また非常に不名譽なことをして、新聞で二號活字で書かれて、社會的自殺を宣告されたといふ次第でもない。さうかと謂つて別に心配になるといふやうな事件は露ほども思ひ當らない。女房は肥つて莞爾して居るし、餓鬼共は達者で、わるあがきをして居るし、月末の勘定もまア充分で、ごまかせば茶屋酒の一杯位は飲める。何う考へても不安の理由が無い。

向うに乗つてる奴、厭に人の顔をじろく／＼見やがる。御用だ！ とか一寸來いと云つて、己を引立て、行きさうだ。罪惡とも意識しないことが非常な罪惡であつて、引立てられて行くと、群集が己の後をぞろ／＼と跟いて來る。破廉恥漢！ 不徳漢！

『もうお了ひだ！』

と思ふと、ぶる／＼慄へた。

馬鹿奴！ 何て人の心が解るものか。己の腹を讀まうと思つたつて、さう簡単に解つて堪るものか。

秘密、人間の秘密が自分の他に誰にわかる。

其男は探偵らしい男だった。フランネルの單衣を着て、麥藁の安帽子を冠つて居た。隣に銀行員らしいハイカラが居た。其奴も己の顔を見てる。其隣の奴も、又其の隣りの奴も己の顔を見てる。娘盛の女學生まで己の顔をちつと見詰める。身の置き所がないやうに思はれる。恐ろしい恐ろしい力が四方から自分を壓迫して、世界の隅に押しつけられて、もう身動きが出来ないやうな氣がする。不安で不安で爲方が無い。

何か怪まれるやうなものが自分の身の周圍にあるのではないかと思ひついた。慌て、帽子を取つて見た。何も無い。胸から肩あたりを見廻した。其處にも何も無い。顔から頭も撫でて見た。矢張何も無い。彼奴め、まだ見て居やがる！

己の眼が何うかしたのか。己の眼では人の眼で見えるものが見えなくなつたのか。己の頭腦では人の考へることが考へられぬやうになつたのかと疑つた。

不安

駿河臺下に來ると、彼奴は下りた。ほつと呼吸を吐いた。

二

己は何故こんなに不安だ？

己は罪惡を犯した覚えは無い——どころか、己は善事を爲てる。犠牲の尊いことをも知つてる。道德心は人一倍發達してる。イヤ世間もそれを認めて居る。

それに己は多少の名聲もある。

安心して居れ！ と神經の中のある分子が叫ぶと、すぐ續いて、

『安心して威張つて居れ！ 酒でも飲め！ 女でも買へ！』
と神經が皆餅の如く應じた。

三

女の白い腕が何だ。女の臭い髪が何だ。女の柔かい肌が何だ。世の中には色盲といふことがあると同じ時に、色情狂と謂ふことがある。貴様のやうなことを考へる奴は千人に一人、萬人に一人も無い。皆な平々凡々に暮して居る。柔かい膚に觸れても平氣で居る。白い腕を見ても感じが無い。黄い埃の中に、折

靴でも抱えて、赤いネクタイでもして、家に歸つて女房にちやほやされて、それで満足して居るのが普通だ。それが人間だ。少くとも人間の多數だ。

病氣だ、病氣だ。

昨日、女房が心配して、近所の醫師に懸つたら何うですと言つたことを思ひ出した。己は本當に病氣かしらと思つた。不安がまた恐ろしい力で押寄せて來た。

非常に危険の状態にあることを自覺した。かういふ時に、人間は自殺するのもかも知れぬと思つた。不圖チエホフの書いた『ウロージヤ』といふ小説が頭に上つた。苛々した、絶望した青年がピストルを咽喉に當てながら、隣室の話聲に耳を欬て、居るといふ件が歴々と眼に浮んだ。ひき金を引くと同時に凄じい音がした。

いつか甲武の電車に乗つて居た。矢のやうに電車は駛つた。砲兵工廠の高い煙突からは黒い凄じい煙がもくもくと簇つて居る。赤煉瓦、二階屋、二階の窓、屋根の上の物干、張物をして居る女のメリンス友禪の帯、それが不安の念と一緒になつて、ごたごたと早く早く眼の前を通る……。

群集が自分を取圍む。罵る聲が騒々しく四邊に聞える、丈の高い大男が拳骨を振上げて自分を撲る。『こんな奴は撲り殺して下へ！』『風上に置けない馬鹿者だ！』『色狂』などとさまざま罵倒が耳に入る。耳ががんぐりする。頭が惑亂する。眼がちらちらする——ふと氣が附くと電車は暗いトンネルの

中を駛つて居る。

トンネルの中を出ると、いつも一緒になる屬官らしい男が隣の男と平凡な話をして居るのが眼に留つた。

『いつも今頃お歸りですか。』

『今日は少し遅い方です。』

『朝は?』

『大抵七時半です。』

『役所まで何分お懸りですか?』

『四十分あれば充分です。君の方は?』

『僕の方は五十分は何うしても懸る。』

『奥さんもお子さんも皆な御機嫌が好いですか。』

『え、有難う、お蔭で。』

『二番目のはお可愛くなつたでせうな。』

『腕白になつて困り切りますよ。』

こんな平凡な會話である。これとこの己の不安とは大變な違ひだと思つた。大變な違ひでも何でも己

も人間だと思つた。

四

電車を下りて歩いた。

四五日前宅にある荷物が着いた。人から預つたものである。繩で絡げたまゝ書齋の押入に入れて置いた。

不圖、不思議な考へが頭腦を衝いた。

そんな馬鹿なことがあつて堪るものかと思つた。けれど其不思議な考へが非常に力が強い。理由なしに頭を刺る。堪らなくなつて氣が狂ひさうになる。

此頃新聞に血腥い事件が多い。三面記事には疑惑の雲がいつも暗く蔽ひ懸つて居た。それを讀んだ故か、それとも又別に理由があるのか、其荷物——自分の預つた荷物には死骸が入つて居る。しかも生々しい女の死骸!

出所もちゃんと解つて居る。託された人からも現に手紙が來て居る。其人がやがて東京に遣つて來るので、それまで他に頼む所が無いから預かつて呉れといふのだ。馬鹿! と打消して見たが駄目だ。何處かで其荷物を男が送る。其荷物を荷づくりした時のさまが見える。女が恨を呑んで齒を食ひしば

つて死んで居るのを、人の居ない野原に運んで来て、闇夜に乗じて、一生懸命に其の大きな箱の中に詰める。犬が吠えるのを聞いては手を留める。人の足音が聞えはせぬかと耳を敏てる。やがて何うやら彼うやら荷づくりをして、重いのを脊負つて、田舎町に出る。停車場近くの運送店へ行つて、暗い洋燈の下で、手を顫はしながら宛名を書く。眠さうに帳場に坐つて居た老爺が、そんなことゝは夢にも知らず、權衡にかけて、賃錢を取つて、そしてそれを家の一隅に置いた。

自分の曾て關係した女に違ひない。その死骸に違ひない！ 彼奴め、己に恨を抱いて、さうした大膽なことをしたに違ひない。其生々した死骸！

『もうお了ひだ！』

と、また胸を衝いた。

これが果してそれであるとする。己の名譽も滅茶々々だ。己は社會的自殺を宣告されてまでも己は生きて居る必要はない。災厄が來た。災厄が遂に來た。

世界がかれの爲めに皆眼を据ゑて見て居るやうな氣がする。大地も何だか動くやうで、草木の一葉すら皆な自分を敵視する。——神經は凄じく動搖した。

其死骸——もう少くとも一週間を經過した。もう腐敗して居る？ かう思ふと、其臭氣が此處まで臭つて來るやうに感じられる。其荷物を解いて、死骸があつたと假定して、其時の不愉快と恐怖と羞恥と絶望。

空想と事實とがもう全く一つになつて居た。

不安！ 不安！

五

『馬鹿ばかり仰しやる？』

とのんきな女房は笑つた。

『本當にさうぢやないだらうか。』

『本當も、行つて見ていらつしやれば解るぢやありませんか。あなた、何うかして居ますよ、

此頃は……。醫師にかゝる方が好いですよ。』

夕暮から曇つて、六月の空には蒸暑い鬱陶しい灰色の雲が蔽つた。書齋に行つて見ると、荷物は其一隅に轉ころがされたまゝ、依然として置かれてある。

腐敗した臭氣も何もしない、空想は事實でなかつたのを見て、渠はほつと長大息ためいきを吐いた。けれど渠はまだ安心が出来なかつた。何處からか災厄が來て、いつか一度は自分の一生を瞬く間に破壊し盡して了ふであらうと思はれた。

朝

一

家の中二階は川に臨んで居た。其處にこれから發たうとする一家族が船の準備の出来る間を集つて待つて居た。七月の暑い日影は岸の竹藪に偏つて流るゝ碧い瀬にキラ／＼と照つた。

涼しい樹蔭に五六艘の和船が集つて碇泊して居るさまが繪のやうに下に見えた。帆を舟一杯にひろげて干して居るものもあれば、陸から一生懸命に荷物を積んで居るものもある。此處等で出来る瓦や木材や米や麥や——それ等は總て此川を上下する便船で都に運び出されることになつて居た。その向うには某町から某町に通ずる縣道の舟橋がかゝつてゐて、駄馬や荷車の通る處に、橋の板の鳴る音が靜かな午前の空氣に轟いて聞えた。

橋のすぐ下では、船頭が五六人、せつせと竹の筏を組んで居た。

『婆様、小用が出ないか。船に乗つて了ふと面倒だからな。』

七十近い禿頭の老爺が傍に小さく坐つて居る六十五六の目のひたと旨ひた老婆にかう言ふと、

『それぢや、面倒でも今一度連れて行つて貰ふかな。』

やがて婆さんは爺さんに手を曳かれて靜に長い縁側を剛の方へ行つた。

『よくそれでも世話を見なさるな。』

これを見て居た六十五六の今一人の老爺は、傍に居た五十二三の主婦に話しかけた。

主婦は老人や子供の世話に忙殺されて居た。荷積の指圖もしなければならなかつた。送つて來て呉れた人々の相手にもならなければならなかつた。長い間住んだ土地を別れて來るに就いてのいろ／＼の追懷や羈絆もあつた。

『中々あの眞似は出來ませんよ。』

かう言つたが、丁度其時今歳十一になる弟の方が川の縁の方に駈けて下りて行くのを見附けて、

『正や、川の方に行くとは危ぶないぞ！』

白緋を着てメリンスの帯を締めた子は、それにも頓着せず、急いで川の下の方へ下りて行つた。其處にはもう十六になる兄が先に行つて居た。岸に繋がれた一艘の船には、長い間田舎家の茶の間に据ゑられた長火鉢だの、茶箆筥だのがそのまま、積まれてあつた。

『それ、あの船だぜ！』

朝

兄はかう弟に言った。

『どれや、どの船？』

『それ、火鉢があるぢやないか。』

其船の船頭は目腐れの中年の男で、今一人の若い方の船頭は頻りに荷物を運んで居た。髪を束ねた上さんは苦やら帆布やらをせつせと片付けて居た。

一家族は此處から一里ほど離れた昔の城下の士族町から來た。老人老婦に取つても、主婦に取つても長年住み馴れた土地や親しい人々に別れて來るのは辛かつた。東京に行つて、知らぬ土地の土になるのは厭だ！ かう目の盲ひた婆さんは言った。長年苦勞した種に芽が生えて、十分ではなくても、兎に角息子が月給取になつて、呼んで呉れるのは嬉しいが、東京といふ處は石の上の住居、一晩でも家賃といふものを出さずには寢られない。それよりはどんなあばら屋でも、自分の家で足を長くして寢て居る方が好い。主婦もいざとなつてからかう言ひ出した。しかし月給取になつた息子を一人都に離して置くのも氣が、りであつた。それに修業盛の弟達の爲めもあつた。

親類や知人などは一月も前から、お別れだと言つては、饅頭を打つたり肴を買つたりして、老夫婦や主婦を呼んで御馳走をした。

一人の娘は去年さる機屋に望まれて嫁にやつた。今年の四月頃から懷妊の氣味で、其の前から出るの入るのと言つて居たが、愈々上京の話が決ると、『私ばかり置いて行くのかえ、母さん、』と言つて泣きに來た。母親は『まア、何うにでもするから、兎に角體が二つになるまで辛抱してお出で。』かう宥めたり賺したりしたが、今朝發つて來る時にも、町の外れまで送つて來て、大きな腹をして、垣の處に寄りかかつて泣いて居た。

目の盲ひたお婆さんは、車に乗ると眼が眩ると言ふので、昔お國替への時乗つて來たやうな輕尻馬をわざわざ仕立て、町の通りをほつくりくと遣つて來た。『盲目でも眼が廻るのかねえ、』と誰か言つた。維新前から船の間屋の爺を知つて居るお爺さんは、朝から禿頭を光らして出かけて行つて居た。

二

船の準備がやがて出來た。

長い踏板が船縁から岸に渡された。一番先に小さい弟が元氣よくそれを渡つて、深い船の中に飛んで下りた。其處まで送つて來た婿の機屋が盲目のお婆さんを負つて續いて渡つた。お爺さん、主婦、それから便船を幸ひに東京まで乗せて行つて貰はうといふ隣のお爺さんも乗つた。

船の中はちやんと整理がしてあつた。暑くないやうに、一ところ苦が暮いてあつて、其處に長火鉢や茶箆筒が置いてある。炭取には炭が入れられてある。いつでも茶位入れられるやうになつて居た。

酒好きのお爺さんは、徳利に上酒を一升ほど入れて来たが、子供に引くりかへされぬやうにと、それを茶箆筒の隅に押付けて置いた。

『お貞、それは酒だからな………こぼさぬやうにして呉りやれ。』

かう主婦に注意もした。

『これさへありア、まア、退屈も凌げますぢや？』

隣のお爺さんとこんなことを言つて笑ひ合つた。

主婦は舅の酒には苦勞を仕抜いて来た。夫の生きて居る間は、酒の上で二人はよく親子喧嘩をした。親類に呼ばれて行く時には、屹度酔つて管を捲いた。夫に別れてからでも、町の居酒屋で泥酔して、使を受けて迎へに行つたことなどもあつた。嫁に來た當座には、何處か酒のない國に行き度いと思つた。母親はよくかう子供等に話して聞かせた。しかし此頃では年を取つてもう大分おとなしくなつた。

盲目のお婆さんは、席が定ると、懐から手拭を出して、それを例のごとく三角にして冠つた。暢氣な鼻唄が唸るやうに聞え出した。

『暢氣なものだねえ。もう鼻唄が出たよ。』

母親は其處に立つて居る次男に小聲で言つた。

岸には送つて來た人々が並んだ。門の前で別れて來た人もあつた。町の入口で別れをつげた人もあつ

た。町はづれまで來て、さらば！を言つて行つた人もあつた。其川の岸まで來たのは最も親しい人達であつた。

次男を送つて來た一人の青年は、其友達のかうして東京に出て行くのを羨ましさうに見送つて居た。

船が動き出した時、盲目のお婆さんを除いては、皆な船縁の處に顔を並べた。岸の人々も別れの言葉を述べた。

船は靜かに流を下つた。

三

其頃は汽車が今のやうに便利でなかつた。運賃も高かつた。で、この家族はかうして船で東京に行くことになつた。東京から毎日來る小蒸汽は、其頃ペンキ塗の船體を處々の埠頭はとばの夕暮の中に白くくつきりを見せて居た。

老人達に取つては、その經て來た時代の推移ほど急激なものではなかつた。此人達は大小を指して殿様の行列の後に跟いて歩いた。勤王佐幕の喧しい争鬭の時には、晝夜兼行で濱町の上屋敷に上訴に出かけて行つたこともあつた。維新の際には、若者達の出陣した後を守つて、其處此處の番所を固めた。

侍が士族となり、百姓が平民になつて、世の中は目眩しいほどに變つて行つた。實力を持つた百姓町

人が世に出て、扶持を失つた士族が零落して行くあはれなるさまをも見た。大名小路の大きな邸が長い年月に段々つぶれて畑になつて行くのをも見た。御殿のあつた城址には徒に草が長じた。

隣の老人の家柄は、今移轉して行かうとして居る家族よりは、數等すぐれた家柄であつた。昔ならば槍以上と以下とは、殆ど交際が出来ぬほど階級が違つて居た。隣の老人は二百石の家柄で暢氣に謠ひをうたつて暮して來た。それに引かへて、一方の老人は賤い處から武藝や文事を磨いて、人が驚くほど立身して、江戸家老のお氣に入りて其人ありと知られるほどの勢力のある生活を送つて來た。

しかしこの二軒は昔から隣同士に親んで居たのではなかつた。息子の死んだ後の家族を纏めて、家を買つて、其處に其の禿頭の老人が移つて來てから、まだ十年と經たなかつた。

孫達の話を老人達は常によく話し合つた。

『常さんがしつかりして居るから、お宅では仕合せぢや。』

かう家柄の方の老人は言つた。

家柄の方の家族も矢張息子に早く死なれて、孫に懸らなければならなかつた。總領は娘で、今年二十二になつて居た。田舎にはめづらしいほどの別嬪で、足利に行つて居る間に、鹿兒島生れて、其土地の中學校の教師をしてゐた男に見染められて、無理に懇望されて嫁いで行つた。一二度其婚が細君と一緒に、柴垣の奥の古い汚い茅葺家に來て泊つて行つたことなどもあつた。其時近所の評判は大變で、豪い

婚さんが出來たなど、噂し合つた。婚は綺麗な八字髻を生した立派な男で、丸髻に赤い手絡をした丈の高い細君とはよく似合つた。隣の次男は其婚が朝早く草の生えた井戸端で、眞鍮の金盃で、眼鏡を外して、頭をザブザブ洗つて居るのを見たこともあつた。

處が一年後に、懷妊した細君を里に預けて、其婚は東京へ出て行つたときり歸つて來なかつた。約束した仕送りは無論寄越さなかつた。後には手紙が附箋を附けたまゝ戻つて來た。

東京に出かけて行けば、捜す手蔓はいくらもある。中にはその居る所を教へて呉れたものもある。しかし出懸けて行く旅費もないほどその家は困つて居た。その美しい娘はもう五月近い腹をして居りながら、亂れた髪をしてせつせと機を織つて居た。其處に丁度隣の一家族の上京——で頼んで、無賃で乗せて行つて貰へるのを喜んだ。

四

『常さんがしつかりして居るから、お宅ぢやもう心配なことはない。』

隣の老人はかう主婦に言つた。

『何んなもんですか……苦勞しに東京に行くやうなものかも知れませんが。年寄に子供、力になるのは、常ばかりですから。』主婦は鳥渡考へて、『それも、月給でも澤山取れるものなら好いですけれど……』

……』

『始めからさう旨い譯には行かないぢや……。笑つて見せて、『けれど、正公も成長おほきくなつたし、定公も學問が出来るから、お貞さん、もう、安心なもんぢや。これからは樂が出来る。』

『何んなもんですか。』

主婦はかう言つた。しかし永年一人て苦勞して來た老人や子供の世話を、東京に行けば、息子と一緒にすることが出来ると思ふと、何となく肩が下りるやうな氣がした。息子と住むといふことも嬉しかつた。

『それにしても、お宅のは？……御出になる所は分つて居るのですか。』

『大抵は知れて居るのですけれどな……。何うも不都合で困るぢやな。』

『御心配ですな。』

かう主婦は同情した。

船頭は竿を弓のやうに張つて、長い船縁を往つたり來たりした。竿を當てる襦袢が處々破れて居た。一竿毎に船は段々と下つて行つた。

此附近には竹藪が多かつた。水量の多い今は巴つづ渦を巻いて流れて居るところもあつた。渡船小屋が蘆荻の深い茂みの中から見えて居たり、帆を満面に孕ませた船が二艘も三艘も連つて上つて來るのが見え

たりした。竹藪の鳥渡途絶えた世離れた静かな好い場所を占領して、長い釣竿を二三本も水に落して、暢氣さうに岩魚いよなを釣つて居る鰐の大きい麥稈帽子の人もあつた。

川に臨んで、赤い腰巻を出して、物を洗つて居る女もあつた。

二人の少年は物珍らしいので、下に坐つてなどは居なかつた。紺緋の兄と白緋の弟と二人並んで、じりじりと上から照り附ける暑い日影にも頓着せず、餘念なく移り變つて行く川を眺めて居た。

『霍亂にでもなると大變だよ』

主婦は下から首を出して、時々聲をかけて呼んだ。

兄の少年が手帳を出して、何か書きつけてゐると、其傍に、隣の老人は遣つて來て、

『おい、定公、何か出来るか……。』かう言つて聞いて見た。手帳には七言絶句の轉結だけが書いてあつた。

道具は大抵菰包にして了つた。膳も大きなのを一箇出してあるばかりであつた。晝飯には皆ながそれを取巻いて食つた。暑い日にも腐らぬやうな乾物ほもだとか鮭の切身だとかを持つて來て、それを菜にした。

『江戸では、今は松魚の盛りですな。』

『在番した時分——、勢の好いあの賣聲を聞いて、窓から皿を出して買つて食つた時分のことと思はれますな。』

少し酒を飲みながら、老人達はこんなことを言った。

午後には、主婦は連日の疲労につかれ果てたといふやうに、平生使ひ馴れた黒柿の煙草の箱を枕にして、手拭を顔にかけて、スヤ／＼と晝寝をして居た。苦の間から河風が涼しく吹いて来た。

老人連も少し酔つてやがて寝て了つた。兄の少年が船から下りて来た時には、盲目の婆さんも、鼻唄をやめて横になつて居た。晴れた日影はキラ／＼と水に反射して今が暑い盛であつた。襦袢をも脱棄した二人の船頭は、毛の深い胸のあたりから、ダク／＼汗を出しながら、竿を弓のやうに張つて、頭より尻を高くして船縁を傳つて行つた。眼の悪い方の船頭は、眼脂を夥しく出して、顔を眞赤にして居た。涼しい蔭をつくつた竹藪などはもうなかつた。

五

夕立が催して来た。

船頭は慌て、苦を責めた。其下に一家族は夕立の凄じく降つて通る間を輪を描いて集つて居た。銀線のやうな雨が水の上に白い珠を躍らしてゐるのを苦の間から少年達は見て居た。

『これで涼しくなつた。』

かう老人達が言つた。

夕立の霽れた時には、もう薄暮の色が廣い川の上に蔽ひ懸つて居た。渡良瀬川は思川を入れて、段々大きな利根川の會湊點へと近づいて行つた。風が稍々追手になつたので、船頭は帆を低く張つて、濡れた船尾の處で暢氣さうに煙草を吸つて居る。其傍では船頭の上さんが、釜に米を入れたのを出して、川から水を汲んでせつせとそれを炊いて居たが、やがて其處から細い紫の煙が繪のやうに川に靡いた。夕照が赤く水を染めて居た。

老人達は薄暗い處で酒を飲んでゐた。主婦は酒癖の悪い爺さんが、やがて段々酔つて来て、言はないでも好いことを隣の老人に言ひ懸けてゐるのを聞いた。

隣の老人は何の準備もして来なかつた。酒も飯も黙つて御馳走になつて居た。それも困つて居るからだと主婦は思つて居た。

爺さんもそれを餘り蟲が好過ぎると思つて居たらしかつた。

『お爺さん、あんなことを言はなけりや好いのに——折角、心地よく連れて来てやつたのに。』

隣の老人が舳先の方へ行つた跡で、主婦は老爺に小聲で言つた。

『何アに、少し位言つてやる方が好い。餘り蟲が好過ぎる。』

かう言つた爺さんは、もうかなり酔つて居た。

『だつて困つて居るんだから。』

『困つて居たツて、餘りだ。瓢箪の一つ位持つて來たつて誰も悪いつて言はない……何もおれだつて、そんなことを喧しく言ふぢやないけれどな……義理と言ふものがあらア。』

其處に下りて來た兄の少年は、またお爺さんの癖が始まつたなと思つた。

螢が一つ闇の中に流れる頃には、船はもう廣い廣い利根川に出て居た。星の光に水の流るゝのが暗く綾をなして見えた。艦の音が水を渡つて聞えた。

遠い河岸には、灯が處々に點いて居るのが見えた。

其頃、栗橋の鐵橋が出來たばかりであつた。町からわざわざ其橋を見に行つたものも少くなかつた。

其噂は一家族の人々の耳にも聞えた。

『それ見ろよ、あれが栗橋の鐵橋だ。』

かう主婦が二人の少年に指して見せた。川を跨いだ大きな鐵橋は暗い夜の闇の中に其輪廓をはつきりと描いて居た。珍らしいものにあくがれて居る兄弟の心は躍らざるを得なかつた。

やがて船は近づいて行つた。橋杭に當る水音は高く聞えた。少年も老爺も主婦も其下を通る時、皆仰向いて、その大きな鐵橋を闇に透して見た。兄弟は手を延ばしてその橋杭を叩いて通つた。

六

兄弟の心は東京に憧れ切つて居た。

中でも兄は、これで多年の志が遂げられたやうな氣がした。東京に行きさへすれば、どんな目的でも達せられる。何んな豪い人にもなれる。馬車に乗るやうな立派な人にもなれる。其處には、かれの爲めに、あらゆる好運と幸福とが門を開いて待つて居るやうにすら思はれた。

其處には何んな物がかれ等を待つて居るかを知らなかつた。

川は暗かつた。岸の灯が明るく處々に點いて居た。誰か大きな聲を立て、土手の上を通つて行つた。艦の音が絶えず響く。

船の中にも蚊が居るので、主婦は準備して來た蚊帳を苫の角に引懸けて低く吊つて、其處に一緒にゴタゴタに頭やら足やらを入れて寝た。棚の上の三分の洋燈は、薄暗く青い蚊帳を照して居た。涼しい河風がをりをり吹いて通つた。

兄の方の少年は、蚊帳の中に入つても、容易に眠られなかつた。眼が冴えて仕方がなかつた。かれは船を漕いで居る船頭の船尾の處に行つて、黙つて暗い水を眺めて立つた。

一人の船頭は、マッチを闇に摺つて、大きな煙管に火をつけて、スバリスバリ遣つて居た。時々苦の

中の明るく見える船や、篝のやうに火を焚いて居る船などがあつた。

朝、人々が眼を覺した時には、船はある小さな埠頭に留つて居た。朝霧の晴れ間から、青い蚊帳を吊つた岸の二階屋の一間が見えたり、女が水に臨んで物を洗つて居るのが眺められたりした。其處に泊つて居る船も五六艘はあつた。朝炊の煙が紫に細く颯つた。

『朝の氣持は好いなア……何うだ定公。』

かう隣の老人は其處に立つて朝の川を眺めて居る兄の方の少年に言つた。

お爺さんは、

『朝酒といふものは旨いものだ。』

こんなことを言つて、朝飯の時盃を隣の老人にさした。隣の老人は二三度辭つて見たが、それでも後では四五杯受けて飲んだ。

隣の老人は、財布にいくら金の金をも持つて居なかつた。只で乗せて伴れて行つて貰へるからこそ出て来たほどの貧しい身には、世話になるは氣の毒だとは思ふが、しかし酒を買ふほどの餘裕はなかつた。船に賣りに来る大福を買つて、それを弟の少年や盲目のお婆さんに分けて遣る位の義理が關の山であつた。孫達の話が出て、上京する一家族の希望に満ちた有様とは比ぶべくもなかつた。隣の老人はいつも小さくなつて居た。他人の世話になる辛さをもつくつく感じた。

『常さんがしつかりして居るから、本當に仕合せだ』

いつもかう言つて調子を合せた。

汽船で行けば一日で到着するほどの行程だが、和船では中々さう早くは行かなかつた。暑いと言つては休み、眠らなければならぬと言つては碇泊し、荷の積替をすと言つては、岸の小さい埠頭に綱を繋いだ。荷の種類によつては、二時間近くも其岸を離れることが出来ないこともあつた。

其時は、『かう手間を取つては仕方がない、これではとても今日東京には入れない。此方はまア、船の中で、一晩位餘計に寝るのは好いとしても、常が遅いつて待つてゐるだらう。』かう主婦もお爺さんも一方ならず氣を揉んだ。お爺さんは、わざと聲を猫撫聲にして、『船頭さん、もう出しても好い時分だね、』など、聲をかけた。

ある浅瀬では、餘り暑いので、船頭が裸で水の中を泳いで居ると、船縁で見居た弟の方の少年は、堪らなくなつたといふやうに着物を脱いで、ザンブと水中に飛び込んだ。『大丈夫ですよ、私等がついて居るから。』船頭はかう言つて心配する主婦の方を見て言つた。

連日の快晴で、水の浅くなつた處などもをり／＼あつた。上りの小蒸気が白いペンキ塗の船體を暑い日影にキラ／＼させて、浅瀬につかへて居る傍をも通つて行つた。汽船では乗客を皆な別の船に移して荷を軽くして船員總が、りて、長い棹を五本も六本も浅い洲に突張つて居た。しかし汽船は容易に動か

なかつた。煙突からは白い薄い煙が徒らに立つて居た。

其日も暑い日であつた。それに風がなかつた。上りも下りも帆を揚げて居る船は一隻もなかつた。一人の船頭の胸からは脂汗が流れ、一人の船頭の眼からは眼脂めやじが流れた。人々は岸の人家や土手の樹木の移つて行くことの遅いのに段々倦んで來た。それにヂリ／＼と上から照り附けられる苦の中も暑かつた。盲目の婆さんは、襦袢一つになつて、濡して絞つて貰つた手拭を、皺の深い胸の處に當て、居た。

川に臨んで白聖造しろかぶつくりの土藏の見える處に來たのは、其日の午後であつた。此處には有名な白味淋の間屋があつた。酒も灘酒なだに匹敵するやうなのが出來た。もう持つて來た酒を大抵飲み盡した爺さんは、『船頭さん、其處に行つたら鳥渡寄せて下さいよ。餘程前からかう言つて其岸に來るのを待つて居た。』

『此處の白味淋はそりや旨いな。』
船頭達もかう語り合つた。

『買つて來て上げやせうか。』と一人の船頭が言ふのを、『何に、私が買つて來る、他に用もある。』かう言つて斷つた爺さんは、途中で船頭に飲まれるのをひそかに恐れて居た。爺さんは徳利を下げて、禿頭を日に光らせながら踏板を傳つて行つた。

七

徒歩で行けば其處から東京まで三里位しかないといふ河岸に來て、船頭はまた船を繋いだ。とても今日は東京に入ることには出來ないから、暑い中を此處で休んで涼しくなつてから出懸けようといふ船頭の腹であつた。

船に飽きた人々は皆な不平を言つたが、しかし眞夜中に東京に着いても仕方がなかつた。止むなく此處で待つことにした。

と、隣の老人は、

『甚だ失禮ぢやが……まだ日が高いし、それに今日東京に入つて置くと、都合が好いから私は此處で失禮して歩いて行かうと思ふんぢやが……』

かう言ひ出した。世話になるのも氣に懸れば、爺さんから酔つてチク／＼言はれるも辛かつた。誰も引留めはしなかつたが、しかし餘り好い心地もしなかつた。

『定公、また東京で逢はうな。』

持つて來た風呂敷包を脊負つて、古びた蝙蝠傘を持つて、すり減した朴齒の下駄を穿いて、しよぼたれた風をして、隣の老人は暇を告げて行つた。土手の上には枝を張つた大きな栃の樹があつて、其傍の霞

簀張には、午後四時過ぎの日影が照つて居た。兄の少年は其の隣の老人がとぼくと土手へ登つて行くのを見えなくなるまで見送つて居た。

『もう歩いて行かれるからつて、此處まで連れて来て貰つて、餘り勝手過ぎるのさ——』主婦はかう言つた。

『碌に錢を持たねえて、人の借りた船で、飯も酒も食つたり飲んだりして此處で下りるつて、好く言へたもんだ。』爺さんもこんなことを言つた。

八

涼しくなつた頃から、船頭は船を漕ぎ出した。もう海はさして遠くなかつた。岸には蘆荻や藻が繁つて、夕日が汀を赤く染めた。

それに幸ひに追手の夕風が吹いた。船頭は帆を揚げて、楫をギイと鳴らして、暢氣に煙草をふかした。誰の心も船のやうに早く東京に向つて馳せて居た。

古戦場だといふ高い崖の下を通る頃には、もう夕暮の薄暗い色が、廣い川一面に蔽ひかゝつた。

東京に入つて行く堀割は、それから一里ほど下つた處にあつた。それは川口といふところで、和船で交通をする時分には、随分繁華な船着であつた。かなり聞えた料理屋も二三軒はあつた。其處では田舎

にめづらしい海の魚が食へた。赤い帯を締めて戯談を言ふ女も大勢居た。藩の好い家柄の息子で女房子がありながら、此處でさういふ女に溺れて評判に立てられたこともあつた。其頃東京に出る人は、『川口に行けば、むき身汁が食へる。』かう言つて誰も楽しみにして來た。

しかし今ではわざ／＼寄つて食事をして行くものもなかつた。料理屋も段々つぶれて了つて、一番下等なのが唯一軒残つた。爺さんは此家の爺婆に昔から懇意であつた。一家族の人々は船から上つて、暗いランプのついた狭い汚い間で、兼ねて噂に聞いて居る生魚とむきみ汁とを食つた。

兄の少年の眼には曾て榮えたところとは何うしても見えなかつた。闇の田圃の中に、五六軒茅葺家があつて、其處から灯が唯ちら／＼見えた。

此處でも、船頭は矢張容易に船を出さなかつた。待ちかねて爺さんが其所在あひかを尋ねに行つた。やがて、『酒を飲んで酔ばらつてゐるやがる。』かう言つて歸つて來た。

船が出た頃には、遅く出た月がもう高くなつて居た。狭い堀割の兩側には種々な樹が繁つて、それが月の光を篩ふるして、美しい閃きを水に投げた。夜はしんとして居た。ところ／＼にかゝつてゐる船の苦の中からは灯が見えた。犬の吠える聲が四邊に響いて高く聞えた。

夏の夜は明易かつた。兩側に人家が續いたり、橋が架つたりするあたりに來る頃には、もう全く明放れて居た。

小さい艦を軽く操つて、物を賣つて行く舟もあつた。

『そら、見ろよ……あ、やつて、東京では朝早くあさを賣つて歩くんだぞ。』
母親は兄の少年に指して見せた。

『もう、此處は東京かえ？』

弟がかう訊くと、

『東京ともよ。深川ツて言ふ處だぞよ。』

少年達の眼には見ゆるものが皆なめづらしかつた。白壁の土蔵、ブリキの屋根——河の岸には綺麗な路があつて、其處を人がチラホラ歩いて居た。

たぶたぶとさして来る朝の潮、高く架けられた繪のやうな橋、綺麗な着物を着て其上を通つて行く女。ぶつつかりはしないかと思はれるほど近く掠めて行く多くの舟、大河の碧みどりに捺したやうに白く見える小さい汽船——漸く起つて来る雑然とした朝の物の響は、二人の少年の前に忙しい都會を展げて見せた。

——花袋全集 第一卷 終——

解 説

前 田 晁

この巻に收められてゐる諸篇は、殆どすべてが自然主義勃興期のもので、その製作された年月は明治四十年四月から同四十四年九月、作者が三十七歳から四十一歳までの間にわたつてゐる。『少女病』(雑誌『太陽』所載)が最も早く、『朝』(雑誌『文章世界』所載)が最も後のものである。『少女病』の次に發表されたのが『蒲團』である。

『蒲團』は明治四十年九月號の雑誌『新小説』に載つた。これを書いた時の事情は、作者自身が其著『東京の三十年』(本全集第十五卷所收)の中に書いてゐる通り、日露戦争が終つて、戦勝の影響で社會の各方面が生々と活氣を帯びて來た頃、久しく新文學の道に相携へて精進して來た島崎藤村氏の『破戒』がすでに出て世間の喝采を博し、國木田獨歩の『獨歩集』も漸く世に認められて、再版三版の好況を呈してゐたのに、自分はまだ何も作らしいものをしてゐなかつたので、獨り取残されたやうな氣がして、しきりに失望と焦燥との念に驅られてゐたところへ、『新小説』から頼みに來たので、乃ち大いに意氣

込んで書いて見ようと決心したといふのだが、此時、題材としたのが、その二三年前、日露戦争の始まる年の春から惱まされてゐた作者自身の秘かな戀であつた。

これより先き、作者は自身をハウプトマンの『寂しき人々』の主人公フォックケラートと比較し、彼れの孤獨は即ち自分の孤獨のやうな氣がしてゐたところへ、アンナ・マアルに比すべき美しい女學生が作者の門下生として現はれたのである。家庭生活に對して常に孤獨を歎じてゐた作者の胸の奥に、いつももなくほの／＼と戀が芽ぐんで來たのに不思議はなかつた。が、作者は、根がモラリストであり、センチメンタリストであり、アイデアリストであつたために、この戀は戀として清く、美しく、純潔のまゝにめでいつくしんでゐた。

ところが、そのアンナ・マアルに別に戀人が出來たので、事はそこから異様に發展して行つたのだが、作者は、でもなほ、内心の葛藤をおもてに出さずゐた。それを、此時、つひに作者はこの作で書かうと決心したのである。「世間に對して戦ふと共に自己に對しても勇敢に戦はうと思つた。隠して置いたもの、壅蔽して置いたもの、それを打明けては自己の精神も破壊されるかと思はれるやうなもの、さういふものをも開いて出して見ようと思つた。」と作者は書いてゐる。

けれども、これを書けば、その戀をすつかり破つて棄てることを覺悟しなければならぬといふのであるから、作者の決心は可なり悲壯なものであつたらう。脱稿した時には、「何だか手答があつたやう

な氣がした」と作者は書いてゐるが、「別にそれほど評判を惹起さうなどとも思はなかつた」とも書いてゐる。恐らくは、これが本音であつたらう。寧ろ作者は、其時、故郷の山の中に歸つてゐたアンナ・マアルがこれを讀んだら、と其方をこそ深く氣にしてゐたくらるであつた。

ところが、九月の『新小説』が出ると、大へんな世間の評判であつた。自然主義の主張の血と肉だ、人間のドキュメントの全文だ、エポックメイキングの名作だと、そこでもここでも論議され、禮讃された。これまで長く醗酵されて來てゐた自然主義の眞個の代表的作品が初めてここに現はれたものとして異常な衝動を讀書界に與へたのである。勿論、これまでも、作家が自己の體驗を書いたものは世間にいくらかあつたのであるが、これほどまでに赤裸々な自分をそこに投げ出したものはなかつたのである。すつばだかな自分を自分で組上にのぼせたものはなかつたのである。自分の悲しい、祕密な戀を犠牲にまでして、藝術を選んだ悲壯な覺悟を其作品に盛つたものはなかつたのである。當年の批評界の權威島村抱月は、その主宰せる『早稲田文學』において此作を評した文の中で、「この一篇は肉の人、赤裸々の人間の大胆なる懺悔録である。この一面においては、明治に小説あつて以來、早く二葉亭、風葉、藤村らの諸家に端緒を見んとしたものを、この作に至つて最も明白に且つ意識的に露呈した趣がある。美醜矯める所なき描寫が、一步を進めて専ら醜を描くに傾いた自然派の一面は、遺憾なくこの篇に代表せられてゐる。醜といふ條、己みがたい人間の野性の聲である。それに理性の半面を照らし合せて

自意識的な現代性格の見本を、正視するに堪へぬまで赤裸にして公衆に示した。これが此作の生命でまた價値である」と言つた。妥當な批評であらう。

ともかくも、人間の野性の聲は、これよりはじめて日本の文藝の上に發言權を得たかの觀があつて、この後は、たれもかれもが平氣で自分の醜なる體驗や周囲の者の性生活の描寫などをもしはじめた。自然主義の風潮はこの現實暴露の旗じるしの爲に、一層容易に一般を靡き伏さした形もあつたのである。

『蒲團』に次いで、作者は『一兵卒』（『早稻田文學』所載）、『土手の家』（『中央公論』所載）、『兄』（『太陽』所載）を發表し、やがて翌四十一年の三月の初めから『生』を『讀賣新聞』に連載しはじめた。

『一兵卒』は作者が日露戦争に私設寫真班の一員として従軍した折の觀察と體驗とから成つた作で、大戦争の中で小さく死んで行く哀れな一兵卒の死を描いて、それとなく人生の意義を語つてゐるところに、作者の主張してゐた客觀的描寫の好個の一標本が見られるといはれたものである。『土手の家』は利根川べりの淫蕩を極めた一家の零圍氣の中で性に目覺め行く一少女を描いて、自然の力の人知れぬところにも常に鬱勃としてゐることを示唆してゐる。同じく純客觀的の作品で、くつきりと描いて見せたといつて世評が高かつた。『兄』は肉身の死に會して、追慕の情に堪へず、共に經て來た苦しい悲しい辛い過去の日の追懐に涙を新たにしたものだが、ここに見る感傷は、すでに『少女病』時代のものとは

全く其性質を異にしてゐた。

かくて、『生』を書きはじめた頃には、作者はすでに自然主義作家としての地歩を十分に占めて、更にここで、一押し、うんと押せば、相當な作を一つ出せば、その文壇的位置はいよ／＼完全に動かすべからざるものとなるべき状態となつてゐたのである。作者が其著『東京の三十年』の中の『生』を書いた時分の章に、「今にして全力を擧げなければ、いつ再びかうした機會が來るだらう。かういふ風に私は思つた」と書いてゐるのは其意味である。

ちやうど、一方では島崎藤村氏の『春』が、『朝日新聞』に連載されてゐた時で、これが作者に一層緊張した氣持を起させたといふ事も多分あつたであらう。島崎氏は作者に取つて、文壇生活における最も好い伴侶であつたと同時に、また、最も善い意味における競争者でもあつたのである。

自然主義の作者、といふうちに、とりわけ此作者は、『逼真』をモットーとして、『自然の再現』の完全に行はれた作品をこそ常に作らうと志してゐた。すでに發表した『蒲團』にしても、『一兵卒』にしても、『土手の家』にしても、『兄』にしても、すべて實在の「事實」を取つて、これを赤裸々に描寫したのであるが、今度のこの『生』の題材もまた「事實」であつた。作者は同じく『生』を書いた時分の中でかういつてゐる。——『生』の題材は、私が數年前から心がけて持つてゐたものである。自分の周囲の人達のことであるだけに、想像は用ゐなくてもよかつたけれど、それだけ書きにくいとこ

ろがある。殊に母親のことに關しては情に於て忍びないやうなところがある。しかし、これを突破しないで、どうしよう。かう思つて私は何も彼もかくすところなく書かうと決心した」と。そして敢然として筆を進めて行つた。さきに『蒲團』で、すつばだかな自分を自分で組上にのぼせた作者は、今度のこの『生』では、兄の家庭のいざこざを書いて、現在の母や兄や嫂を何の用捨もなく組上にのぼせたのである。死の床にある老母を繞つてゐる四人の子女が、且つ愛し且つ憎みながら、或ひは婚し、或ひは戀し、或ひは再婚し、或ひは子を生み、以て營々として「生」の道を辿つて行くといふ現前の世相を忠實に描いたのである。「自然の再現」のためには一切の情實、妥協、粉飾を排して、そこに新らしい藝術の境地を求めようとしたのが作者の願であつたのである。

けれども、この作もまた一方で頗る好評を博すると共に、多少は例の「藝術らしくない」といふ非難をも受けずにはゐなかつた。現に同じく作者の文壇生活における最も親しい同伴者であつた國木田獨歩は、そのころ、茅ヶ崎の南湖院に不治の病を養つてゐたが、四月の末頃、吉江（喬松）君とわたしが見舞に行つた時に、たま／＼話題が其頃の一般の小説の事に及ぶと、「ねえ君、この頃の小説はつまらないね。まるでかう薬を飲まされてゐるやうなものだ。少しも旨味といふものがない。楽しませてくれない。……その極端が島崎君の『春』と田山君の『生』だ。『生』はまだそれほどでもないが、『春』は實にひどい。……」といつて、獨歩は「この鰻のやうに」と其時わたしたちが手土産に持つて行つた

蒲焼が傍にあつたのを指さしながら、「旨くて、そして身體の爲になるやうなものを欲する」と言つた。同じく新興文學の開拓者でありながら、獨歩が『生』の作者や『春』の作者と大いにちがつた氣稟の持主であつたことも窺はれるのである。

が、とにかく、『生』の作者は、「殊に死んだ母親に對する忌憚なき解剖が中でも一番私を苦しめた。母親に無限の同情を持ち、又、無限の涙をそゝいだ私だけに、一層辛かつた。モウパッサンの所謂皮剥の苦痛——さういふものを細かに私は味はせられた」と書いてゐるやうに、斷々乎として眞實を描き出さうと努力した。所謂主觀の嚴肅で、一旦解剖臺に載せた以上は、たとひそれが肉身であらうとも、いささかの用捨をもしまいとしたのである。

さういふ辛い勞作を作者がつかけてゐるうちに、文壇では硯友社同人の中で最も新らしい考を抱いてゐるといはれる川上眉山が自殺し、ついで獨歩もつひに病死した。

時代は急湍をなして移つて行つた。

作者は間もなく新興文學の代表的作家の中でも押しも押されもしない一人となつた。『生』が傑作として文壇に認められたのである。

『妻』（明治四十二年二月から新聞『日本』に連載）は思想的に『生』を承けて、第二卷に收めらるべき『縁』に先行せるものである。處女より人妻になつて行く可憐なる一人の女性が人生に目覺め行く徑路

を描いて、絢爛のうちに無限の哀愁を籠めてゐる。

其他、本能に翻弄されて、つひに飢餓のために犯した些細な罪から、我が子を殺し、自分も死なうとした無智の女を描いた『ネギ一束』（明治四十一年四月、『中央公論』所載）の如き、旦那の眼を忍んで密かに男と媾曳したのがはからずも発見されて、ユーモラスな場面を展開して見せた『弟』（明治四十一年四月、『新潮』所載）の如き、『一兵卒』と同じく、大戦争裡の一小事象を扱つた『車の音』（明治四十一年九月、『文章世界』所載）の如き、異常な神経の顫動を描いた『不安』（明治四十三年四月、『文章世界』所載）の如き、風が吹き、雨が降つて通つたにも似た人生途上の情事を捉へた『おし灸』（明治四十三年十二月、『文章世界』所載）の如き、いづれも自然主義勃興期における短篇の體様を示すものとして、それ〴〵歴史的意義があらうと考へられるのである。

（昭和十一年五月二十五日、故作者の七周忌追悼會の催された日に）

昭和十一年六月五日印刷
昭和十一年六月十日發行

花袋全集第一卷
豫約價金壹圓八拾錢

著者 田山 錄 彌

東京市小石川區竹早町三十二番地

發行者 川 俣 馨 一

東京市本所區鹿橋二丁目二十七番地ノ二

印刷者 井 上 源 之 丞



製 複 許 不

東京市小石川區竹早町三十二番地

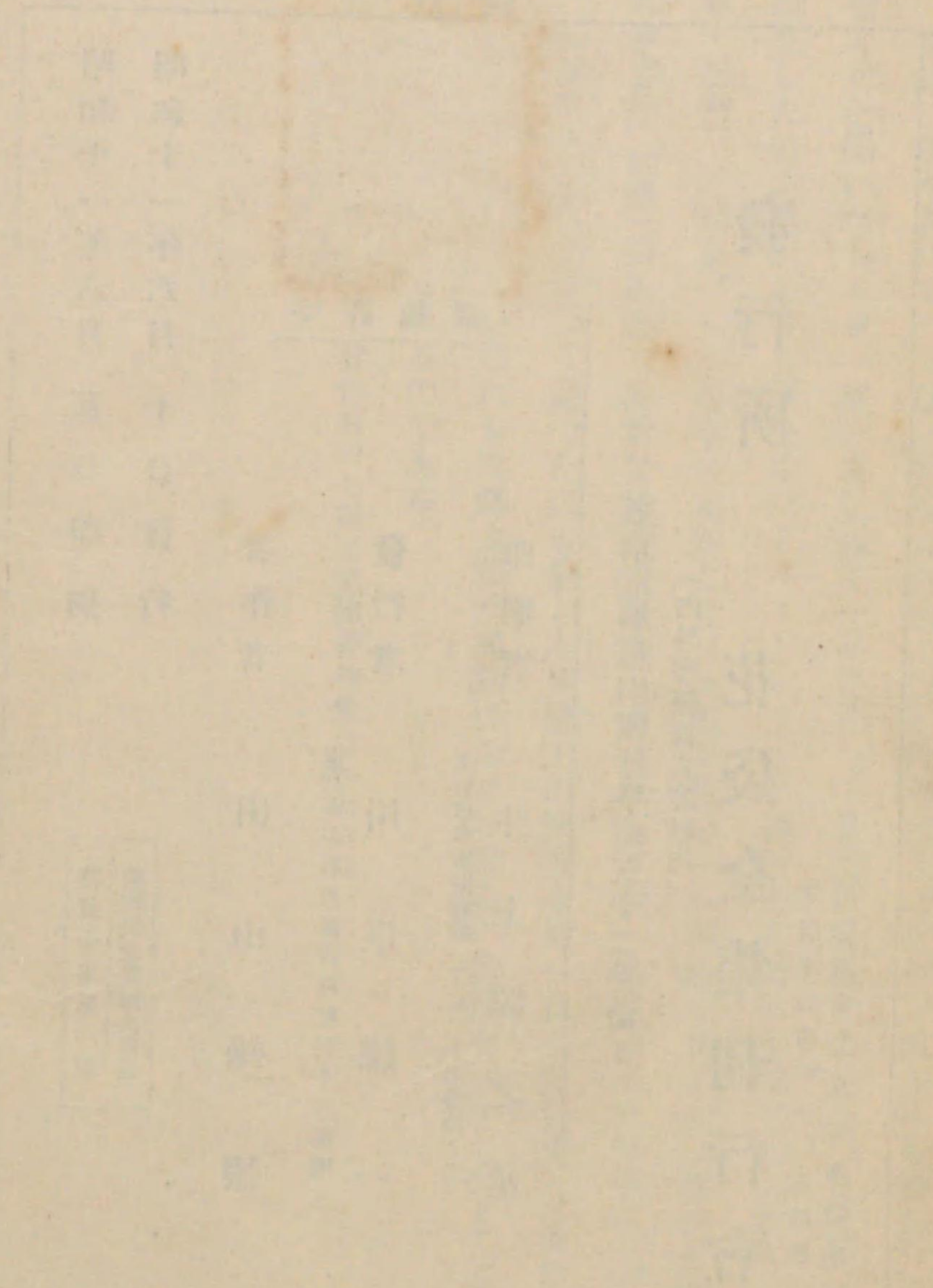
（内外書籍株式會社内）

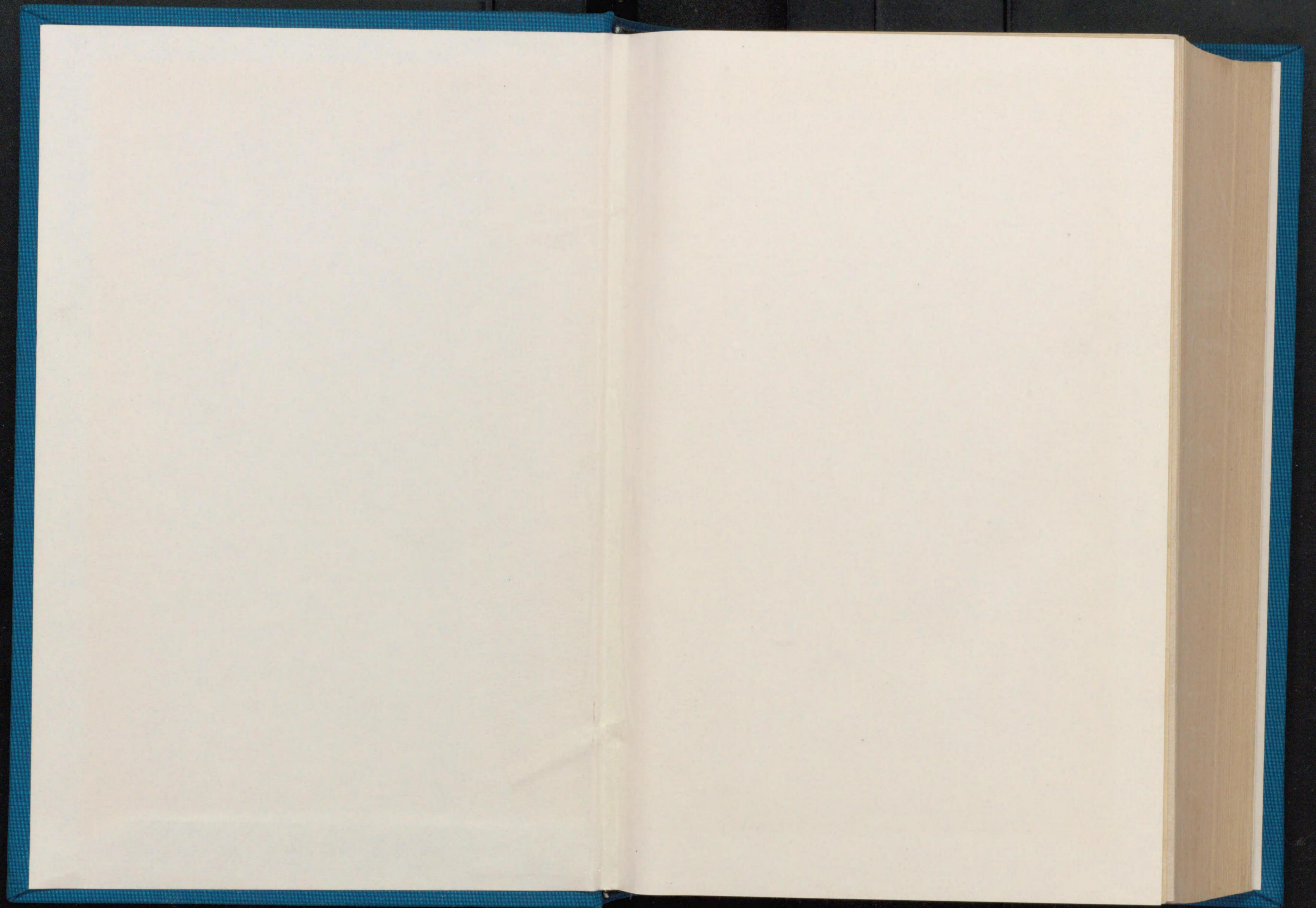
發行所 花袋全集刊行會

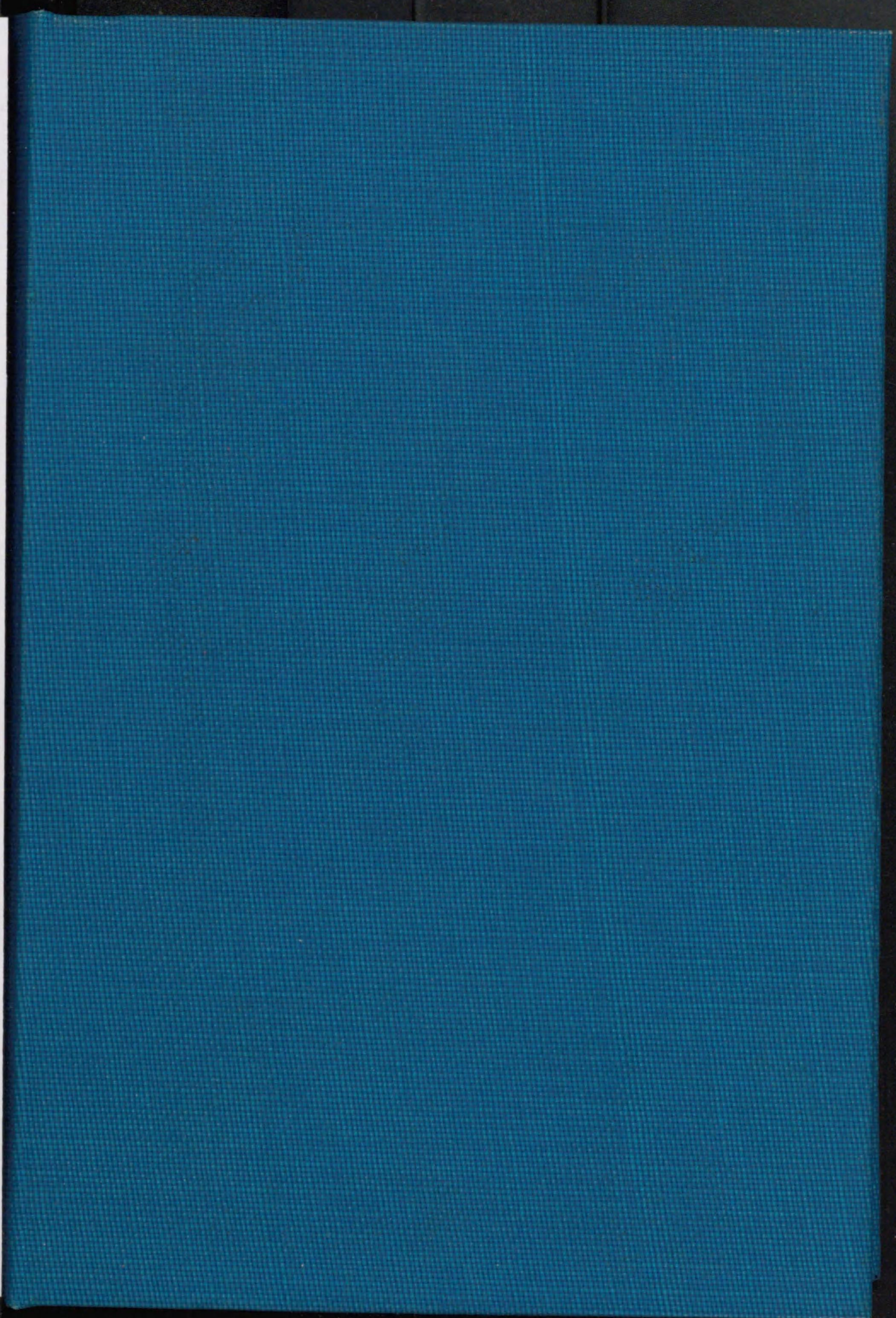
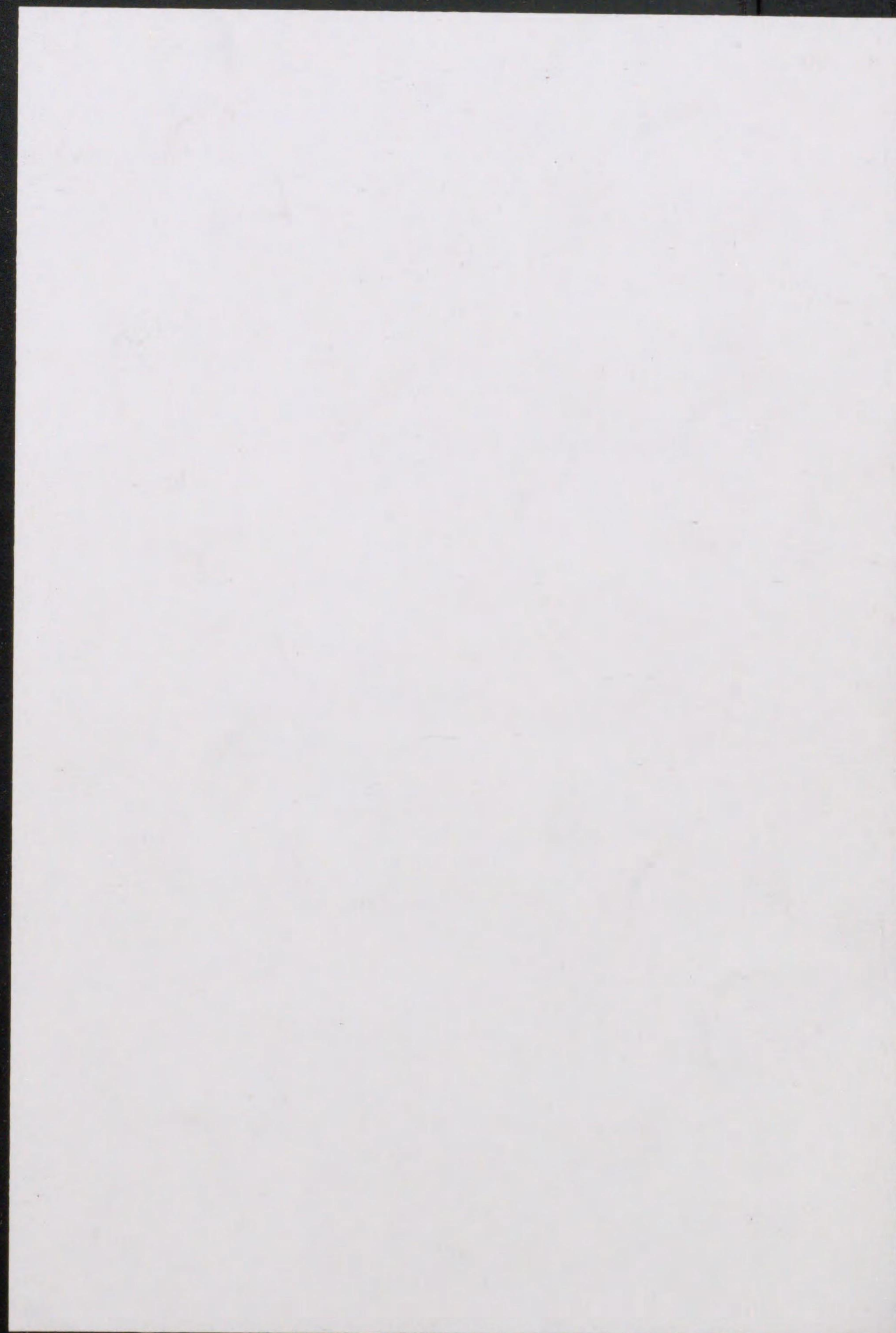
電話小石川(85)一〇五四番
振替東京二八七九〇番

（刷印場工分所本社會式株刷印版凸）

26D90





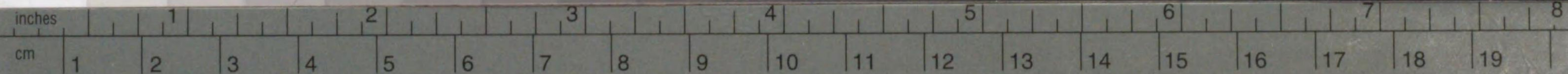


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

